

鈴鹿市郡山町

西川・郡山野・郡山野田遺跡
発掘調査報告書

2009.3

鈴鹿市考古博物館

序 文

西川・郡山野・郡山野田遺跡の発掘調査報告書をここに刊行する。

三重県鈴鹿市郡山町字野口ほかに所在する西川遺跡ほかは、宅地造成工事に伴って平成18年8月から平成19年10月までの約2箇年にわたり、事業者から鈴鹿市文化振興部考古博物館が委託を受けて発掘調査を行った。

発掘調査の結果、飛鳥・奈良時代を中心とした、良好な遺構や遺物が確認された。須恵器や土師器をはじめとした多数の土器のほか、円筒状土製品や土馬、鉄斧、石製模造品などの希少な資料も出土した。郡山町は、古代菟婁郡の郡衙推定地であり、郡衙周辺部における集落跡を考える上で貴重な資料を提供するといえる。

本書が広く活用され、考古学、古代史研究の一助となることを希望する。

調査から報告書の刊行に至るまで、有限会社 アサノや株式会社 四門、地元各位をはじめ、各方面から多大な御協力を得たことに対し、ここに深く感謝の意を表する。

平成21年3月31日

鈴鹿市考古博物館

館長 中 森 成 行

例 言

- 1 本書は三重県鈴鹿市郡山町字野口 800-1 外 12 筆に所在する、西川（第 3 次）・郡山野・郡山野田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成 19 年度に有限会社アサノが計画した、宅地造成工事に伴う事前の埋蔵文化財の記録保存として実施したものである。
- 3 発掘調査は 2006 年 9 月 8 日～9 月 15 日及び 2006 年 11 月 13 日～11 月 17 日に範囲確認調査を行い、その結果に基づいて 2007 年 5 月 23 日～2007 年 10 月 12 日にかけて、遺構の検出された約 6,400 m²の地域を対象として本発掘調査を実施した。
- 4 発掘調査は鈴鹿市が主体となって実施し、事業者である有限会社アサノから株式会社四門が委託を受けて作業の補助をした。なお、2007 年の本発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体	鈴鹿市	
	鈴鹿市長	川岸 光男
調査担当	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館	
	館長	中森 成行
	主幹兼埋蔵文化財グループリーダー	藤原 秀樹
	埋蔵文化財グループ副主幹	新田 剛・浅野 隆司
	主査	田中 忠明
	事務職員	吉田 隆史・田部 剛士
	嘱託職員	下津奈な子・業天 唯正・伊藤 洋
調査協力	株式会社 四門	
	現場代理人	松井 圭介
	調査補助員	貴志 正則
	監理技師	有村 裕治

- 5 発掘調査及び本書の作成のための整理作業の参加者は、以下のとおりである。
〔現地調査〕瀬古幸子・飯田みさを・平田松寿・砂原勝也・石井行正・平井風雅・鈴木初男・大野 忠・千葉 清・市川武雄・石井周三・岸 勝生・大井康雄・立松亜希子・安閉志づ子・市川博雄・武内藤浩・大井 剛・中川 守・鈴木隆夫・酒井かおり (順不同・敬称略)
- 〔屋内整理〕杉本恭子・永戸久美子・別府智子・加藤利恵・池田美和・横内江里 (順不同・敬称略)
- 6 現地調査は株式会社四門の協力のもと、考古博物館田部が担当した。
- 7 本書の作成に係る土器の洗浄及び注記作業は、株式会社四門が行った。その後の接合及び復元作業は、田部監修のもと上記屋内整理作業員が行い、出土遺物の実測及び浄書、遺物の撮影は田部が行った。
- 8 本書の執筆は、第 VI 章の自然科学分析 2・3 を株式会社バレオ・ラボが行った他はすべて田部が担当した。
- 9 本書の編集は、田部が行った。
- 10 航空写真撮影については、田部監修のもと株式会社アイシーが実施した。
- 11 遺構測量の 3 次元測量は、田部監修のもと株式会社サンキが実施した。
- 12 自然科学分析は、田部監修のもと株式会社バレオ・ラボが実施した。
- 13 本書における Fig. 3 は国土地理院発行の 1:25,000 地形図白子の一部を使用した。
- 14 本調査に係る出土遺物や遺構図面、写真資料等の調査記録は、すべて鈴鹿市考古博物館において保管している。
- 15 調査及び報告書刊行にあたっては地元各位をはじめ、下記の方々のお世話になった。記して感謝申し上げます。
有限会社アサノ・株式会社四門・三重県教育委員会文化財保護室・三重県埋蔵文化財センター・郡山町自治会・伊藤 仁・伊藤裕偉・藤原 学 (順不同・敬称略)

本文目次

I はじめに	1	(2) 堅穴住居	30
II 位置と環境		(3) 立柱建物	30
1 地理的環境	1	(4) 土坑	30
2 歴史的環境	1	(5) 道路状遺構	37
III 発掘調査について		(6) 溝	38
1 調査の経過	4	(7) ビット	38
2 遺跡の名称について		4 中世の遺物	39
(1) 西川遺跡	6	(1) 土坑	40
(2) 郡山野遺跡	6	5 近世の遺物	40
(3) 郡山野田遺跡	6	(1) 竈跡	40
3 調査の方法		(2) 土坑	40
(1) 地区割り	6	(3) 溝	42
(2) 遺構図面	7	6 アカ道採集の遺物	42
(3) 遺構番号	7	(1) アカ道東側集中部	42
(4) 基本層序	8	(2) アカ道西側集中部	45
IV 検出遺構		(3) その他	46
1 概要	11	VI 自然科学分析	
2 飛鳥・奈良時代の遺構	11	1 調査資料の分析にあたって	60
(1) 堅穴住居	11	2 木材の樹種同定 (株式会社 バレオ・ラボ)	
(2) 掘立柱建物	13	(1) はじめに	60
(3) 土坑	17	(2) 試料と方法	60
(4) 溝	22	(3) 結果	60
(5) 道路状遺構	24	3 放射性炭素年代測定 (株式会社 バレオ・ラボ AMS年代測定グループ)	
3 中世の遺構	24	(1) はじめに	61
(1) 土坑	24	(2) 試料と方法	61
4 近世の遺構	27	(3) 結果	61
(1) 竈跡	28	(4) 考察	61
(2) 掘立柱建物	28	4 分析結果について	61
(3) 土坑	28	VII 調査の成果と検討課題	
(4) 溝	28	1 遺跡の変遷について	65
V 出土遺物		2 古代の集落について	65
1 概要	29	3 中世の土坑群について	66
2 旧石器・縄文時代の遺物	29	4 近世の瓦窯について	66
3 古代の遺物	29	5 出土遺物について	66
(1) 器種分類について	29		

挿 図 目 次

I はじめに		Fig. 23 2号窯平面・断面図	27
Fig. 1 鈴鹿市の位置	1	Fig. 24 SB139 平面図	28
II 位置と環境		V 出土遺物	
Fig. 2 鈴鹿市の地質図	3	Fig. 25 出土石器	29
Fig. 3 周辺の遺跡	3	Fig. 26 須恵器杯類の分類	30
III 発掘調査について		Fig. 27 竪穴住居の出土遺物	31
Fig. 4 発掘調査区周辺の遺跡	7	Fig. 28 掘立柱建物の出土遺物	31
Fig. 5 調査区の地区割り	8	Fig. 29 土坑 (SK2) の出土遺物①	32
Fig. 6 遺構配置図	9・10	Fig. 30 土坑の出土遺物②	34
Fig. 7 竪穴住居①平面・断面図	12	Fig. 31 土坑の出土遺物③	35
IV 検出遺構		Fig. 32 土坑の出土遺物④	37
Fig. 8 竪穴住居②平面・断面図	13	Fig. 33 道路状遺構・溝の出土遺物	37
Fig. 9 掘立柱建物①平面・断面図	14	Fig. 34 ビットの出土遺物	38
Fig. 10 掘立柱建物②平面・断面図	15	Fig. 35 中世の出土遺物	39
Fig. 11 掘立柱建物③平面・断面図	16	Fig. 36 1号窯・2号窯の出土遺物	41
Fig. 12 土坑①平面・断面図	17	Fig. 37 近世の出土遺物	42
Fig. 13 SK31 遺物出土状況図	18	Fig. 38 アカ道東側集中部の出土遺物①	43
Fig. 14 SK90 遺物出土状況図	18	Fig. 39 アカ道東側集中部の出土遺物②	44
Fig. 15 土坑②平面・断面図	19	Fig. 40 アカ道西側集中部の出土遺物	45
Fig. 16 土坑③平面・断面図	20	Fig. 41 アカ道・遊離資料の出土遺物	46
Fig. 17 土坑④平面・断面図	21	VI 自然科学分析	
Fig. 18 土坑⑤平面・断面図	22	Fig. 42 木材組織の顕微鏡写真	60
Fig. 19 道路状遺構平面・断面図	23	Fig. 43 試料採取位置	63
Fig. 20 中世の土坑①平面・断面図	24	Fig. 44 ウィグルマッチングの結果	64
Fig. 21 中世の土坑②平面・断面図	25	VII 調査の成果と検討課題	
Fig. 22 1号窯平面・断面図	26	Fig. 45 遺構の変遷	67
		Fig. 46 須恵器杯H・Bの共伴事例	68

表 目 次

V 出土遺物		VII 調査の成果と検討課題	
Tab. 1 遺物観察表①～⑩	48～59	Tab. 4 掘立柱建物一覧	65
VI 自然科学分析		巻末	
Tab. 2 測定試料及び処理	63	Tab. 5 報告書抄録	87
Tab. 3 放射性炭素年代測定・暦年校正・ ウィグルマッチングの結果	63		

写真図版目次

PL1	写真1：中ノ川から河芸丘陵を望む／写真2：伐採前の調査区／写真3：伐採後の調査区……………70		
PL2	写真4：調査区全景①／写真5：調査区全景②……………71		
PL3	写真6：調査区全景③／写真7：西川遺跡第3次調査区全景……………72		
PL4	写真8：SH12・13 検出状況／写真9：SH12・13 カマド検出状況／写真10：SH12・13 遺物出土状況／写真11：SH12・13 完掘状況／写真12：SH9・10 完掘状況／写真13：SH64・65 完掘状況／写真14：SH145 完掘状況／写真15：SH145 カマド検出状況……………73		
PL5	写真16：SB14 完掘状況／写真17：SB15 完掘状況／写真18：SH12・13、SB16 完掘状況／写真19：SB16 完掘状況／写真20：SB25・63 完掘状況／写真21：SB66 完掘状況／写真22：SB139 完掘状況／写真23：SD33 完掘状況……………74		
PL6	写真24：SK2 半裁状況／写真25：SK2 遺物出土状況／写真26：SK3 掘削状況／写真27：SK4 掘削状況／写真28：SK5 半裁状況／写真29：SK26 完掘状況／写真30：SK31 遺物出土状況（上部）／写真31：SK31 遺物出土状況（下部）……………75		
PL7	写真32：SK34・SD33 完掘状況／写真33：SK34 遺物出土状況／写真34：SK90 掘削状況／写真35：SK90 遺物出土状況①／写真36：SK90 遺物出土状況②／写真37：SK96・SD33 土層断面／写真38：SK115 完掘状況／写真39：SK115 遺物出土状況……………76		
PL8	写真40：2区西の北東部の完掘状況／写真41：SK150 完掘状況／写真42：SK157 完掘状況／写真43：SK165 掘削状況／写真44：SK167 完掘状況／写真45：SK167 遺物出土状況／写真46：SK170 掘削状況／写真47：SK200 完掘状況……………77		
PL9	写真48：SC1 完掘状況／写真49：SC1(SD24) 土層断面／写真50：SC2 完掘状況／写真51：SC3 掘削状況／写真52：SK82 遺物出土状況／写真53：SK83 遺物出土状況①／写真54：SK83 遺物出土状況②／写真55：SK84 遺物出土状況……………78		
PL10	写真56：1号窯検出状況／写真57：1号窯掘削状況①／写真58：1号窯検出状況②／写真59：1号窯土層断面／写真60：1号窯完掘状況①／写真61：1号窯完掘状況②／写真62：1号窯完掘状況③／写真63：2号窯掘削風景……………79		
PL11	写真64：2号窯検出状況／写真65：2号窯掘削状況／写真66：2号窯通埧口断面／写真67：1・2号窯の位置関係／写真68：遺構検出作業／写真69：遺構掘削作業／写真70：現地説明会の様子／写真71：現地説明会遺物説明の様子……………80		
PL12	出土遺物①……………81		
PL13	出土遺物②……………82		
PL14	出土遺物③……………83		
PL15	出土遺物④……………84		
PL16	出土遺物⑤……………85		
PL17	出土遺物⑥……………86		

I はじめに

平成18年8月に有限会社アサノから郡山町字野口における宅地造成工事による発掘届出書の提出があった。届出箇所は周知の埋蔵文化財包蔵地(西川遺跡, 郡山野遺跡, 郡山野田遺跡)の3遺跡の範囲内であったため, 平成18年9月及び11月に遺跡範囲の確認を目的として, 鈴鹿市考古博物館が発掘調査を実施した。調査は, 事業対象地約8,400㎡に対して, 長短6本のトレンチを設定して行った。

その結果, 1トレンチを除くすべてのトレンチで遺構が検出され, 事業対象地のほとんどに遺跡が広がっていることが判明した。事業対象地の現況は山林であり, かつ, 遺構面までの深さが現地表面から20~30cmと浅いため, 抜根を伴う造成工事は遺跡の破壊に繋がるおそれがあった。そこで, 造成等の設計変更について協議を行ったが, 排水計画等の理由から変更は困難であるとの結論に至った。そこで, 開発対象面積9,200㎡のうち, 約7割に当たる約6,400㎡について本格的な発掘調査による記録保存を行うこととした。



Fig.1 鈴鹿市の位置 (S=1/20,000)

II 位置と環境

1 地理的環境

鈴鹿市は三重県のやや北よりに位置する。西側は標高約1,000mの鈴鹿山脈が南北に連なり, 東側は伊勢湾に面している (Fig.1)。北は四日市市に接し, 南は津市, 南西では亀山市と隣接する。約194.7㎡の行政域を有し, 山地12%, 丘陵12%, 台地46%, 低地30%と比較的豊かな地形を呈している。市の北西部には鈴鹿山脈の東縁に当たる山地が広がっており, これにより西側の滋賀県甲賀市と大きく隔てられている。また, 全体的に台地の多い地形であるが, 所々に采女丘陵や鈴峰丘陵, 鈴鹿丘陵, 河芸丘陵などの丘陵地が派生している。なお, これらの台地を貫通するように, 市北部には鈴鹿川が, 市南部には中ノ川が東流している。また, これらの河川に合流する内部川や御幣川などの支流も数多く存在し, 両河川の流域には比較的規模の大きい沖積地が広がっている。

今回の調査地である鈴鹿市郡山町は, 中ノ川の右岸に形成された河芸丘陵の北側緩斜面に位置する (Fig.2)。河芸丘陵の南斜面側は津市 (旧安芸郡河芸町) となっており, 郡山町は鈴鹿市の南端に該当する。また, 調査地は標高23~24m程度の中段段丘上であり, 中ノ川流域

の沖積地とは15m程の比高差を持つ。周辺には「太陽の街」をはじめとした住宅街が広がっており, 過去にも大規模な開発が頻繁に行われてきた地域である。それに併せて周辺でも発掘調査が行われている。

2 歴史的環境

郡山町は, 古くから古代の郡衙跡 (奄芸郡衙) 推定地として知られてきた。発掘調査等によって確かめられているわけではないが, 現在の酒井神社周辺に土塁状の囲いが残っていることなどから, この三芝遺跡が群衙跡推定地の1つとして挙げられている (Fig.3)。この三芝遺跡の周辺は多くの遺跡が発掘調査されており, 末野A遺跡, 同B遺跡, 同C遺跡や西高山A遺跡, 同B遺跡, 同C遺跡, 西川遺跡など, 古代の集落跡が密集する地域として知られている (中森1976, 1977, 1978, 1979, 1983)。特に末野B遺跡は, 規模の大きい掘立柱建物跡が柱筋を揃えて並ぶことなどから, 有力者の居住地として考えられており, 近くに群衙があった1つの根拠となっている。

また, 集落跡のみでなく須恵器を生産している徳居窯

跡群が、鈴鹿市三宅町から同徳居町、郡山町以南の津市河芸町一帯に広がっている。実際に発掘調査によって全容が明らかになっているものは少ないが、丘陵上に集落が展開する6世紀後半～7世紀代の窯跡が多いようである(淺生2003)。注意しなければならないことは、台地上の集落の中心である奈良時代頃の窯跡が明瞭でないことである。集落跡と窯跡の年代観には若干の齟齬が認められるが、未だ発見されていない窯跡などを含め、今後の調査の進展が待たれる。いずれにしても、郡山町の一帯は古代の官衙、集落、生産遺跡(窯跡など)がセットとなって分布する地域であり、非常に重要な地域だといえる。

このように古代の遺跡が特徴的であるが、角錐状石器が出土した塚腰遺跡など、旧石器時代の遺物も確認されている(新田・吉田2008)。また、西川遺跡第1次では縄文時代中期末頃の堅穴住居やそれに伴う土器や石器なども出土し(中森1983)、少数ながらも先史時代に遡る遺跡も見つかっている。その後、弥生時代の遺構・遺物は松山遺跡の方形周溝墓程度と希薄であるが(中森1983)、4～5世紀代の古墳時代になると松山遺跡や畑遺跡(仲見1967)、中瀬古南遺跡(中森1981)、塚腰遺跡(新田・吉田2008)など、丘陵上に堅穴住居跡が確認されるようになる。また、それに併せて丘陵の東縁に三角縁神獣鏡を副葬する赤部1号墳(赤部塚古墳)なども築かれる。5世紀以降も帆立貝式の前方後円墳である経塚古墳(真田1967、5世紀前半)や、西高山古墳群(中森1983、5世紀前半～後半)、寺谷古墳群(5世紀後半～6世紀前半)、茶臼山古墳群(6世紀前半～7世紀前半)、郡山大野古墳群(6世紀以降)など、多くの古墳の築造が続く。一方、5世紀代までは散見される程度であった集落跡は、6世紀後半に入ると急増し、先に述べたように奈良・平安時代まで比較的連続して営まれる大規模な集落が多くなる。

その後、9・10世紀に入ると不明な点が多い。あるいは奈良・平安時代とされる建物群がこの時期まで下ってくる可能性もあり、今後詳細な検討が期待される。なお、再びまとまった遺構が確認されるのは11世紀後半以降となる。この時期は末野C遺跡を代表とするように掘立柱建物跡が総柱となり、その周辺には区画のためと考えられる溝や井戸などが確認されるようになる(中森1979)。また、中瀬古南遺跡では土坑墓が(中森1981)、西川遺跡第2次調査は直径3m程度の不規則な土坑群などが(林2007)も見つかっている。中世後半は市内各地で城館が多く築造されているが、郡山付近では城館跡の存在は伝わっておらず、検出されている該期の遺構も少ない。唯一とっていいが畑遺跡において、大量の羽釜形土器を

出土した溝状遺構と常滑産陶器を共存する敷石遺構が確認されている程度である(仲見1967)。なお、西川遺跡第2次では江戸時代後半頃のものとして推定される瓦窯跡や土坑も検出されており(林2007)、僅かであるが近世の生産遺跡なども確認されている。

このように、郡山町一帯は旧石器時代から近世に至るまで、長期にわたって複合した土地利用が窺える地域といえ、鈴鹿市の歴史を考える上では極めて重要かつ貴重な地域といえる。

参考文献

- 浅尾卓司 2003 『徳居窯址群の須恵器生産』『Mie History』vol.14 三重歴史文化研究会
- 真田幸成 1967 『第5章 経塚古墳』『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告書』鈴鹿市文化財調査報告第1冊 鈴鹿市教育委員会
- 鈴鹿市編 2008 『1 鈴鹿市の地形・地質』『鈴鹿市の自然—鈴鹿市自然環境調査報告書—』鈴鹿市環境部環境政策課
- 鈴鹿市教育委員会編 1985 『鈴鹿市史』第一巻 史料編一 鈴鹿市役所
- 鈴鹿市教育委員会編 1993 『第3回鈴鹿市埋蔵文化財展 中ノ川流域の考古学』鈴鹿市教育委員会
- 仲見秀雄 1967 『第4章 畑遺跡』『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告書』鈴鹿市文化財調査報告第1冊 鈴鹿市教育委員会
- 中森成行 1976 『西高山遺跡発掘調査概要』鈴鹿市遺跡調査会
- 中森成行 1977 『西高山A・B遺跡調査概要』鈴鹿市遺跡調査会
- 中森成行 1978 『末野B遺跡調査概要』鈴鹿市遺跡調査会
- 中森成行 1979 『末野C遺跡調査概要』鈴鹿市遺跡調査会
- 中森成行 1981 『東遷入道路建設に伴う発掘調査概要(市道・秋永、中瀬古、郡山線)』鈴鹿市教育委員会
- 中森成行 1983 『郡山遺跡群発掘調査報告I—西高山D遺跡・西高山古墳・西川遺跡—』鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会
- 新田 剛・吉田隆史 2008 『IV.5 塚腰遺跡』『鈴鹿市考古博物館年報』第10号 鈴鹿市考古博物館
- 林 和範 2007 『IV.3 西川遺跡(第2次)』『鈴鹿市考古博物館年報』第9号 鈴鹿市考古博物館

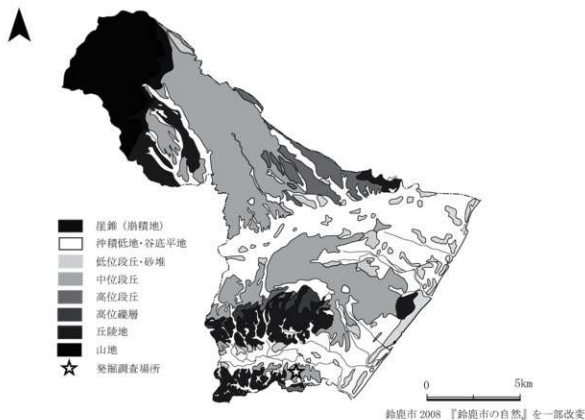


Fig. 2 鈴鹿市の地質図 (S=1/500,000)



Fig. 3 周辺の遺跡 (S=1/50,000)

Ⅲ 発掘調査について

1 調査の経過

発掘調査は平成19年5月23日から着手し、平成19年10月12日をもって終了した。約5ヶ月間の調査にて、実働110日、調査補助員のべ106.5人、作業員のべ782.5人を要した。最終的な調査面積は約6,350㎡である。

文化財保護法（昭和25年法律第214号、以下「法」とする）に係る諸報告は、法第99条に係る報告を平成19年5月23日付け鈴考第261号において行い、発掘調査に係る発見届等の諸手続は平成19年10月26日付け鈴考第966号（郡山野遺跡）、同日付け鈴考第967号（郡山野田遺跡）、同鈴考第968号（西川遺跡）で行っている。以下、調査日誌を抄録することで、調査の経過にかえる。

＜調査日誌抄＞

5月23日 発掘調査の事前に、古墳の墳丘の可能性がある高まり（以下、墳丘と仮称する）の測量調査を実施する。

6月5日 調査地の南東隅より、重機によって表土剥ぎを開始する。併せて遺構検出開始。また、人力作業によって墳丘頂部の表土除去を開始する。

6月6日 墳丘頂部の表土剥ぎをほぼ終了するも、しまりがなく古墳の盛土とするには躊躇したため、急遽墳丘の西及び南側にトレンチを掘削することとした。その結果、古墳の盛土と考えていた層序直下で近代の瓦及び陶器が出土した。これにより、古墳と考えていた高まりは後世の客土であったことが判明した。

6月7日 南東区において土坑数基の他、堅穴住居跡等を検出する。カマドラしき焼土の痕跡を確認するとともに、周辺からは遺物が多く出土する。南東側からSK2・3の掘削を開始。遺構略測図作成開始。

6月8日 SK1・4掘削開始。土坑墓かと考えられるSX5の東半分を掘削。西川遺跡第2次調査時に検出されている堅穴住居と同一遺構と考えられる、SH9の掘削開始。この他に、掘立柱建物が少なくとも3棟（SB14～17）はあると判断する。

6月11日 各遺構の掘削継続。南北に伸びる溝SD24の西側では、掘立柱建物跡1棟（SB25）のみで、全体的に遺構が希薄である。

6月12日 SK3の下位にてピット3基を検出。SK1は攪乱坑であると判断する。SH2・13検出状況を撮影。SB16の掘方はSH2・13に先行することを確認する。

6月13日 SK1～SX5の土層断面図作成後、セクション・ベルト撤去開始。SH2・13カマド検出。SD33を掘削するも深く、新しいものと判断する。

6月14日 降雨のため、終日作業中止。

6月15日 前日の降雨による雨水排出を行なう。

6月18日 降雨のため、終日作業中止。

6月19日 南西区の遺構掘削開始（SK35～SK60）。いずれも埋土のしまりがなく、木根や攪乱坑が多い。ただし、その内のSK56・58・60からは遺物がややまとまって出土する。SK7・S08・SK34の掘削完了。SK34からは須恵器杯HⅡ蓋の他、鉄斧等が出土する。

6月20日 SK5・SD6・SD24の南側を完掘。SD24東側の掘立柱建物をSB25として1棟と認識していたが、2棟が重複していることを確認し、南側をSB63とする。SB15ピット群半掘。SH12・13平面図作成開始。

6月21日 SH9の北側に、別の堅穴住居が重複していることが判明し、廃舎としていた10番を与え直し、これをSH10とする。SB15土層断面図作成。SB25ピット群半掘開始。SD11完掘。

6月22日 降雨のため、終日作業中止。

6月25日 降雨のため、終日作業中止。

6月26日 前日の降雨による雨水の排出後、SH12・13の北東側の遺構検出を実施する。主にピットのみであるが、掘立柱建物となる可能性も考える。

6月27日 SH9周壁溝掘削完了。SH12・13カマドの平面図化後、断ち割りを行なう。南東隅より掘立柱建物とは考えられない単独のピット群を掘削する。SH12・13の北側で堅穴住居跡が2棟重複して検出し、SB64・65とする。また、掘立柱建物を1棟（SB66）確認する。

6月28日 SH12・13のカマド周辺遺物の取上げ。SB14ピット群の土層断面図作成。

6月29日 SA18掘削開始。SD24掘削中、CC30グリッド付近では須恵器甕の大型破片がまとまって出土する。SD21・22掘削完了するも、遺物は出土しなかった。SK2の東半分を掘削中、西側とは底面の高さが若干異なることから、2基の遺構が重複していた可能性を考える。

7月2日 降雨のため、終日作業中止。

7月3日 降雨のため、終日作業中止。

7月4日 降雨のため、午前中の作業のみ行なう。1区北側の表土剥ぎを開始する。達磨窯1基（達磨窯1号窯）及び土坑1基、溝1条等を検出する。

7月5日 SD19・20を掘削するも、不鮮明で木根跡と判断する。SB16半掘開始。SD24のCA30付近を掘削。

7月6日 南東側に集中するピット群の掘削をほぼ終了する。SH12貼床層掘削。達磨1号窯の西側で瓦などを焼成している窯をもう1基（2号窯）と瓦の廃棄土坑と考えられる遺構（SK71）等を検出する。

7月9日 達磨窯1号窯・2号窯検出後、写真撮影を行なう。1

号室の長軸東西方向にサブ・トレンチを掘削。達磨堂周辺の土坑SK67～71の掘削完了。SK71からは近代瓦とともに陶器類も出土する。CAグリッドラインのピット群掘削及びSB16半截継続。SH10埋土掘削。

7月10日 降雨のため、終日作業中止。

7月11日 降雨のため、終日作業中止。

7月12日 降雨のため、終日作業中止。

7月13日 降雨のため、終日作業中止。台風接近のため、その対策を行なう。

7月17日 降雨のため、終日作業中止。

7月18日 1区北西側の表土剥ぎ再開。

7月19日 達磨1号室掘削し、ロストル構造が4列あることを確認。東側の残りがよい。達磨2号室に長軸（南北）方向にサブトレンチを掘削。SH12・13カマド掘削完了。中央より支脚石を確認する。

7月20日 達磨室掘削継続。2号室でもロストルを4列確認する。達磨堂周辺の土坑群及びSB66の掘削。SK31遺物取上げ。

7月23日 達磨堂土層断面図作成。SD77 東半の掘削完了。SB25・66及びその周辺のピット群を完掘する。

7月24日 SB16・25・63・66、SD24、SH12・13内ピット群掘削継続。調査区周辺の除草作業を行なう。

7月25日 1区北東の表土取り残し部分に重機を入れて再度表土剥ぎを行なった後、遺構検出を行なう。北及び東側は水田造成のため削平が激しく、検出できたものは土坑3基（SK82～84）のみである。達磨堂セクションベルト撤去開始。

7月26日 達磨堂セクションベルト撤去完了。SK82～84掘削開始。

7月27日 SK82～84の各土坑から完形に近い山茶碗が出土し、初めて中世の遺構が存在することを確認する。SB64・65掘削開始。

1区の北西側の表土剥ぎ継続し、SD33以西に遺構があることを確認する。

7月28日 達磨1号室の平面図作成。

7月30日 降雨のため、終日作業中止。

7月31日 1区内の表土剥ぎが全て終了する。SD33掘削再開。SK82～84掘削継続。SB14～16の掘削をほぼ完了する。

8月1日 SD33、SB64・65、SK82～84、SB14・16等の掘削を継続。1区南西より遺構検出開始。

8月2日 降雨のため、終日作業中止。SK82～84のベルト撤去。

8月3日 1区北西及び北区の遺構検出。

8月6日 1区北西遺構掘削開始。1区内の略測図作成。

8月7日 1区北西遺構掘削継続。2区遺構検出開始。

8月8日 2区西では高い部分で遺構を検出するが、後世の削平により1段低くなっている南側ではほとんど遺構は確認されない。

8月9日 SD77掘削完了。SK115から円筒状土製品が出土する。

8月10日 1区北西の遺構掘削継続。

8月12日～8月19日 休務日。

8月20日 1区北西の遺構掘削再開し、土坑群のほとんどを完掘する。航空写真撮影及び現地説明会の準備開始。

8月21日 1区北西の遺構群を完掘。ブルーシート及び土糞袋撤去。

8月22日 1区南東を中心に、航空写真撮影のため全体を清掃する。

8月23日 降雨のため、終日作業中止。8月23日に予定していた航空写真撮影を8月29日に順延する。

8月24日 現地説明会準備。

8月25日 現地説明会実施（参加者60名）。

8月27日 2区東の遺構検出及び遺構掘削を開始する。併せて2区東の略測図作成。掘立柱建物1棟と道路状遺構を検出する。

8月28日 2区東の遺構掘削継続。1区完掘写真撮影。降雨のため、午後から作業中止。

8月29日 降雨のため、終日作業中止。予定していた航空写真撮影は2区を含めた全域で10月初旬に実施することとする。

8月30日 2区西の遺構検出再開。降雨のため、午後から作業中止。

9月3日 調査区内の排水作業のみ実施。降雨のため、作業中止。

9月31日 2区東遺構掘削再開。2区西遺構掘削開始。2区西の北東隅で検出した竅穴住居（SH145）の東壁に、カマドの痕跡を確認する。

9月4日 2区西遺構掘削継続。2区東のほとんどを完掘する。

9月5日 1区西側に南北にのびる溝（SD03）は、SK34及びSK96の低位にあることが確実で、古代以前の遺構であることが判明し、掘削を再開する。

9月6日 SD33掘削継続。降雨のため、途中で作業中止。

9月7日 SD33完掘。遺物は土師器1点のみ。2区西遺構検出再開。

9月10日 2区西の東側から土坑（SK156・157）やその周辺のピット群の掘削を再開する。

9月11日 SK151・156・157、SD149・153、ピット等掘削継続。降雨のため、途中で作業中止。

9月12日 降雨のため、終日作業中止。

9月13日 2区西の東側に集中するピット群の掘削継続。降雨のため、途中で作業中止。

9月14日 降雨のため、終日作業中止。

9月17日 郡山野田遺跡の範囲（以下、2区西端とする）の遺構検出。

9月18日 2区西東側の遺構掘削再開。

9月19日 2区西東側の遺構掘削継続。

9月20日 SH145掘削着手。床面までの深さが2～3cmと浅く、カマドの遺存状態が悪いことが判明。

9月21日 2区西遺構掘削継続。

9月22日 SH145等土層断面図作成。
9月25日 2区西遺構掘削継続。上段の東側は終了する。
9月26日 2区西の上段中央付近の遺構掘削に着手。SX167からは比較的遺物が多く出土する。吹田市博物館藤原学氏来訪。達磨窯について指導を受ける。
9月27日 SK178～190、SX165、SD149・187等掘削。達磨窯写真撮影。
9月28日 SK178～190等を完掘する。
9月29日 2区南側の1段低くなっている範囲の遺構検出を開始。東壁付近で溝（SD207）と波板状凹凸を検出し、道路遺構と判断する。
10月1日 降雨のため、終日作業中止。
10月2日 2区西端の遺構掘削開始。降雨の影響により、午前中の作業のみで作業中止。
10月3日 2区南側のSK200～220の掘削開始。2区西端はSK200のベルトを残り完掘する。SX134写真撮影。
10月4日 SD24北端・SK92西半分・SH145カマド等掘削途中のものを完掘する。航空写真撮影及び3D測量にそなえ、1区から全体清掃を開始する。
10月5日 清掃継続。SK200ベルト撤去。波板状凹凸掘削完了。本日にて、すべての遺構掘削を完了する。
10月9日 航空写真撮影実施。発掘用具等片付け。
10月10日 3D測量開始。
10月11日 3D測量継続。
10月12日 3D測量の補足測量実施。重機にてSK61北側の風倒木及びアカ道下層部分等の補足調査を実施。本日にて、現地調査のすべてを終了する。

2 遺跡の名称について

今回の調査対象地は、郡山町字野口800-1外12筆の約9,200㎡と広範囲であるため、3つの遺跡（西川遺跡・郡山野遺跡・郡山野田遺跡）にまたがっている。以下、その範囲等について触れておく（Fig.4）。

(1) 西川遺跡

郡山町字西川795-25及び字野口795-15・17における約1,240㎡分が西川遺跡に相当する。この内、約860㎡を調査した。過去2回にわたって発掘調査されており、今回は第3次調査となる。今回の発掘調査において最も遺構が密である範囲であり、堅穴住居や掘立柱建物をはじめ、土坑やピットなどが確認された。北側にはアカ道が南西から北東方向に走っており、このアカ道以南が西川遺跡の範囲として登録されている。

(2) 郡山野遺跡

同字野口799-1、800-1・2、801-1・2・3・5・6、802-1における5,600㎡が相当する。この内、字野口801-1・6

は後世の擾乱により1段低く改変されている。平成17年の範囲確認調査の結果、遺構・遺物ともに確認されなかったために調査範囲から除外した。また、調査地のちょうど中央を東西に2分する水路が走っている。この水路は現在も利用されていることから、残した状態で調査をすることとなった。そのため、実際の調査面積は約4,700㎡となる。

郡山野田遺跡はこれまでに発掘調査されたことがなく、はじめての本格的な調査である。今回の調査によって、ほぼ遺跡の範囲すべてが確認されることとなった。遺構は中央部が後世の削平によって遺存していないため、やや散漫であったが、それでも堅穴住居や掘立柱建物、土坑や達磨窯など多くの遺構を確認することができた。

なお、西側で郡山野田遺跡と接しており、現地調査の際にはこの付近を南北にのびるSD33を境とし、以東を郡山野田遺跡、以西を郡山野田遺跡として実施した。ただし、郡山野田遺跡として調査した範囲は、緩やかに西方へ傾斜しており、本来は郡山野田遺跡が所在する地形と一続きである。そのため、平成20年1月8日付鈴鈴第1256号により遺跡範囲の変更を行い、今回の事業に伴って発掘調査した範囲までを郡山野田遺跡の範囲として登録を訂正した。

(3) 郡山野田遺跡

同字東大野1808-1に相当する約2,160㎡が相当する。この内の東側半分約840㎡、概ねSD33以西が郡山野田遺跡として登録されていたため、この範囲を郡山野田遺跡の第1次調査として発掘調査した。遺構の分布はやや疎らで、土坑やピットが僅かに検出された。

先に述べたように、郡山野田遺跡から連続するものであったため、発掘調査後に遺跡範囲を変更している。この結果、郡山野田遺跡の第1次調査区が郡山野田遺跡に吸収されてしまっているが、ここでその経緯を明記しておく。

3 調査の方法

(1) 地区割り

調査地内において、平面直角座標（国土座標）第VI系に基づき3m四方の升目（以下、「グリッド」とする）を設定し、これを基準とした。その際には、調査区内を全て被覆するように配慮し、地区割りの基点を国土座標第VI系の交点（X=131,141m、Y=48,640m）とした。その基点を北西隅とするグリッドをAA01と称した上で、3mごとに西から東へ連続する2桁の算用数字を、北から南に向かっては2桁の組み合わせからなるアルファベットを付与することにより、各グリッドの呼称とした（Fig.5）。それに従った場合、今回の調査区はグリッドBA14区から

CF33 区の範囲内に位置することになる。

なお、調査区は諸般の事情により、3つの区画に分かれており、南側の最も大きく調査した範囲を1区、北東側の狭い範囲を2区東、北から北西にかけての範囲を2区西と呼称して調査することとした。

(2) 遺構図面

遺構の断面図及び平面図については、特に遺物の出土が多かったものを中心として行った。その際は、上記のグリッドを基準とした。平面図及び断面図は基本的に1/20の縮尺とし、カマドや遺物出土状況など必要に応じて1/10の縮尺も用いた。なお、その他の平面図については、調査終了時に1cmコンタラインまでを計測可能な3次元測量を行い、この情報を基として図化を行っている。

(3) 遺構番号

調査範囲が広大なため3遺跡にまたがっているが、原則として遺構番号は通し番号とした。その順序は、調査の進行ごとに付すこととした。本書では、調査時の番号をそのまま利用することとする。なお、その番号の前には、調査の段階で認識した遺構の性格を考慮して、以下の記号を先頭に配した。そのため、遺構の番号等は時期を反映するものではなく、その後の整理作業の段階で削除されたものあるいは性格の変更された番号も存在する。

SH…竪穴住居 SB…掘立柱建物
SK…土坑 SX…性格不明の土坑 SD…溝
SC…道路状遺構 pit…柱穴（ピット）

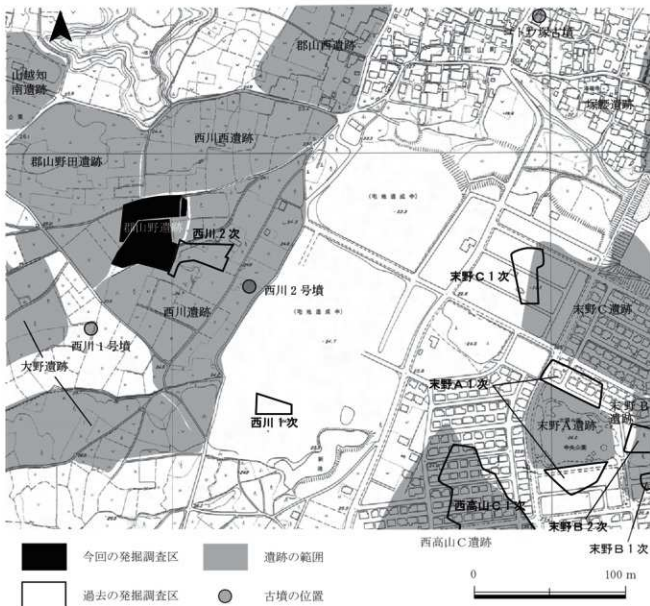


Fig. 4 発掘調査区周辺の遺跡 (S=1/2,500)

(4) 基本層序

調査区内においては、20～30 cmの表土直下に黄灰色シルト層の地山が存在し、包含層などは一切確認されていない。地山面で確認された遺構はかなり削平が激しく、竪穴住居などは検出面から数cmが遺存しているにすぎなかった。そのため、重機（0.7 m³・0.4 m³・0.16 m³・0.1 m³）を適宜使用して表土を除去し、その後は発掘作業員15名程度/日による人力作業によって作業を進めた。なお、遺構面の標高は調査区の北端で23.3 m、南端で23.5 mであり、ほぼ平坦となっている。

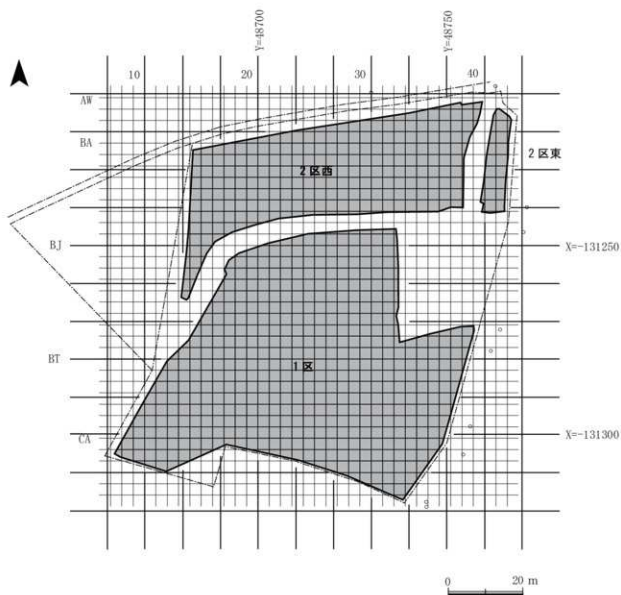


Fig. 5 調査区の地区割り (S=1/1,000)

IV 検出遺構

1 概要

今回の調査区の東側に隣接して行われた西川遺跡第2次調査の結果(林2007)から、南東側の西川遺跡の範囲には古代の集落と中世の土坑群が続いていると推定された(Fig.6)。調査の結果、その想定のとおり古代の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑などが多数検出された。それ以外の範囲では、平成18年度に実施した範囲確認調査の際に土坑やピットなどが確認されていたものの、幅1mのトレンチであったために遺跡の性格等は不詳であった。また、調査区全体がある程度の削平を受けていることは十分に想定されたが、全体を面的に調査したことから、道路状遺構や窪跡などの重要な遺構を確認することができた。

遺構としては、南東側が飛鳥～奈良時代と中世に帰属するものが多く、北側の遺構は若干年代が下って奈良～平安時代前後のものが多いようである。ただし、多くの遺構は出土遺物が限られており、比較的遺物がまわまわっているのは、SH9・10、SH12・13、SK2、SK3、SK4、SK34、SK82～84、SK90、SK95、SK96、SK115、SK157、SK167、SK173程度である。そのため、これら以外の遺構の時期を明確に比定することは困難といえる。なお、里道(以下、「ア公道」とする)として現在まで利用されてきた場所の2箇所に、古代～近世の遺物が夥しい量集まっている範囲が認められた。ここから出土する遺物は、比較的大型の破片が多く、かつ遺存状況も良好であることから、本来は近くの遺構に伴うものであったと推測される。おそらく、後世に集められ、一括投棄されたのであろう。

また、遺構の掘削前には土質及び土色等の確認を行っており、その段階で大まかに4種類(a～dに分類)の埋土を把握した。それぞれの特徴は、a類:灰褐色シルト層(10YR5/1)、しまり・粘性あり、炭化物を含む、b類:暗褐色シルト層(7.5YR3/3)、しまり・粘性あり、炭化物を含む、c類:ぶい黄褐色シルト層(10YR4/3)、しまりややあり、粘性あり、炭化物を少量含む、d類:暗褐色や黄褐色などの混在層、不均質でしまりほとんどなし、粘性若干あり、となる。この内、a・b類は確実に遺物を伴い、明らかに遺構と認定できるものであった。また、c類は主にSB25・63の埋土であり、遺物は少ないながらも遺構として認識できる。一方、d類についてはしまりもなく、遺物も極めて少量しか出土しないこと、平面形も不整形なものが多いことなどから、木の根などの攪乱という認識に至った。そのため、d類としたものと明ら

かに攪乱と認識したものについては、Fig.6において破線で表現している。

なお、古代の遺構(SH12・13やSB14・15等)の埋土と、中世の遺構(SK82～84等)の埋土も、同じa類かb類であり、時期によってそれほど堆積環境に変化がなかったようである。

2 飛鳥・奈良時代の遺構

古墳時代以前に遡る遺構は皆無で、すべてが飛鳥時代以降の遺構である。

飛鳥・奈良時代の遺構として認識したものは、堅穴住居7棟、掘立柱建物6棟、土坑、溝、道路状遺構、ピット多数などである。以下、遺物を伴う遺構を中心に記述する。

(1) 堅穴住居

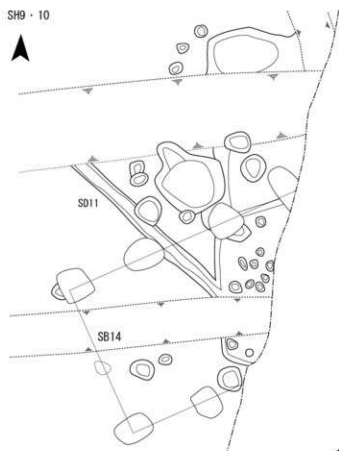
SH9・10 1区南東のCB34～CD34において、2棟が重複した状態で検出された(Fig.7)。東側の半分程度が調査区外へと続くため、詳細な規模は不明である。西川遺跡第2次調査で検出したST0234と同一の遺構だと考えられ(林2007)、その場合は約5～6m程度の隅丸方形を呈すこととなる。

検出面からの深さは0.1mで、内部に柱穴も数箇所確認した。なお、コマドは検出できなかったが、SH10として調査した北西隅には比較的大型の土坑があり、貯蔵穴の役割も推定できる。また、SD11とした細い溝状の遺構はSH9の埋土と同色・同質で、同時期に埋没した可能性が高い。僅かではあるが低くなっている北側に向かっていることから(林2007)、別の堅穴住居に付随する溝の可能性も考えなくてはならない。なお、SH9・10は出土遺物の特徴から奈良時代前半頃のものと考えられる。

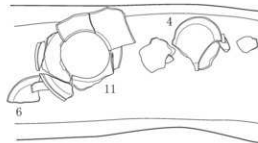
SD11のような堅穴住居に溝が付随する類例は、西川遺跡第1次調査や西高山A遺跡、同B遺跡などで確認されており、鈴鹿市内の各地で広く認められる住居構造だとはいえる。この溝は、堅穴住居の隅から地形的に低い方向へとびていることから、排水溝の機能を果たしたものと推定されているが(中森1983)、今後、他の類例とあわせて検討しなければならない問題であろう。

SH12・13 1区南東のCA31～CB33において、2棟重複した状態で検出された(Fig.7)。掘立柱建物SB16と重複するが、2棟の堅穴住居の方が新しい。一般的には、堅穴住居から掘立柱建物へと変換することが推定される

SH9・10

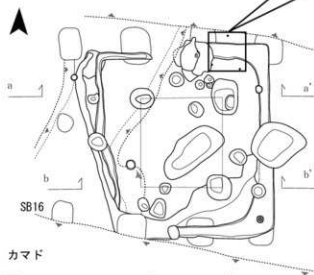


遺物出土状況図 (S=1/10)



0 50cm

SH12・13



カマド

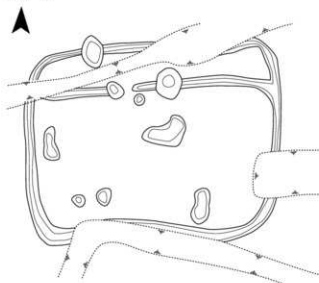


- 1 黒褐色シルト層 (7.5YR3/1) 粘土質の焼土ブロックを含む (カマドの崩落土)
- 2 褐灰色シルト層 炭化物を多く含む (燃焼部)
- 3 灰色砂混シルト層 (7.5Y5/1) 炭化物と灰褐色のブロックを少量含む (SH13 周壁溝)
- 4 3層と同質 炭化物と灰褐色ブロックを少量含まない (SH12 周壁溝)
- 5 黒褐色シルト層 (10YR3/1) 黄褐色ブロックを少量含む (SH13 周壁溝)
- 6 にぶい赤褐色シルト層 (5YR4/3) 上面は被熱により硬化する (SH12 カマド袖)
- 7 褐灰色シルト層 (10YR4/1) 黄褐色, 黒褐色, 青灰色ブロックが混在する不均質な層序 (SH12 床面整地層小)

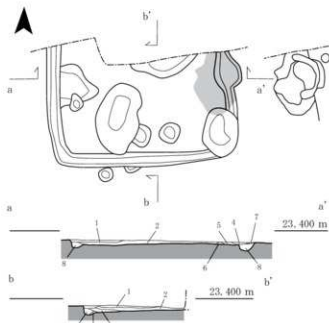
0 4 m

Fig. 7 竪穴住居① 平面・断面図 (S=1/80)

SH64・65



SH145



- 1 黒褐色シルト層 (10YR3/2) ほとんど砂礫を含まない均質な層
- 2 褐色シルト層 (10YR4/1) 黒褐色と青(緑灰色)色の混在する不均質な層序、固く締まっており、粘土の可能性がある
- 3 2層と同質、2層に比べ青(緑灰色)ブロックの入る量が少ない
- 4 黒色シルト層 (7.5YR3/1) 炭化物和焼土ブロックを多く含む(カマドの燃焼部)
- 5 黒褐色シルト層 (10YR3/1) 炭化物を多く含む、緑青灰色のカマド崩部土を混在する(炭などの焼き出した範囲)
- 6 黒褐色シルト層とカマド室体の緑灰色粘質土層の混在層
- 7 緑灰色粘土質土層 (10G6/1) 粘性強い(カマド室体)
- 8 黒褐色シルト層 (10YR3/1) 所々に黄褐色と青(緑)色シルトブロックを含む不均質な層 (SH145 周壁溝)
- 9 灰黄褐色シルト層 (10YR5/2) 直径1cm以下のシルトの均質層、水性堆積と考えられる (SH145 周壁溝)



Fig.8 竪穴住居② 平面・断面図 (S=1/80)

が(山田1981など)、ここでは逆の現象を示しており、居住形態を考える上で興味深い成果が得られた。2棟の竪穴住居はほぼ同位置に重なっており、建て替えが行われたものと考えられる。新旧関係は、SH13→SH12となる。

規模は東西4.2m、南北4.7m程度であり、検出面からの深さは約0.05mと非常に浅い。SH12の北辺の中央にはカマドが造り付けられており、四隅には支柱穴が検出されている。SH12のカマドの右側周辺を中心として須恵器の杯や甕、土師器甕などの遺物が比較的多量に出て出土している。また、東辺の中央には大型の土坑があり、建て替えに際してSH13のカマドを取り除いた痕跡と考えられる。出土遺物の特徴から、概ね奈良時代前半～中頃までの住居跡だと考えられる。

SH64・65 1区の中央やや南東のBV28～BV29で検出された(Fig.8)。同じく2棟が重複しており、建て替えが行われたと考えられる。検出面において、住居の周囲を囲む周壁溝と柱穴のみを検出したにとどまり、上部の大部分が削平されてしまっている。

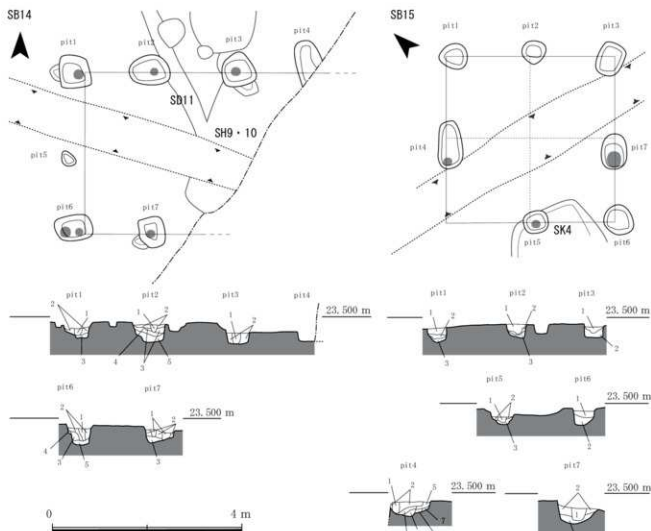
その規模は東西5.4m、南北4.2m程度であったものと推定される。なお、遺物は須恵器と土師器の小片が出土したのみであり、詳細な帰属時期を明らかにすることはできない。概ね、他の竪穴住居と同時期の飛鳥～奈良時代と考えるのが妥当であろう。

SH145 2区西の北東隅のAW37～AX38で検出された(Fig.8)。北側半分が調査区外へと続くため詳細な規模は不明であるが、東西4.0m、南北2.8m以上を確認した。検出面からの深さは0.15mであり、東辺の中央と考えられる位置でカマドの痕跡を検出した。カマドは非常に残りが悪く、その基底部分(範囲)を確認したにとどまる。また、カマドの右側に当たる南東隅で貯蔵穴と考えられる土坑が検出されている。

貯蔵穴の上面で土師器甕が1個体出土したのみであるため、詳細な時期を特定することは困難であるが、概ね奈良時代を前後する時期のものと推定されよう。ただし、SH145の周辺で検出されている他の遺構は、平安時代まで下るものが多く見られることから、やや新しい可能性も考えられる。

(2) 掘立柱建物

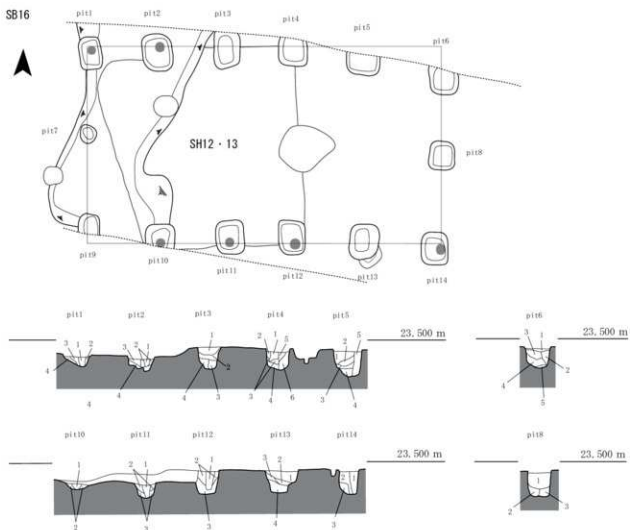
SB14 1区の南東隅のCD33～CE34で検出された(Fig.9)。東側が調査区の外へと続くため詳細は不明であるが、西川遺跡第2次調査区の成果から、東西3間×南北2間の規模となろう。柱間の距離は、約1.8m間隔で統一されている。概ね東西方向を向き、方位を意識して建てられていることが分かる。同じ方位を向く建物としてSB16とSB66があり、その関連性が窺える。SH9・10



- pit1**
- 1 黒褐色粘質土層 (10YR2/3) 灰青色ブロック混じり
 - 2 褐灰色シルト層 (10YR4/1) 黄褐色と灰褐色のブロックを多く含む
 - 3 明緑灰色シルト層 (7.5GY7/1) 褐灰色ブロック混じり
- pit2**
- 1 褐灰色シルト層 (10YR4/1) 黒褐色ブロック混じり
 - 2 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 褐灰色ブロック混じり
 - 3 褐灰色シルト層 (10YR4/1) 黄褐色と灰褐色のブロックを多く含む
 - 4 明緑灰色シルト層 (7.5GY7/1) 褐灰色ブロック混じり
 - 5 黒褐色粘土層 (7.5YR3/1) 僅かに明黄褐色ブロックを混じる
- pit3**
- 1 褐灰色シルト層 (7.5YR4/1) 炭化物を混じる, 黄褐色と緑灰色ブロックを混じる
 - 2 1層と近似 黄褐色と緑灰色ブロックが混じらない
- pit6**
- 1 褐灰色シルト層 (10YR6/1) 均質で粘性なし
 - 2 褐灰色シルト層 (7.5YR4/1)
 - 3 明緑灰色シルト層 (7.5GY7/1) 褐灰色ブロック混じり
 - 4 褐灰色シルト層 (7.5YR4/1)
 - 5 黒褐色粘土層 (7.5YR3/1) 僅かに明黄褐色ブロックを混じる
- pit7**
- 1 褐灰色シルト層 (10YR4/1) 黒褐色ブロック混じり
 - 2 褐灰色シルト層 (7.5YR4/1)
 - 3 明緑灰色シルト層 (7.5GY7/1) 褐灰色ブロック混じり

- pit1**
- 1 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 均質
 - 2 1層と同質 灰褐色ブロック混じり
 - 3 褐灰色シルト層 (10YR4/1) 黒褐色と黄褐色ブロック混じり
- pit2**
- 1 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 均質
 - 2 1層と同質 灰褐色ブロック混じり
 - 3 黒色粘質土層 (2.5Y2/1) 均質
- pit3**
- 1 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 均質
 - 2 1層と同質 灰褐色ブロック混じり
- pit4**
- 1 にぶい黄褐色シルト層 (10YR4/3) 黄褐色と灰褐色ブロック混じり
 - 2 褐灰色シルト層 (10YR4/1) 黄褐色と黒褐色ブロックを多く混じる
 - 3 黒色シルト層 (10YR2/1) 黄褐色と灰褐色ブロックを多く混じる
 - 4 2層と同質 黄褐色と黒褐色ブロックの混じる量が少ない
 - 5 褐灰色シルト層 (10YR4/1) 所々に褐色ブロックを混じる
 - 6 暗灰色シルト層 (10YR4/1) 均質
 - 7 6層と同質 黄褐色と灰褐色ブロック混じり
- pit5**
- 1 黒褐色粘質土層 (10YR3/1) 灰白色の砂を混じる
 - 2 1層と同質 青灰色ブロック混じり
 - 3 緑灰色砂混シルト層 (10GY6/1) 黄褐色と黒褐色ブロック混じり
- pit6**
- 1 褐灰色シルト層 (10YR4/1) 均質
 - 2 黒褐色粘質土層 (10YR3/1) 黄褐色ブロックを少量混じる
- pit7**
- 1 褐灰色シルト層 (7.5YR5/1) 均質
 - 2 褐灰色シルト層 (10YR4/1) 均質
 - 3 褐灰色ブロックと地山由来のブロックが混在する不均質な層序

Fig.9 掘立柱建物① 平面・断面図 (S=1/80)

**pit1**

- 1 灰黄褐色シルト層 (10YR5/2) 炭化物を少量含む
- 2 黒褐色シルト層 (10YR3/1) 黄褐色の砂質ブロックを少量含む
- 3 2層と同質 黄褐色の砂質ブロックが多い
- 4 褐灰色シルト混砂質土層 (10YR6/1) 黄褐色砂質と黒色シルト質ブロックが混在する層序

pit2

- 1 灰黄褐色シルト層 (10YR5/2) 炭化物を少量含む
- 2 黒褐色シルト層 (10YR3/1) 黄褐色の砂質ブロックが多い
- 3 褐灰色シルト混砂質土層 (10YR6/1) 黄褐色砂質と黒色シルト質ブロックが混在する層
- 4 3層と同質 黒色シルト質ブロックが多い

pit3

- 1 褐灰色シルト層 (10YR5/1) 均質
- 2 褐灰色シルト層 (10YR4/1) 青灰色ブロックを少量混じる
- 3 灰黄褐色シルト層 (10YR4/2) 黄褐色ブロックを少量含む
- 4 3層と同質 黄褐色ブロックを含まない、均質な層序

pit4

- 1 褐灰色シルト層 (7.5YR4/1) 炭化物と緑灰色ブロックを含む
- 2 明緑灰色砂混シルト層 (10G7/1)
- 3 明緑灰色砂混シルト層 (10G7/1) 黒褐色ブロック混じり
- 4 に近い黄褐色シルト層 (10YR5/3) 均質
- 5 1層と同質 砂質が強い

pit5

- 1 明緑灰色砂混シルト層 (10G7/1)
- 2 褐灰色シルト層 (7.5YR4/1) 炭化物と緑灰色ブロックを含む
- 3 明緑灰色砂混シルト層 (10G7/1) 黒褐色ブロック混じり
- 4 に近い黄褐色シルト層 (10YR5/3) 均質
- 5 褐灰色シルト層 (7.5YR4/1) 砂質が強い

pit6

- 1 黒褐色シルト層 (10YR3/1) やや不均質
- 2 灰色砂混シルト層 (10YR6/1) 黄褐色と青灰色ブロック混じり
- 3 明緑灰色砂混シルト層 (10G7/1)

0 4 m

- 4 3層と同質 黒褐色ブロック混じり
- 5 黒色粘土層 (10YR2/1) 均質

pit8

- 1 黒褐色と黄褐色の混在層
- 2 黒色粘土層 (10YR2/1) 均質
- 3 黒褐色シルト層 (10YR3/1)

pit10

- 1 黄灰色シルト層 (2.5YR4/1) 均質、ほとんど砂礫を含まない
- 2 黒褐色シルト層 (10YR3/1) 均質、ほとんど砂礫を含まない

pit11

- 1 黄灰色シルト層 (2.5YR4/1) 均質、ほとんど砂礫を含まない
- 2 褐灰色シルト層 (10YR5/1) 黄褐色ブロックを多く含む不均質な層序

- 3 黄灰色砂混シルト層 (2.5YR6/1) 所々に黄色粘土ブロックを混じる

pit12

- 1 黄灰色シルト層 (2.5YR4/1) 均質、ほとんど砂礫を含まない
- 2 褐灰色シルト層 (10YR5/1) 黄褐色ブロックを多く含む不均質な層序

pit13

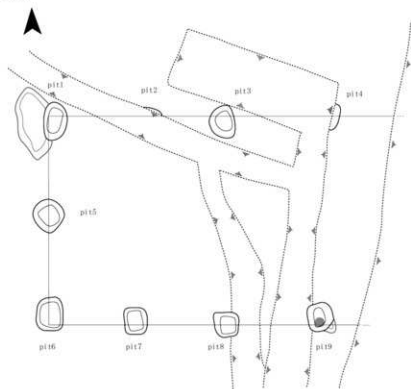
- 1 褐灰色シルト層 (7.5YR4/1) 均質、ほとんど砂礫を含まない
- 2 灰黄褐色シルト層 (10YR4/2) 所々に黄褐色砂質土を混じる
- 3 黄灰色砂混シルト層 (2.5YR6/1) 所々に黄色粘土ブロックを混じる
- 4 褐灰色と黄灰色砂質土の混在する不均質な層序

pit14

- 1 黄灰色シルト層 (2.5YR4/1) 均質、ほとんど砂礫を含まない
- 2 黒褐色シルト層 (10YR3/1) 均質、ほとんど砂礫を含まない
- 3 黄褐色と黄灰色、黒褐色ブロックが混在する不均質な層序

Fig. 10 掘立柱建物② 平面・断面図 (S=1/80)

SB66



SB25・63

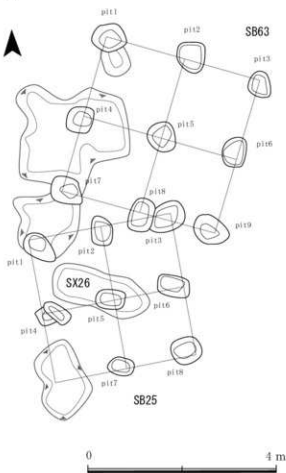


Fig. 11 掘立柱建物③ 平面・断面図 (S=1/80)

と重複しているが、SB14の方が古い。

遺物は僅かに須恵器杯Gが出土しており、その特徴から飛鳥時代後半頃の建物跡だと考えられる。

SB15 SB14の西側のCC30～CD32で検出された (Fig. 9)。2間×2間の倉庫になるものと考えられるが、中央に攪乱溝があることから、総柱建物となるかは不明である。柱間の距離は、ややばらつきがあるものの概ね1.8m間隔で、建物方位はN-47°-Eである。

出土遺物は極めて少量であるため、帰属時期を限定することはできない。ただし、重複関係からSB15の方がSB14よりも古いため、飛鳥時代の遺構と推定される。

SB16 SB15の北側のCA31～CB34で、SH12・13と重複して検出された (Fig. 10)。東西5間×南北2間と大規模な掘立柱建物である。SB14及びSB66と同様、ほぼ正方位に東西を向く。

柱間の距離は、桁行1.5m等間、梁行2.1m等間であり、柱穴の掘り方も箱形で大きくしっかりとおり、堅固な構造をしている。これらの造りから、中心的な建物跡であったものと推定される。

方位を意識している点や柱穴の掘り方など、建物の構造としては古代の建物としての特徴を持っており、須恵器杯Gなどが出土していることから、飛鳥時代後半頃のものと考えられる。

SB25・SB63 1区の南側のBZ26～CB27で検出された (Fig. 11)。一部でSB25とSB63が重複しているがSB63の方が古く、SB25が新しい。いずれも2間×2間の総柱建物であり、倉庫跡が建て替えられたものだと考えられる。建物方位はSB63がN-17°-Eで、SB25はN-11°-Wとなっている。この内SB63の方位は、後述する道路状遺構と考えられるSC1 (SD24及びSD6・23・72)とほぼ同一であり、その関連性も窺える。また、柱間の距離はSB63が1.7m、SB25が1.5mとなっており、やや規模が縮小しているようである。

SB63からは須恵器杯Hと同杯Gの蓋と考えられる破片が出土し、SB25から須恵器杯Aの底部破片が出土していることから、飛鳥～奈良時代にかけての遺構と推定される。なお、このSB25・63は、柱穴の埋土が先にc類とした黄褐色系の埋土であり、他の掘立柱建物の埋土と異なる。軸方向も異なる点などから、他の遺構とはやや時期

が異なることも考えておかなければならないであろう。

SB66 SB16の北東で検出した (Fig. 11)。東側を攪乱によって失われてしまっているが、少なくとも南北2間、東西4間以上の規模がある。SB14, SB16と同様方位を揃えて建てられている。なお、南東の柱穴 pit9には、直径20cm程度、長さ15cm程度の柱材の一部が良好な状態で遺存していた。当時の建物跡の貴重な資料であり、樹種同定と年代測定を行った。その結果の詳細についてはVI章に譲るが、SB66の柱穴からは遺物が皆無であることから帰属時期については、科学的な分析結果を期待した。これについては後述する。

(3) 土坑

SK2 1区の南東隅のCE31～CF32で検出された (Fig. 12)。SK3と重複するが、明確な切り合い関係を認識することができなかった。長径4m、短径3m程度の楕円形を呈し、検出面からの深さは0.5mと他の遺構と比べるとやや深い。埋土は2層で構成され、上下層に分けて遺物の取り上げを行っている。

遺物は上層に比較的多く、下層ではやや少ない。須恵器の種類としては、須恵器杯H、杯G、杯A、杯Bが混在して出土している他、須恵器高杯や甕、鉢、平瓶などがあり、質・量とも豊富に出土している。一方、土師器は甕が少量出土したにとどまり、須恵器との出土量の差が著しい。また、注目すべき出土遺物に土製の土馬が挙げられる。これら出土遺物の特徴から、上下層でそれほど時期差を認めることはできず、飛鳥時代後半～奈良時代初頭にかけて埋没したものと考えられる。

なお、土馬が出土していることから祭祀的な性格も考えられるが、埋土の堆積状況からは一度に埋め戻されたような痕跡は窺えなかった。

SK3 SK2の北側のCD31～CE32において、重複して検出された (Fig. 12)。直径4m程度の円形を呈し、検出面からの深さは約0.2mである。埋土はSK2と同様2層で構成され、土師器や須恵器などが出土したが、SK2程の出土量はない。須恵器の杯類を中心に、同高杯や甕、土師器甕が出土した他、陶製の紡錘車が出土している。

SK2・SK3・SK4・SX5

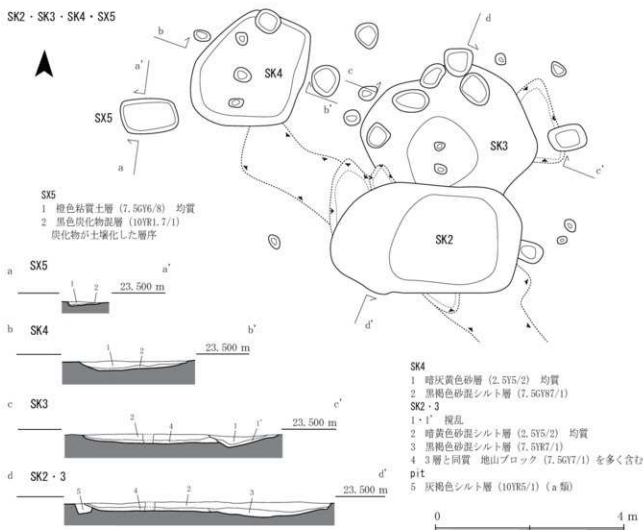


Fig. 12 土坑① 平面・断面図 (S=1/80)

なお、これらの遺物の特徴から、SK2とほぼ同時期の飛鳥時代後半～奈良時代初頭にかけての遺構だと推定される。

SK4 SK3の西側のCD30～CE31において検出された(Fig. 12)。長径3m、短径2mの楕円形で、検出面からの深さは約0.15mである。埋土はSK2と同様2層で構成され、土師器や須恵器などが出土したが量的には少ない。出土遺物の特徴からSK2・3とほぼ同時期のものだと推定される。

SK31 2区中央の南端のCB20で検出された(Fig. 13)。直径0.3m程度の小さな土坑に、底部を穿孔した土師器甕1個体が据えてあるような状態で出土した。本来は堅穴住居などの施設に付属する土坑だと推定されるが、土坑の基底部を僅かに確認したにとどまる。古代と考えられるが、詳細な時期は不明である。

SK34 1区の中心からやや南西に離れた、BV18～BW19で検出された(Fig. 15)。SD33と重複するが、SK34の方が新しい。直径3.5m程度の正円形で、検出面からの深さは0.15mと比較的浅い。埋土は1層のみであるが、須恵器の杯H蓋や土師器甕のほか、石製模造品(勾玉形)や鉄斧などが出土した。

単純に出土遺物のみをみると、古墳時代後期頃まで遡る可能性もあるが、時期比定の根拠となる須恵器杯H蓋は天井部の削りが狭いこと、口径が小さいことなどから飛鳥時代まで下らせて考える必要がある。また、これは後述するSK90における共伴関係からも、再考が必要と考える。これらのことを考慮して、SK34の時期は飛鳥時代後半頃と考えておきたい。

SK90 1区北側のBJ24で検出された(Fig. 14・15)。直径1.2m程度の円形で、検出面からの深さは0.25m程度である。比較的小さな土坑であったが、残りのよい須恵器H蓋と同杯B蓋、杯B身が共伴して出土した。近年、このような事例も若干指摘されているが(小森2005)、一括資料として提示できる点は極めて重要な成果である。

これらの共伴関係については、伊勢地域での類例は少なく今後の検討課題であるため、ここでは飛鳥時代後半～奈良時代初頭頃としておきたい。

SK96 1区北西側のBJ19～BK20で検出された(Fig. 15)。直径2.5～3m程度の不整形な形状を呈し、検出面からの深さは0.1mと極めて浅い。比較的まとまった量の遺物が出土しており、須恵器や土師器杯の形態などから奈良時代～平安時代のものと考えられる。

SK114・115 1区西側のBN16～B027で重複して検出された(Fig. 16)。SK114は長軸4m以上、短軸3～4

m程度の不整形な形状を呈する。遺物を少量含むが、木の根などの攪乱の可能性も考えられる。SK115よりもSK114が新しい。

SK115は長軸3m、短軸2.2m程度の楕円形を呈し、検出面からの深さは0.4mを測る。埋土中には細かな焼土塊と炭化物が混在しており、円筒状土製品などの特殊な遺物が出土していることから、何らかの祭祀的な遺構であった可能性も考えられる。詳細な時期は特定できないが、概ね飛鳥時代～奈良時代の頃のものであろう。

SK150 2区西の北東側のAZ36～BA37で検出された(Fig. 17)。約3m四方のやや歪んだ方形を呈す。小型の堅穴住居かとも想定して調査を進めたが、周辺に多数あ

SK31

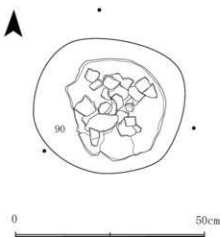


Fig. 13 SK31 遺物出土状況図 (S=1/10)

SK90

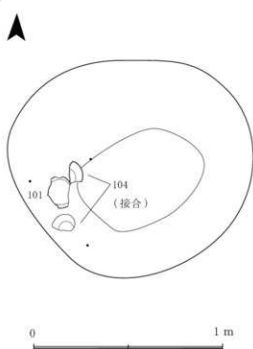
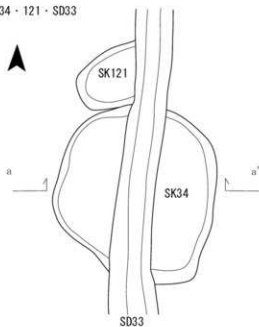
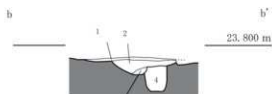
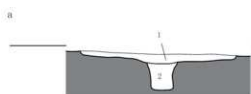
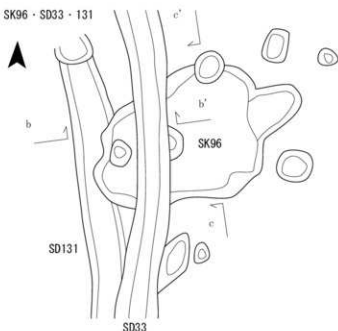


Fig. 14 SK90 遺物出土状況図 (S=1/20)

SK34・121・SD33



SK96・SD33・131



SK34・SD33

1 黒色シルト層 (10YR1.7/1) 均質 (SK34 埋土)

2 黒褐色シルト層 (2.5Y2/3) 均質 (SD33 埋土)

SK96・SD33・131

1 灰黄褐色シルト層 (10YR4/2) 均質 (SK96 埋土)

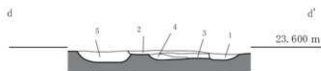
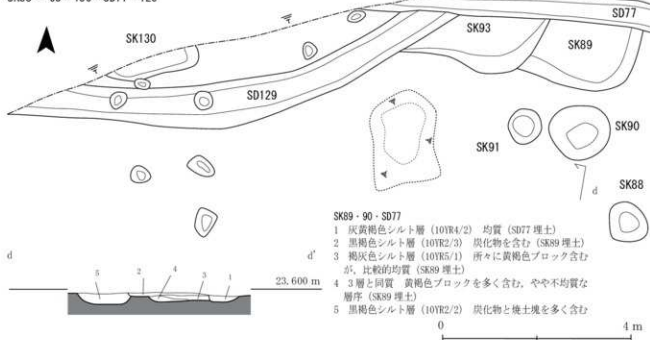
2 灰褐色シルト層 (10YR4/1) 均質、炭化物を含む (SK96 埋土)

3 黒褐色と浅黄色ブロックの混在層 (SK96 埋土)

4 黒褐色シルト層 (2.5Y3/1) 均質 (SD33 埋土)

5 pit 埋土

SK88 ~ 93・130・SD77・129



SK89・90・SD77

1 灰黄褐色シルト層 (10YR4/2) 均質 (SD77 埋土)

2 黒褐色シルト層 (10YR2/3) 炭化物を含む (SK89 埋土)

3 褐灰色シルト層 (10YR5/1) 所々に黄褐色ブロック含む

が、比較的均質 (SK89 埋土)

4 3層と同質、黄褐色ブロックを多く含む、やや不均質な

層序 (SK89 埋土)

5 黒褐色シルト層 (10YR2/2) 炭化物と焼土塊を多く含む

0 4 m

Fig. 15 土坑② 平面・断面図 (S=1/80)

るピットとの関係を明確にすることはできなかった。埋土は2層で構成されるが、検出面からの深さは0.15 m程度と浅い。土師器の破片しか出土しなかったため、詳細な帰属時期は不明である。

SK156 2区西の北東側のAY34で検出された(Fig. 17)。2 m四方程度の方形を呈すると考えられるが、擾乱されており、不鮮明であった。なお、SK156の埋土の上下両面でピットを確認している。

須恵器や土師器が出土したが、その特徴から奈良時代前後にかけての遺構だと考えられる。

SK157 2区西の北東側のAZ34～BA34で検出された(Fig. 17)。SK150やSK156と同様に、3 m四方の方形を呈す。周辺のピットとの関連性は把握できなかった。比較的遺物がまとまって出土しており、須恵器や土師器の他に黒色土器も出土した。その形態などから、平安時代前半だと考えられる。

SK114・115・116

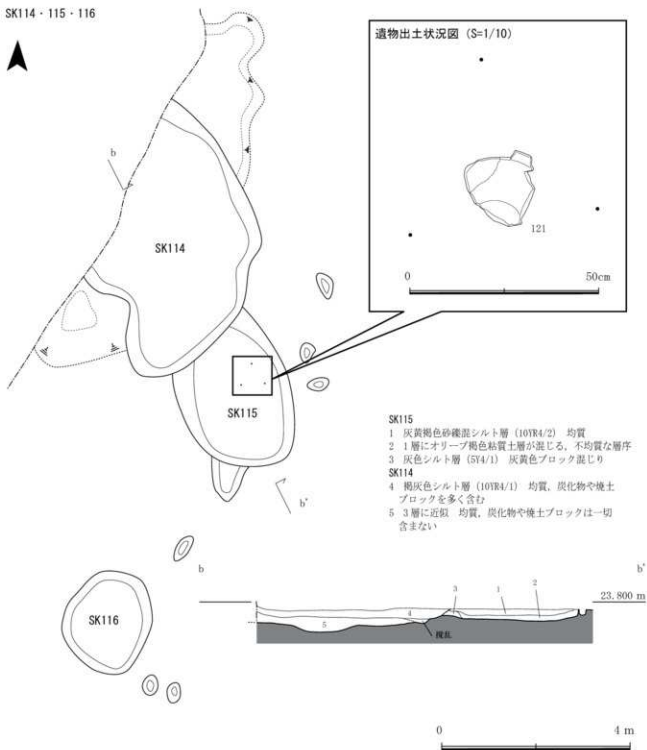


Fig. 16 土坑③ 平面・断面図 (S=1/80)

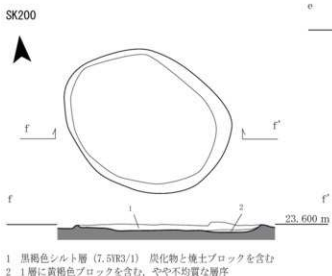
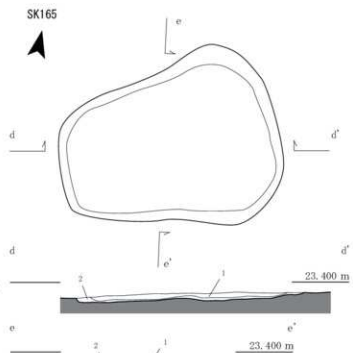
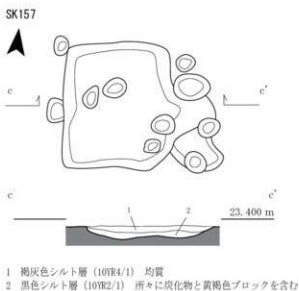
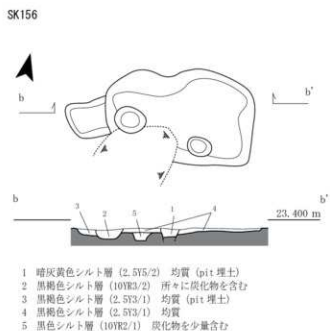
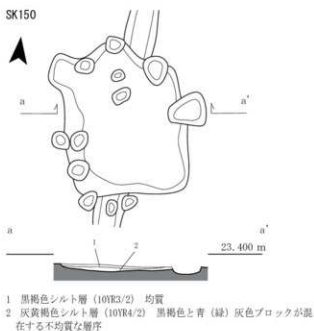


Fig. 17 土坑④ 平面・断面図 (S=1/80)

SK165 SX165として調査したものが該当する。2区西の中央北側のAZ23～BA25で検出された（Fig. 17）。長軸5m、短軸3m程度のやや不整形な楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.2m程度あり、埋土は2層で構成される。出土した遺物は少ないが、須恵器甕の大型破片と土師器の甕が出土している。詳細な帰属時期は明らかにできなかった。

SK167 SX167として調査したものが該当する。2区西の中央のBB27で検出された（Fig. 18）。SD166やSX168などと複雑に重複している。その新旧関係は、SX168→SK167→SD166となる。

SK167は不整形であり、検出面からの深さは0.2m程度ある。須恵器長頸壺の口縁部が出土した他、須恵器甕や土師器の甕、瓶などが出土している。詳細な時期比定は困難であるが、奈良時代頃のものと推定される。

SK200 2区西の西側のBE17～BF18で検出された（Fig. 17）。直径3～3.8mの円形で、検出面からの深さは約0.3mある。基本的に1層のみであり、土師器や須恵器の杯、甕の破片が出土した程度である。概ね古代の遺構であるが、詳細な時期は分からなかった。

(4) 溝

SD33 調査区全体の中央やや西を南北に貫通するSD33を1条確認した（Fig. 6）。これは1区の北西におけるSK96との重複関係から把握したものであり、SK96以前に遡る溝である。50cm程度の幅で、総延長85m以上もある。検出面から60～70cmもの深さがあり、断面も非常にしっかりとした逆台形あるいは箱形である。部分的に断ち割りを行った当初は、重機によって掘削されたものかと悩むほどのものであった。方位はN⁴-Eと正方位に近い値を示す。

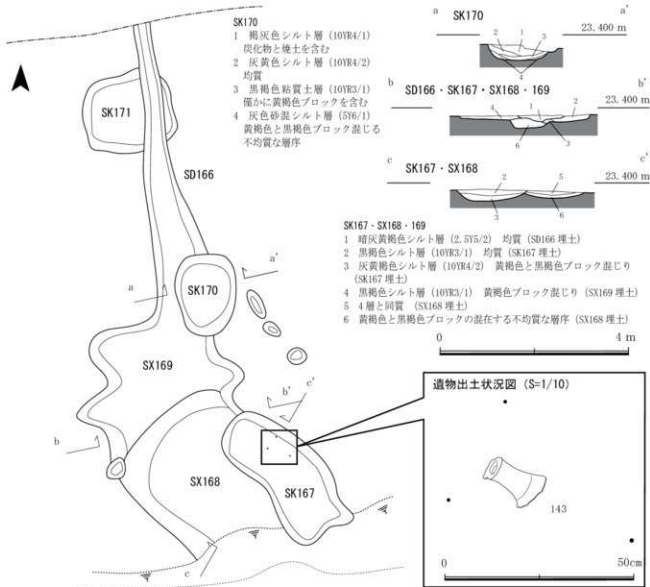


Fig. 18 土坑⑤ 平面・断面図 (S=1/80)

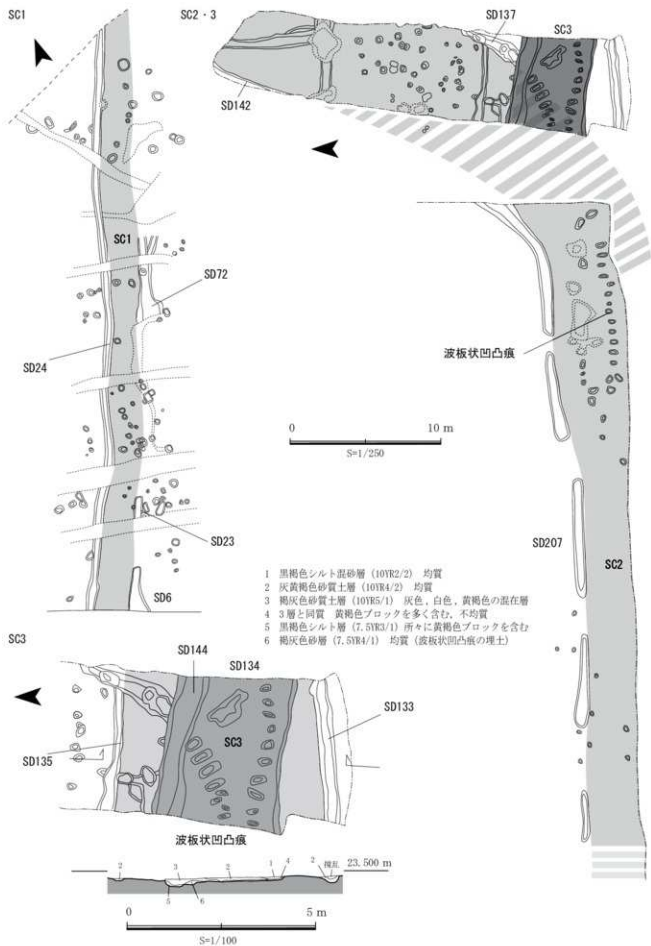


Fig. 19 道路状遺構平面・断面図 (S=1/100・250)

須恵器杯H身と水晶の破片が各1点出土しており、これらの特徴から概ね飛鳥時代頃の溝であろうと考えられる。

(5) 道路状遺構

SC1 1区南東において南西から北東方向に平行して検出された2条の溝（東側のSD6・23・72と西側のSD24）の間を道路とした（Fig.19）。現地調査時には道路ではなく別々の溝だと認識していたが、2条の溝が平行していることから道路状遺構だと認識を改めた。

道路幅は溝の芯々で2.5m程度であり、方位はN-20°～22°Eとなる。東側の溝はやや幅広でかつ残りが悪いため所々しか検出できていないが、西側の溝は断面逆台形を呈し、比較的しっかりとした溝だといえる。埋土が均質な堆積であることから、溝の間に築地層や土塁などの施設があったものではないと認識している。なお、SD63がこの道路の方位軸を意識して建てられているようである。

出土物には、須恵器の杯や壺などがあり、奈良時代前後の遺構だと考えられる。ただし、部分的に攪乱されている範囲からは山茶碗や近世の陶器も出土している。

SC2 2区西において所々途切れながら東西方向にのびる溝1条（SD207）と、SD207と平行して道路状遺構に特徴的な波板状凹凸が検出されたことから道路状遺構とした（Fig.19）。南側溝が確認されていないことから路面幅等は不明であるが、2区西の東端から2区東において北東方向へ緩やかに曲がっているようである。その方位は、屈曲する西側では概ねN-85°Eで、東側ではN-30°Eとなっている。

また、2区東において別の道路状遺構としたSC3と重複しており、その切り合い関係からSC2の方が古いことを確認している。上部構造が大きく削平を受けていることから、詳細は不明な点が多いが、SC3が古代に遡ってもおかしくない状況から、SC2自体もそれ以前ということとなる。それを追認するように、SC2とした溝や波板状凹凸からは古代の土師器や須恵器の破片のみが出土している。

ただし、2区東でSD137とした溝状の遺構をSC2の東側側溝と想定すると、灰軸陶器（9～10世紀頃）が出土していることから平安時代頃まで利用されていたと考えられることができる。

SC3 2区東の南側において検出された、東西方向にのびる約4.8m幅の大溝（SD134）とその両側にはほぼ平行してある2条の溝（北側のSD135と南側のSD133）をSC3として認識した（Fig.19）。あるいは、この大溝SD134と両側の溝はそれぞれ別の時期の道路状遺構の重複とも考

SK116

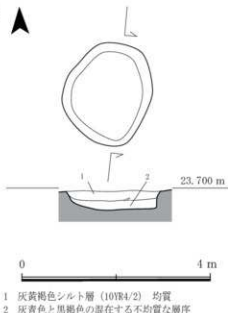


Fig. 20 中世の土坑① 平面・断面図 (S=1/80)

えられる。2区西では削平のために、これらの延長は一切確認されておらず、2区東のみで確認されているため、詳細については判然としない。ただし、SD134は重複しているSD137より新しいことを確認している。

埋土は主に2層で構成され、上層から青磁が出土することから、最終的には中世に埋没したと推定される。ただし、下層には中世の遺物が含まれないことから、古代まで遡るものと考えている。

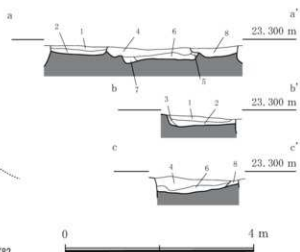
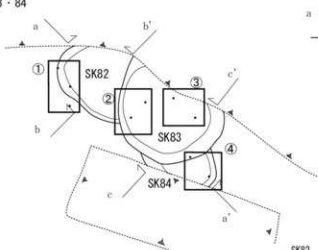
3 中世の遺構

明確に中世の遺構と認識できたものは、土坑5基である。1区の東側では、西川遺跡2次調査からの延長と考えられる連続した不整形の土坑3基（SK82～84）が確認された。この他には1区の南西で土坑2基（SK60・116）がある程度であり、遺構の密度は極めて疎らである。

(1) 土坑

SK82～84 1区南東のBW34～BX35で検出された（Fig.21）。3基の土坑が重複しており、各々の土坑の基底面に据え置かれたように完形に近い山茶碗が1～2個体ずつ出土した。むしろ、平面で3基の土坑の切り合いを把握できなかったため、掘削した後に基底面の高低差やその形状、山茶碗の位置などから土坑が3基あることを認識した。最終的には土層断面の観察結果から、中央のSK83が西側のSK82と南東側のSK84に先行するとの認識に至った。山茶碗の特徴から、鎌倉時代の遺構だと考えられる。

SK60 1区南西のBX14の交点付近で検出された。山茶碗1個体と、土師器皿2個体が出土したが、すぐ北側



SK82

- 1 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 均質
 - 2 1層と同質 黄灰色ブロックを多く含む, 不均質な層
 - 3 灰黄色シルト層 (2.5Y6/2) 黒褐色ブロック混じり, 不均質な層序
- SK83
- 4 黒褐色シルト層 (10YR3/1) 均質, 僅かに黄灰色ブロック含む
 - 5 灰黄色砂混シルト層 (2.5Y7/2) 所々に黒褐色ブロックを含む, やや不均質な層序
 - 6 5層に黄灰色ブロックを多量に含む層序
 - 7 黄灰粘質土層 (2.5YR6/1) 均質
- SK84
- 8 褐灰色シルト層 (10YR5/1) 黄灰色ブロックを含む, やや不均質な層序

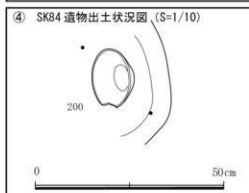
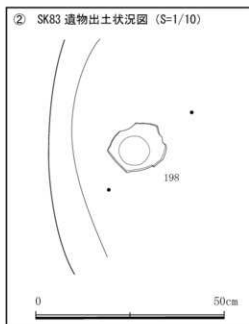
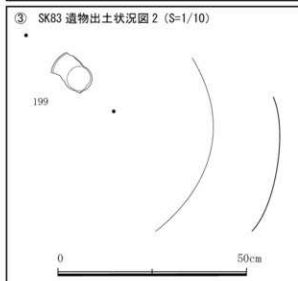
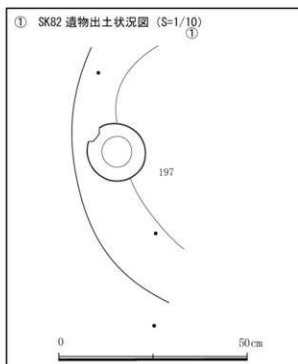


Fig. 21 中世の土坑② 平面・断面図 (S=1/80)

1号窯

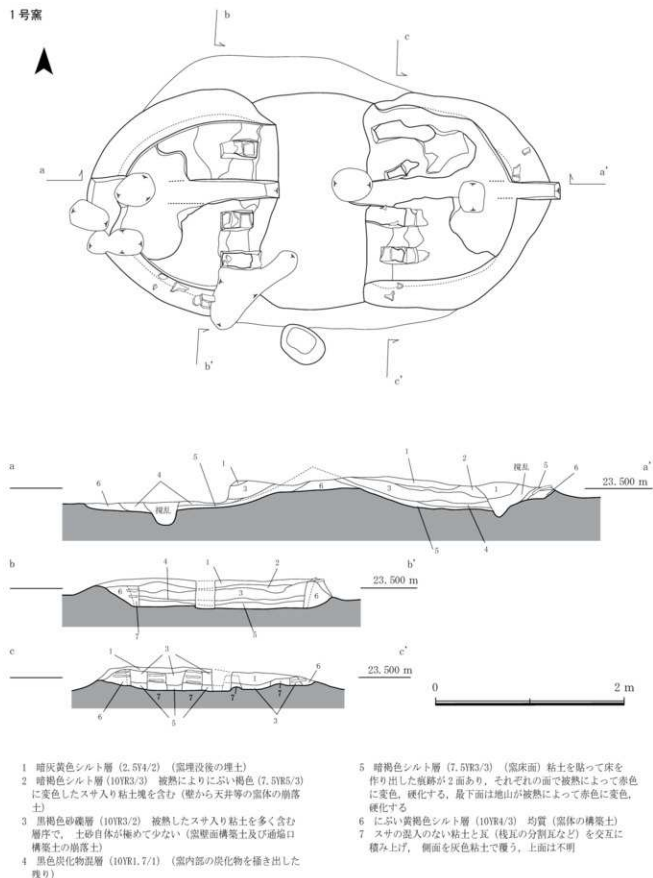
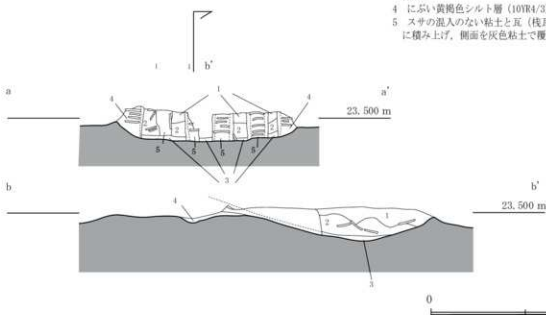
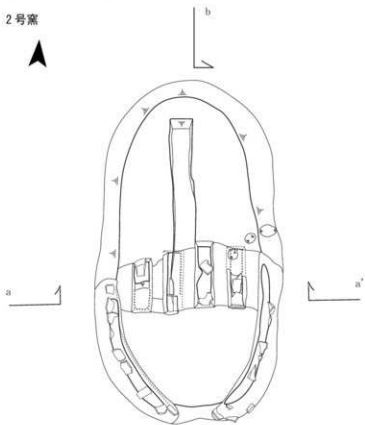


Fig. 22 1号窯平面・断面図 (S=1/40)

にある風倒木痕の影響でSK60 自体が激しく乱されているように規模や埋土などは判然としなかった。鎌倉時代の遺構だと考えられる。

SK116 1区西のBP16・BQ16で検出された(Fig.20)。東西約1.6m、南北約2mの楕円形で、検出面からの深さは0.4mとやや深い。埋土は2層あり、上層と下層の層離面に遺物が多かった。山茶桶が出土したことから、鎌倉時代の遺構と判断した。

2号窯



4 近世の遺構

近世の遺構として認識できたものは、窯跡2基(達磨窯1基、平窯1基)と掘立柱建物1棟、土坑1基(SK71)、溝である。西川遺跡第2次調査の結果と合わせると、当地には少なくとも4基の達磨窯と2基の平窯があったことが明らかとなり、近世の産業を考える上でも貴重な調査となった。これら窯跡は、主に瓦を焼成したと考えられるが、1号窯からは窯の構築部材が、SK71からは瓦質

- 1 灰黄褐色シルト層 (10YR4/2) 比較的均質(窯埋没後の埋土)
- 2 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 炭化物、瓦を少量含む(窯壁面構築土及び通煙口構築土の崩落土)
- 3 暗褐色シルト層 (7.5YR3/3) (窯床面) 粘土を混て床を作り出しており、その上面で被熱によって赤色に変色、硬化する。最下層は地山が被熱によって赤色に変色、硬化する
- 4 にぶい黄褐色シルト層 (10YR4/3) 均質(窯体の構築土)
- 5 スサの混入のない粘土と瓦(棧瓦の分割瓦など)を交互に積み上げ、側面に灰色粘土で覆う、上面は不明

Fig. 23 2号窯平面・断面図 (S-1/40)

製品の一部が出土していることなどから、瓦以外の焼成も行われていたようである。

(1) 窯跡

1号窯 1区の中央やや東のB030～B031で検出された(Fig. 22)。東西方向に主軸をもち、東西4.7 m、南北2.4 m程度の規模である。上部構造は削平されているため不明であるが、基底部の遺存状況は良好で、いわゆる達磨窯と呼ばれる形態のものである。達磨窯とは、長軸の両端に焚口を持ち、その内側の2箇所に燃焼室を設け、中央の上部に峠で区切った焼成室を持つ構造の窯で、横から見た形が達磨大師の座禅している姿に似ていることから付けられた名称である。

1号窯の燃焼部には全面に粘土が貼られているが、その粘土が2重になっている場所が確認されたことから、少なくとも1回以上の補修が行われたことが判明している。また、燃焼室と焼成室を区切る位置には、棧瓦と粘土を積み上げた隔壁によって5条の空気道が造られている。なお、周辺に覆屋の痕跡は確認できなかった。

出土した瓦の特徴から、江戸時代の後半頃の窯跡だと推定される。

2号窯 達磨1号窯の北西のB028～B029で検出された(Fig. 23)。南北方向に主軸をもち、南北1.9 m、東西1.9 mの規模である。確認できたのは燃焼室が1つの平窯の形態のもので、達磨窯ではない。2号窯は1号窯ほどの補修痕跡は確認できなかったが、1号窯と同じく棧瓦と粘土を積み上げた隔壁によって5条の空気道が造られている。なお、周辺に覆屋の痕跡は確認できていない。

出土した瓦に1号窯と同范と考えられる瓦があることから、ほぼ同時期に操業されたものと推定される。

(2) 掘立柱建物

SB139 2区東のBA41～42において検出された(Fig. 24)。東西2間、南北3間の規模であり、柱間は東西約1.1 m、南北約1.4 m程度である。埋土に締まりがなく、1間の間隔が狭いことなどから、近世以降の簡易な建物だと考えられる。

(3) 土坑

SK71 1区北東のBM29・30において検出された、東西約1 m、南北約2.5 mの長楕円形である。1号窯や2号窯と同時期と考えられる棧瓦と共に、土師器の皿や陶器の椀、壺類、瓦質製品などが出土している。おそらく、江戸時代後半頃の廃棄土坑であったのであろう。

(4) 溝

SD77 1区北端で東西方向にのびる溝である。近世以降の地割溝である可能性が高い。

SD129 1区北端のBJ20～BJ23で検出された溝であ

SB139

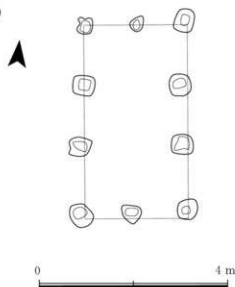


Fig. 24 SB139 平面図 (S=1/80)

る。曲線的な溝であり、全形は不明である。近世の陶器が出土している。

参考文献

- 小森俊寛 2005 『京から出土する土師器の編年的研究—日本律令土器様式の成立と展開、7～19世紀—』有限会社京都編集工房
- 中森成行 1983 『郡山道跡群発掘調査報告1—西高山西道跡・西高山西墳・西川道跡—』鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市道跡調査会
- 林 和範 2007 『IV.3 西川道跡(第2次)』『鈴鹿市考古博物館年報』第9号 鈴鹿市考古博物館
- 山田 猛 1981 『7世紀初頭における集落構成の変質』『考古学研究』第28巻第3号 考古学研究会

V 出土遺物

1 概要

コンテナケース (53 × 33 × 10cm) 19 箱分の遺物が出土した。その大部分が、古代の土師器と須恵器であるが、他にも中世の山茶碗や近世の瓦、陶磁器類なども出土している。先に述べたように、アカ道の2箇所遺物が集中する範囲があったが、ここから出土した遺物が3箱分ある。

遺構から出土した遺物は比較的少ない。ある程度一括性が保障されるものは、堅穴住居 SH12・13、土坑 SK34、SK82～84、SK90、SK115、SK156、SK157 から出土したものの程度である。特に SH12・13 と SK34、SK90 は極めて一括性が高い。なお、SK2 は上・下層に分かれているためやや時期幅がある可能性もあるが、量・種類とも豊富な遺物が出土している。また、SK2 と比して出土量は少ないが、SK3、SK4 も同じような内容だと考えられる。日常雑器類の他、SK2 の土馬、SK3 の陶製紡錘車、SK34 の石製模造品(勾玉形)及び鉄斧、刀子、SK115 の円筒状土製品、SB66 の木製品(建築部材[柱か]の一部)なども出土している。

なお、遺構から出土した遺物は、破片資料であっても口縁部片や、ある程度時期が特定できる資料については、可能な限り図化するよう努めた。一方で、アカ道から多量に採取された須恵器の杯や甕類や、表面採集などの遺離資料については、ある程度残りの良いものを選定して図示した。そのため、両者で図化している遺物の内容に違いがあることを明記しておく。また、実測図断面の黒塗は須恵器と山茶碗を示し、白抜きは土師器や陶磁器、瓦類、網掛けは黒色土器と灰軸陶器を示している。

2 旧石器・縄文時代の遺物

古代以前に遡る遺構は確認されていないが、旧石器時代と縄文時代の石器が各1点出土した (Fig. 25)。

1 は青黒色チャートを用いたナイフ形石器である。横長剥片を斜位に用い、両側縁にブランティングを施す。先端を僅かに欠損する。SD166 の埋土から出土しているが、旧石器時代の所産である。

2 は緑灰色チャートを用いた有茎尖頭器である。側面観がやや湾曲しており、素材が剥片であったことを推測させる。全体に丁寧な押圧剥離が施されており、斜並行剥離も認められる。先端と基部の両端を僅かに欠損するが、ほぼ完形といえる。SD134 下面の波板状凹凸痕を掘削中に出土したが、縄文時代草創期のものである。

3 古代の遺物

今回の調査区で出土した遺物の内、最も中心的となるものである。飛鳥時代から奈良時代にかけての遺物がまとまっているが、調査区の北側では平安時代以降の須恵器や黒色土器、灰軸陶器なども出土しており、全体的にはやや幅がある。

(1) 器種分類について

出土量の多かった須恵器の杯類について、以下のとおり分類した (Fig. 26)。

杯H蓋…古墳時代からの伝統的な形態であり、丸味を

帯びた天井部から連続する口縁部をもつもの。

杯H身…丸底の底部から蓋を受ける受部に至り、そこから内傾する口縁部をもつもの。受部によって口縁部と体部を明確に区別する。

杯G蓋…やや丸みを帯びた天井部の頂部に宝珠つまみ

が付き、口縁部内面にかえりをもつもの。

杯G身…やや丸みを持った底部ないし平底の底部から、直線あるいはやや内湾しながら立ちあがる口縁部をもつもの。

杯A…平坦な底部から、斜方向に直線的に立ち上がる口縁部を持つもの。

杯B蓋…笠形ないし比較的扁平な天井部の頂部に宝珠つまみが付き、口縁部端部が屈曲するもの。

杯B…杯Aに高台が付いたもの。

杯C…平坦な底部からやや内湾しながら立ち上がり口縁部端部をさらに外方へ折り曲げて内傾させ

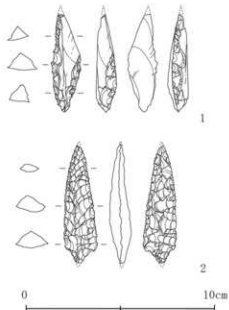


Fig. 25 出土石器 (S=1/2)

るもの。土師器杯の模倣と考えられる。

杯E……平底と推定される底部から内湾しながら立ち上がり、口縁端部付近に細く鋭い沈線が巡る。口縁端部には面を持つものが多く、銅碗の模倣と考えられる。

杯X……杯H蓋を天地逆にして、やや深くしたような形態を呈する。杯とも、小型の鉢とも、碗とも言い難いが、郡山町周辺を中心に市内でも一定量の出土があることから、1つの形態として抽出が可能と考えられる。系譜の問題など、詳細は今後の課題ある。

(2) 竪穴住居

SH12・13 3～16が出土した(Fig.27)。この内、3～11が須恵器で、12～16は土師器である。

3～6は杯B蓋である。6は比較的大型の笠形を呈し、やや焼け歪んでいる。7は杯C、8は杯G蓋として認識した。7・8はSH12・13の年代を比定する上で重要な資料である。須恵器はこの他にも9～11の甕などが出土している。10・11の内面には同心円文が顕著に観察される。

12は皿と推定され、口径は24.8cmに復元される。13は高台付きの杯であり、比較的高くしっかりと踏ん張った高台が貼り付けられている。なお、見込み部分には連結輪状文かと思しき暗文が観察されるが、磨滅のため不鮮明である。14は土師器の鉢、15・16は口径14～16cm前後の小型甕である。甕の調整は磨滅のため不詳であるが、外面上半には縦方向のハケが施されているようである。











これらの遺物は、奈良時代前半～中頃のものと推定される。

SH9・10 17～22が出土した(Fig.27)。17・18が須恵器杯B蓋で、19・20は同杯B身である。19の口縁部はやや外反しながら開く。21の器形が不明であるが、口径が9.7cmと小さいことなどから、郡山遺跡群で見つかっているようなワイングラス形の高杯になるのであろうか(中森1983)。22は残存高で6.7cmを測ることから碗と推定される。

これらの遺物は、奈良時代前半頃のものと推定される。

SH64-65 図化できた遺物は、23の1点のみである(Fig.27)。須恵器杯H蓋と考えられる。小破片であるため、口径を復元することはできないが、10cm程度の小型である可能性が高い。

SH145 図示できたのは南東隅の貯蔵穴上面で出土した、24の土師器の甕のみである(Fig.27)。外面上半には縦方向のハケ目が、口縁内面には横方向のハケ目が

杯H蓋		杯G蓋	
	104		174
杯H身		杯G身	
	291		64
杯A		杯B蓋	
	333		101
杯C		杯B身	
	7		19
杯E		杯X	
	182		43

*数字は報告番号

Fig. 26 須恵器杯類の分類 (S=1/6)

観察される。口径が26.0cmに復元されることから、大型甕と考えられる。

(3) 掘立建物

SB14 25・26が出土した(Fig.28)。いずれも須恵器の杯G蓋であり、口縁端部の破片が僅かに出土した程度である。これらの出土遺物は、飛鳥時代後半頃のものと推定される。

SB25 27の須恵器杯Aと考えられる底部破片1点が出土した(Fig.28)。飛鳥時代～奈良時代頃のものと推定される。

SB63 28～30が出土した(Fig.28)。いずれも須恵器であるが、28は杯G蓋、29は杯H蓋、30が杯H身と考えられる。30は厚手で、粗雑な作りをしている。これらの出土遺物は、飛鳥時代頃のものと推定される。

(4) 土坑

SK2 31～71がSK2からの出土遺物である(Fig.29)。31～60までが上層から出土したもので、61～71が下層出土のものである。須恵器の出土が圧倒的に多く、土師器は少量であった。

31・32は須恵器杯H蓋である。31は12.8cmに復元されるが、32は10.0cmと小型で天井部のヘラ削りの範囲は狭い。33・34は須恵器杯H身で、いずれも口径が8cm代と非常に小さい。35～38は須恵器杯G蓋とした。口径は35の11.4cmから、38の9.1cmまで存在する。39は須恵器杯G身としたが、皿となる可能性もある。40・41は須恵器杯AないしBの身で、40は口縁端部を玉縁状に小さく丸める。

42・43は須恵器杯Xとしたものである。43は全体の

形状を知ることのできる資料であるが、高台や脚などは付かず、丸底の底部からやや内湾しながら連続的に口縁が立ち上がり、口縁端部は丸みを持っている。41は須恵器杯B蓋、45・46は杯身か碗、47は杯B身と考えられる。

48～50は須恵器高杯であり、48・49はともに無蓋の高杯となる。48の杯部は丸みを持ち、内傾する口縁端部も持つ。49の杯部は深く箱形であり、外面には沈線を施して細かな凹凸が表現されている。50は脚部のみの残存であるが、下方に向かって大きく開く。51は高台付きの杯であるが、杯B身とは大きさ、形態ともに異なる。おそらく、仏具などを模倣したものと想定される。

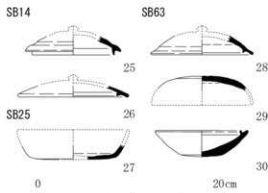
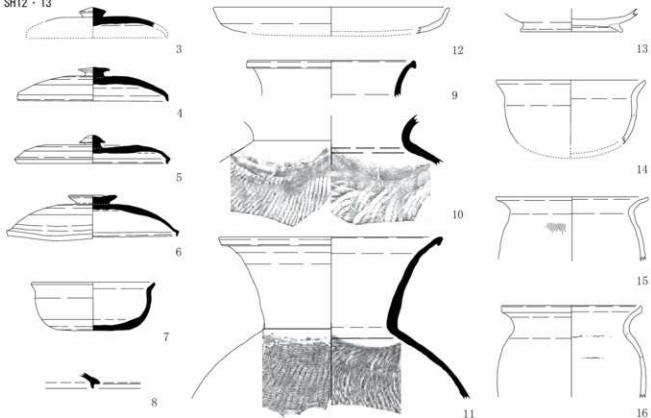
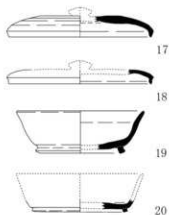


Fig. 28 掘立柱建物の出土遺物 (S=1/4)

SH12・13



SH9・10



SH145

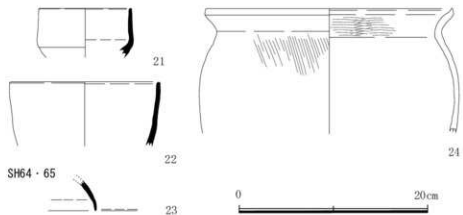


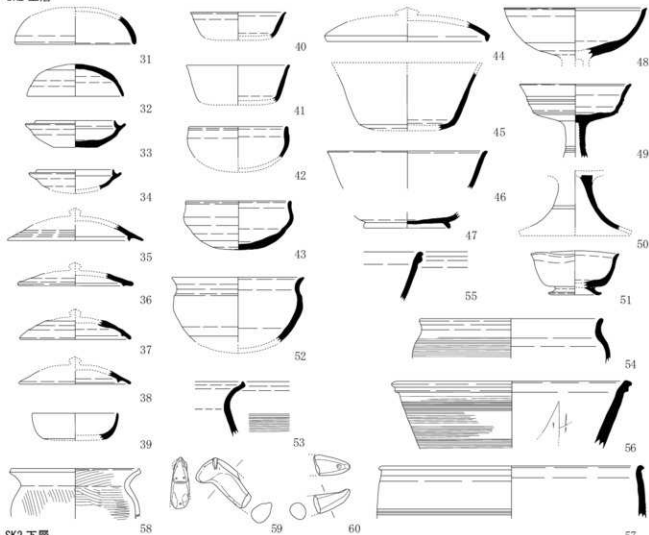
Fig. 27 竪穴住居の出土遺物 (S=1/4)

52は須恵器鉢で、口縁と体部の間にロクロナデによる段を作り出すことで明確に区分する。53は甕で、土師器甕の形態を呈す。54は短頸壺にならう。55・56は盤のような形態だと考えられる。両者の口縁部形状はよく似ているが、大きさが異なることから、大小の規格があったものと推定される。57の全形は不明であるが、鉢であろう。体部に2条の沈線が施されている。

58は土師器甕である。口縁端部を上方へつまみ上げており、内外面に粗いハケ目が観察される。

59・60は土馬の破片である。59は頭部の破片であり、60は尾の部分に相当すると推定される。59の耳は粘土塊を貼り付けており、目と鼻は刺突で、口は切り込みを入れることで表現している。59の首の下付近と60の先端には直径2～3mm程度の刺突があるが、貫通したもので

SK2 上層



SK2 下層

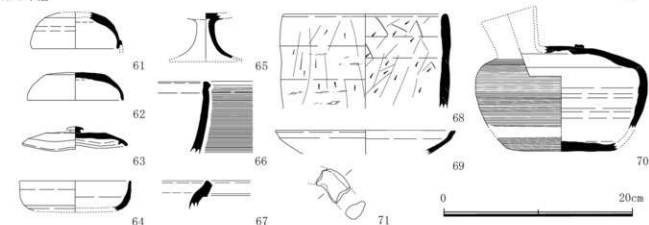


Fig. 29 土坑 (SK2) の出土遺物① (S=1/4)

はない。

61・62は須恵器杯H蓋である。61の外表面には同身と思われる破片が融着している。組み合わせで焼成したのであろう。63は須恵器杯G蓋で、大きく焼け歪む。摘み部分はキノコ形を呈している。64は須恵器杯Gの身ないし皿と考えられる。

65は須恵器高杯の破片である。短脚で透かしは施されていない。66は須恵器鉢で、体部全体にカキ目を施し、口縁端部は角頭状を呈する。67は甕の口縁部破片で、68・69の器形は不明である。68の口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部を丸くおさめる。内外面ともナデ成形の後にケズリによって砂粒が動いた痕跡が窺える。粘土紐の接合痕も観察されることから、本来は土師器の製作技術によって作られたものが須恵質に焼成されたものでないかと考えられる。69は全体に丁寧にクロコナデされる。

70は平瓶である。口縁部を欠損している。やや丸みを持ちながらも箱形の体部を持ち、体部にはカキ目が施され、体部の背面に直径1.0cm程度の丸い粘土塊が貼り付けられている。なお、70の破片は上下層にまたがって接合している。

71は土馬である。頭部の破片であり、59・60とは別個体である。59と同様に鬚の表現が確認できる。

これらの出土遺物は、上下層で接合関係もあり、内容的に見てもそれ程時期差のあるものとは考えにくく、飛鳥時代後半～奈良時代初頭頃のものだと推定される。

SK3 72～82がSK3からの出土遺物である(Fig.30)。72～80までが上層で、81・82は下層から出土したものであり、上層の出土遺物が大部分を占める。

72は須恵器杯G蓋で、73が杯GかAの身と考えられる。74・75は杯B蓋である。76は高杯の杯部の破片で、77・78は広口短頸壺となろう。79は土師器の甕であるが、磨滅のため調整は不明である。

80は陶製ないし須恵質の紡錘車である。直径は4.0cmで、中央に0.8cmの穴が穿孔される。

81は須恵器杯G蓋で、82は高杯の脚部ではないかと推定される。あるいは天地が逆で長頸壺の口縁部破片の可能性もある。

これらの出土遺物は、飛鳥時代後半～奈良時代初頭頃のものだと推定される。

SK4 83～89が出土した(Fig.30)。すべて上層で出土したものである。83は須恵器杯G蓋で、84は杯B身である。84の高台は剥落している。85は杯C、86は杯Eである。86の内面には1条の沈線が施されており、外面のナデによる段とあわせて、あたかも口縁端部が鋸形を呈すようである。

87は皿と考えられ、底部外面にはへら削りも観察される。88は高杯の脚部破片、89は壺の口縁部破片である。

これらの出土遺物は、飛鳥時代後半～奈良時代前半頃のものだと推定される。

SK31 90の土師器甕のみが出土した(Fig.30)。土坑内に90の甕が納められているような出土状況であった(Fig.13)。内面の体部上半には工具による押し出しの痕跡が認められるとともに、内面下半にはエビオサエと板状工具によるナデの痕跡が確認できる。外面は底部にいたるまで縦方向のハケが施される。口縁端部は僅かに上方へつまみ上げ、底部を意図的に穿孔してある。

詳細は不明であるが、古代のものだと推定される。

SK34 91～99が出土した(Fig.30)。須恵器や土師器の他に、鉄器や石製模造品が出土するなど、他の土坑とは性格をやや異にする。

須恵器は91の杯H蓋と92の甕がある。91は口径が10.0cmと小さく、天井部の削りの範囲も非常に狭い。92の甕は口縁部を僅かに欠損する。体部内面には板状工具と考えられる痕跡が見られるとともに、外面にはタキギが施されるようである。

93～96は土師器の甕である。93と94は胎土や焼成具合等がよく似ており、同一個体の可能性が高い。小型の平底甕になるものと推定される。95は口径27.6cmであり、大型甕になろう。口縁内面には横方向のハケ目が、体部外面には縦方向のハケ目が観察される。96も大型甕であり、口径は34.8cmもある。体部内面には板状工具ナデによって平滑に仕上げられている。体部外面は全面にわたって縦方向のハケが施される。96は体部に取手の付く可能性が高い。95と96の口縁部は、端部外面に面を持つことなど、製作技術がよく似ている。

97は基部を欠損するが、袋状鉄弁と考えられる。98は刀子の破片であろう。99は滑石ないし蠟石製の石製模造品である。勾玉形をしており、長さ4.1cm、幅2.6cm、厚さ0.7cm、重量10.6gを測る。全体に擦痕が観察され、研磨によって整形されている。

これらの出土遺物は、飛鳥時代後半頃のものだと推定されるが、やや遡る可能性も否定できない。

SK90 100～107が出土している(Fig.30)。100・101は須恵器杯B蓋で、102・103が同杯B身である。これらは、口径などの特徴から100と102、101と103が組み合うようであり、2セットが出土している。また、104の須恵器杯H蓋も共伴している。104は口径が11.6cmとやや小さく、天井部の削りの幅も非常に狭い。昨今、このような共伴事例も指摘されつつあるが(小森2005)、伊勢地方では類例を探すことは困難である。ある時期ま

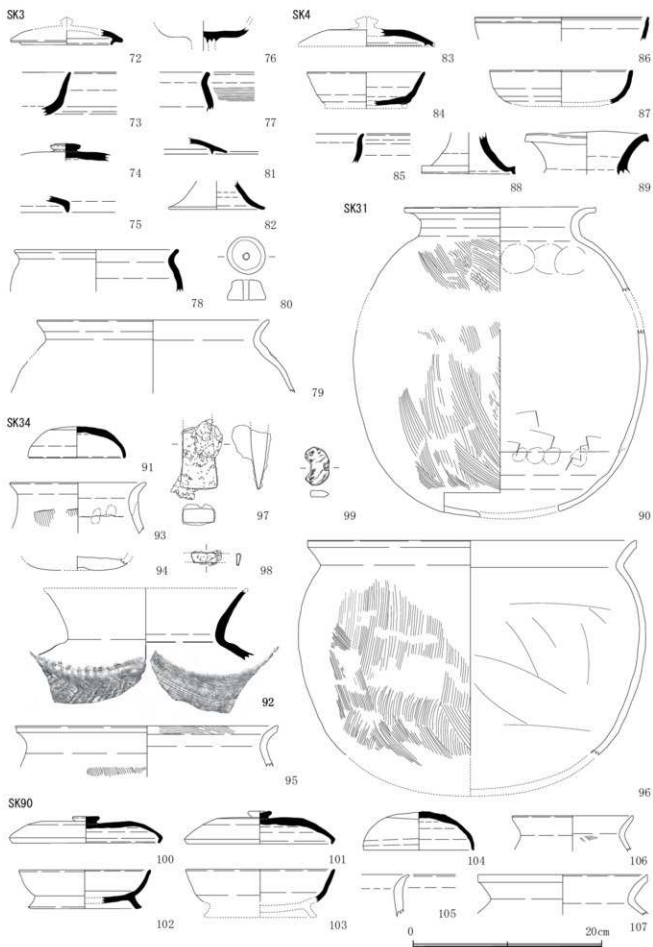


Fig. 30 土坑の出土遺物② (S=1/4)

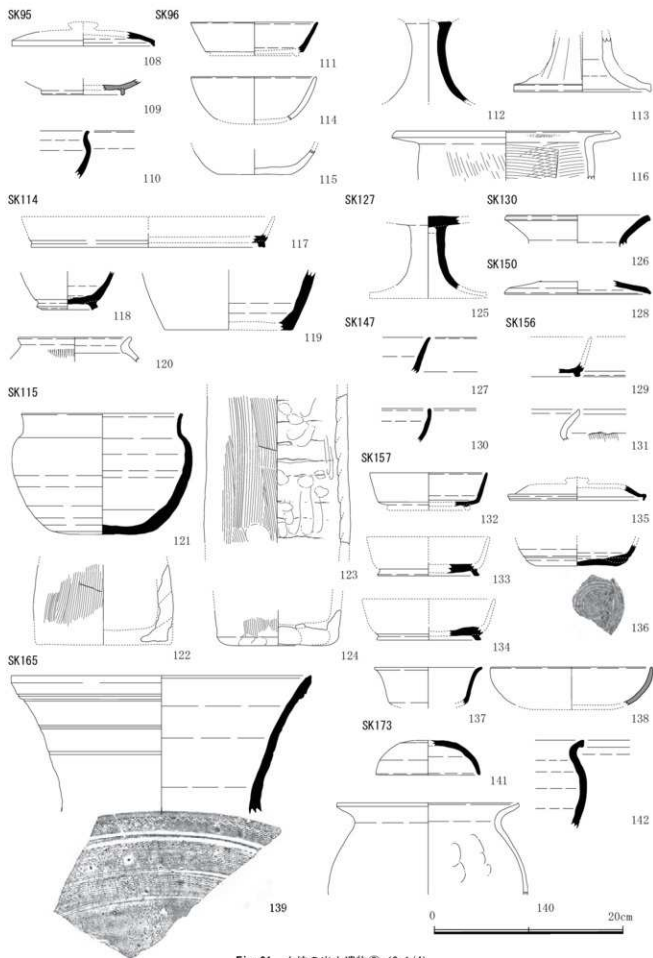


Fig. 31 土坑の出土遺物③ (S=1/4)

で杯Hと杯Bが共存していた可能性を考える必要がある。

この他にも、105～107の土師器甕が出土している。105は口縁を僅かに外反させるのみであり、SK34出土の93と似る。106は口径が12.6cmであることから小型甕、107は17.8cmあることから中型甕と考えられる。

これらの出土遺物は、飛鳥時代後半～奈良時代初頭頃のものだと推定される。

SK95 108～110が出土した(Fig.31)。108は須恵器杯B蓋であり、比較的扁平な形態を呈する。109は灰輪陶器碗の底部破片である。高台の断面形が三日月状であることから、K90 窯式から053 窯式前後である。110は須恵器の鉢であろう。口縁端部がやや角頭形を呈する。

これらの出土遺物は、奈良時代末～平安時代頃のものだと推定される。

SK96 111～116が出土した(Fig.31)。須恵器は111の杯B身と、112の高杯の脚部のみである。111は僅かに高台がはがれた痕跡が認められることから杯B身であり、口縁部は斜め外方へ直線的にのびている。

113は土師器の高杯で、脚部外面には縦方向のケズリが施されているようである。114・115は土師器の杯である。全体に磨減が激しく調整等は不鮮明であるが、いわゆる畿内産土師器ではなく、奇宮の分類で杯Gとされている杯である(富宮歴史博物館2001)。ともに口径は13cm、器高は5cm程度で、おそらく在地産と考えられる。116は土師器甕で、口縁部は大きく屈曲する。口径23.1cmに還元されることから、中型の甕であろう。やや幅広いハケが内外面に施されている。

これらの出土遺物は、奈良時代～平安時代頃までのものと推定される。

SK114 117～120が出土した(Fig.31)。117は須恵器の高台付きの皿ではないかと考えられる。118は内底面に残る降灰の痕跡などから、小型壺の底部破片である。119も平底の壺と考えられる。120は土師器の小型甕である。

これらの出土遺物は、奈良時代～平安時代のものだと推定される。

SK115 121～124が出土した(Fig.31)。121は須恵器の広口短頸壺である。122～124は円筒状土製品である。123と124が同一個体である可能性があるため、少なくとも2個体以上が出土していることになる。円筒状土製品は、いずれも約3cm幅の粘土紐を積み上げて成形しており、内面には接合痕やユビオサエ、ナデの痕跡がそのまま残されている。一方、外面は縦方向のハケが施されている。122の外面には一部に朱塗りかと思われる痕跡

も確認される。

これらの出土遺物は、奈良時代頃のものだと推定される。

SK127 125の須恵器高杯が出土したのみである(Fig.31)。

SK130 126が出土した(Fig.31)。須恵器の甕ないし壺になると考えられる。

SK147 127が出土した(Fig.31)。須恵器の杯AないしB身の口縁部破片である。

SK150 128が出土した(Fig.31)。須恵器杯類の蓋ではないかと推定される。

SK156 129～131が出土した(Fig.31)。129は須恵器杯B身で、130は須恵器の杯ないし碗である。131は土師器の甕である。これらの出土遺物は、奈良時代前後のものだと推定される。

SK157 132～138が出土した(Fig.31)。132～134は須恵器杯B身で、135が須恵器杯B蓋である。135の天井部は比較的扁平で、口縁端部が屈曲することから、奈良時代末～平安時代初頭頃にかけてのものであろう。136は杯Aである。底部には糸切りの痕跡が明瞭である。137は須恵器であるが、器形は不明である。外反する口縁を持ち、全体的に薄手である。

138は黒色土器の杯である。全体的に磨減が激しいため、ミガキの痕跡は不明である。内面のみを黒色処理する、いわゆる「内黒」の黒色土器A類に相当する。

これらの出土遺物は、奈良時代末～平安時代前半頃のものだと推定される。

SK165 139・140が出土した(Fig.31)。139は口径が31.7cmもあり、須恵器の大型甕である。口縁から頸部の破片で、沈線と波状文が交互に繰り返されている。140は土師器の甕で、口縁部端部を上方へつまみ上げる。口径18.5cmであり、中型の甕になる。これらの出土遺物は、奈良時代頃のものだと推定される。

SK173 141・142が出土した(Fig.31)。141は須恵器杯H蓋で、口径10.9cmと小さく、天井部の削りの範囲は極めて狭い。142は須恵器の鉢で、体部に2条の沈線が施されるようである。これらの出土遺物は、飛鳥時代後半～奈良時代頃のものだと推定される。

SK167 143～146が出土した(Fig.32)。143は須恵器の長頸壺の破片であり、頸部中央に2条の沈線が巡る。144は須恵器の甕である。145は土師器の甕で、口径15.8cmと小型甕となろう。146は土師器瓶の底部破片である。底部は大きく切り込まれる形状であると推定される。

これらの出土遺物は、奈良時代頃のものだと推定され

る。

- SK174 147の須恵器杯Aが出土した (Fig. 32)。
SK180 148の須恵器杯B身の底部破片が出土した (Fig. 32)。
SK185 149の須恵器杯B身の底部破片が出土した (Fig. 32)。やや大型になると推定される。
SK199 150の灰釉陶器椀ないし皿が出土した (Fig. 32)。平安時代のもと考えられる。
SK200 151が出土した (Fig. 32)。須恵器の杯AないしB身の口縁部破片である。
SK217 152が出土した (Fig. 32)。須恵器の杯AないしB身の口縁部破片で、やや外方へ直線的にのびる。

- SK215 153の須恵器鉢が出土した (Fig. 32)。口縁部は王縁状に膨らみ、外面にはカキ目が施される。
SX56 154の須恵器鉢が出土した (Fig. 32)。底部には刺突などは施されず、比較的平滑である。
SK222 155が出土した (Fig. 32)。須恵器甕の口縁部破片と推定される。外面全体に自然釉が厚くかかっているが、その下には波状文が認められる。

(5) 道路状遺構

- SC1 156～161の須恵器が出土した (Fig. 33)。156は杯H蓋と考えられ、天井部はヘラ切り後不調整である。157は杯B蓋、158は杯B身である。159は杯Cと考えた。口縁端部をロクロナデによって外方へつまみ出している。

SK167

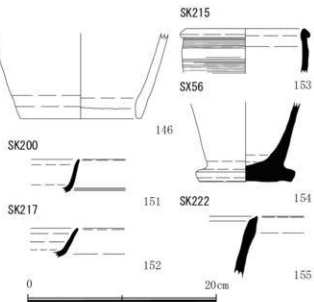
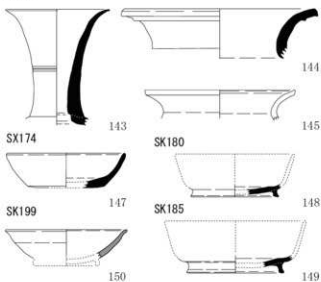
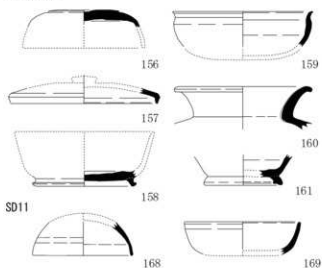


Fig. 32 土坑の出土遺物④ (S=1/4)

SC1 (SD24)



SC2 (SD137)

SC2 (SD207)

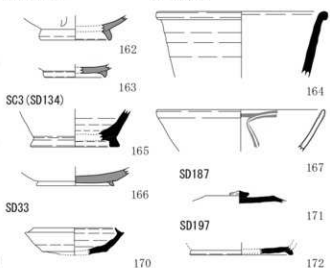


Fig. 33 道路状遺構・溝の出土遺物 (S=1/4)

160・161は須恵器の壺である。160の口縁内面には自然軸が厚かかかっており、体部内面には僅かにタタキの痕跡が認められる。161は、比較的小型の壺の底部破片であろう。

これらの出土遺物は、奈良時代頃のものだと推定される。なお、この他にも、CC30付近では須恵器壺の大型破片がまとまって出土している。

SC2 SD137とした溝から162・163の灰軸陶器椀2点が出土した(Fig.33)。いずれも底部破片であるが、162の外面には軸が垂れている様子が観察される。053窯式頃と推定される。163の体部と高台の境には鋭い沈線状の痕跡が残る。底部外面には僅かに糸切りの痕跡が残る。K90窯式と考えられる。この他、SD207からは口縁外面を丸く肥厚させた164の須恵器鉢が1点出土した。

これらの出土遺物は、平安時代頃のものだと推定される。

SC3 165～167が出土した(Fig.33)。165は須恵器の壺の底部破片と考えられ、内面に降灰による自然軸がかかっている。その範囲から、比較的口径の大きい器形であったものと推定される。166は灰軸陶器の椀である。内面には全体に薄い軸がかかっており、小さいが角ばった高台が貼り付けられている。これらの特徴から、K14窯式頃と推定される。

167は青磁椀の口縁部破片である。上層から出土しており、道路状遺構の埋没年代の下限を示す資料である。

これらの出土遺物は、古代から中世のものだと推定される。

(6) 溝

SD11 168・169の須恵器2点が出土した(Fig.33)。168は杯H蓋で、比較的天井部が高い形状を呈する。159は須恵器杯G身と考えられ、口縁部は内湾しながら立ち上がる。

SD33 170の須恵器杯H身が出土した(Fig.33)。口径が8.6cmと小さく、底部はへら切りの痕跡をそのまま残すことから、飛鳥時代以降のものと考えられる。

SD187 171の須恵器杯蓋が出土した(Fig.33)。天井部は凹んでおり、糸切り後にロクロ成形されているようである。杯の蓋ではなく、壺類の蓋の可能性もある。

SD197 172の須恵器杯B身が出土した(Fig.33)。高台と口縁の立ち上がりとの距離が近い。

(7) ビット

竪穴住居や掘立柱建物以外のビットから出土し、図示できるものを一括した(Fig.34)。173～191までが須恵器で、192～196が土師器である。

173・174は杯H蓋である。173の内面には杯H身と考えられうる口縁部が付着する。内面に降灰の痕跡があることから、逆位で蓋・身を組み合わせで焼成したのであろう。天井部はへら切り後不調整である。CB24pit1出土。174も天井部をへら切りする。杯蓋としたが、杯身の可能性もある。AV35pit2出土。175は杯Aである。口

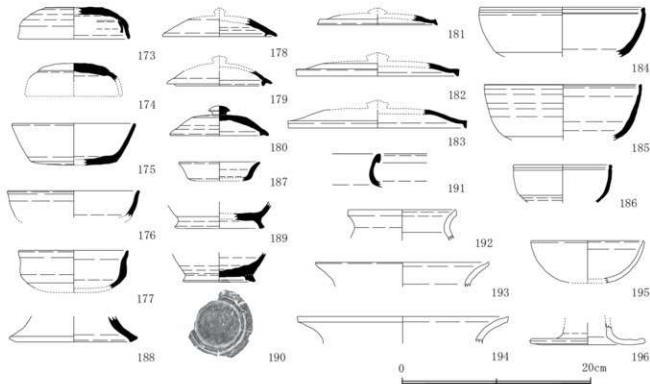


Fig.34 ビットの出土遺物 (S=1/4)

がほとんどであった。なお、SC3としたSD134の上層では青磁碗の破片が1点出土している（Fig. 33-167）。

(1) 土坑

SK82 197の山茶碗が出土した（Fig. 35）。高台には初段痕が観察され、底部には糸切り痕が明瞭に残る。荒肌手の胎土であり、南部系のもとと推定され、藤澤氏の編年（藤澤1994、以下「藤澤編年」とする）の第6型式と考えられる。

SK83 198～199の山茶碗が出土した（Fig. 35）。いずれも高台に初段痕が観察され、底部は糸切りされる。荒肌手の胎土で、南部系のもとと推定され、藤澤編年の第6型式と考えられる。

SK84 200の山茶碗が出土した（Fig. 35）。底部は糸切りされるが、高台に初段痕は認められない。荒肌手の胎土であり、南部系のもとと推定される。藤澤編年の第6型式と考えられる。

なお、201～206はSK82～84を掘削中に出土した古代の土器である。201は須恵器鉢、202は不明、203～206は壺ないし壺になろう。いずれも混入したものと考えられる。

SK60 208・209が出土した。（Fig. 35）。208は山茶碗で、高台には初段痕が観察される。扁平ながらも、全体に丸みを帯びていることから、藤澤編年の第5型式まで遡る可能性がある。荒肌手の胎土であり、南部系のもとと推定される。

209は土師器皿である。口径15.3cmに復元される。口縁部は2段ナデされ、伊藤氏による鳥貫遺跡での分類の土師器皿a4類に相当し、鳥貫F4期（伊藤2000、以下「伊藤鳥貫編年」とする）に該当する資料であろう。伊勢において両者は概ね共伴し、13世紀初頭頃のものと考えられている。

SK116 210の山茶碗が出土した（Fig. 35）。高台には初段痕が観察される。全体に深くやや丸みを帯びている形状である。荒肌手の胎土であり、南部系のもとと推定される。藤澤編年の第5～6型式頃のものと考えられる。

SD24 SC1西側側溝のSD24を掘削中に、207の山茶碗が1点出土した（Fig. 35）。出土した周辺は木の根などに攪乱されていたことから、混入したものと判断した。207は高く角ばった高台を貼り付け、初段痕は認められない。また、内面には重ね焼きの痕跡ととともに、墨かと思われる黒ずんだしみ込みが観察される。内底面がよく磨滅していることから、硯に利用されたことも考えられる。胎土は比較的良好であるが、いわゆる南部系のもとと想定され、藤澤編年の第3型式頃のものと考えられる。

5 近世の遺物

近世の遺物は、2基の窯跡と2号窯に近接して検出された土坑SK71から出土したものがほとんどである。これらからは棧瓦の破片が多量に出土しているが、完形のものも1点も出土しなかった。おそらく焼成後に遭害し、破損したものが残されたのであろう。この他に、溝からも近世の陶磁器類が出土している。

(1) 窯跡

1号窯 211・212が出土した（Fig. 36）。ともに軒棧瓦の破片と考えられる。211は中央に巴文があり、外区との間に16個と推定される珠文が巡る。内部まで黒色化しており、焼成時に破損したものと推定される。珠文の内側に范の傷跡が残る。その特徴から2号窯出土の213と同范であることが分かる。212は巴文が大きく、外区との間に珠文は認められない。断面は1.5cm程度の粘土板を張り付けているようで、軒棧瓦でない可能性もある。この他にも、棧瓦と考えられる破片が多数出土している。

2号窯 213～217が出土した（Fig. 36）。213・214は軒棧瓦と考えられる。213と211は同范であることから、両者がほぼ同時期に操業されていたことが窺える。215は棧瓦で残部が残る資料である。約半分しかないが、長さ26.7cm、厚さ1.2cmであり、幅も25cm前後あったものと考えられる。

216は瓦質製品であるが、どのようなものか不明である。厚さ約2cmの平坦な部分が大きく広がるようで、下端部の1箇所を穿孔する。背面にはスサ入りの粘土が付着していることから、焼成時に室内の粘土が付着したものと考えられる。

217は窯の構築部材である。隔壁の前面に立てて粘土で覆い、空気の通りを良くするためのものだという（藤原学氏ご教授）。断面は概ね半円形で、上下両端は平坦に面取りされている。背腹両面には荒い条線が多数引かれており、粘土を吸着する役割を果たしたと推定される。この他にも、棧瓦と考えられる破片が多数出土している。

(2) 土坑

SK71 218～230が出土した（Fig. 37）。218～221は陶器である。218は碗で、全面に暗褐色の釉を施す。体部をつまみ出しており、高台は削り出す。219も碗と考えられるが詳細は不明である。削り出し高台を持ち、褐色の釉を全面に施す。220は壺で、外面全体を褐黄色の釉で施す。底部は釉短じしてある。221は皿ないし碗であろう。内底面に文様が描かれる。内外面とも白色の釉で施す。

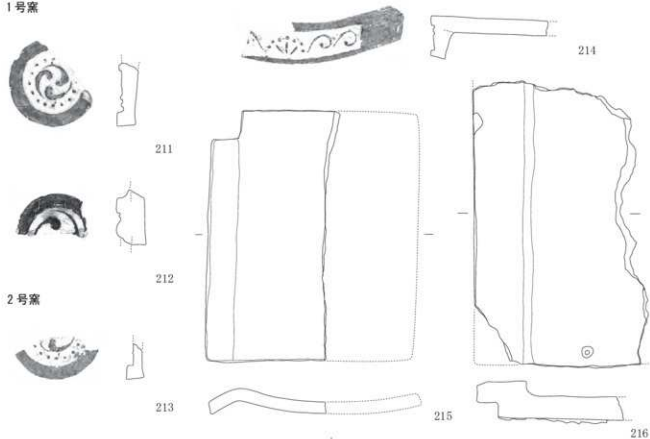
222・223は土師器である。222は錆ない焙烙で、極めて堅固に焼成され陶器のようである。鏝部以下には煤

が付着する。223は皿で口径6.2cmと小さい。

224・225は瓦質製品である。224は火鉢などの脚部と推定される。内面は雑なナデによるが、外面のみに縦方

向のヘラ磨きが密に施される。なお、SK71から同様の個体がもう2点出土している。225の形態は不明である。直径4cm程度の棒状を呈し、中央に直径0.6cm程度の穿

1号窯



2号窯

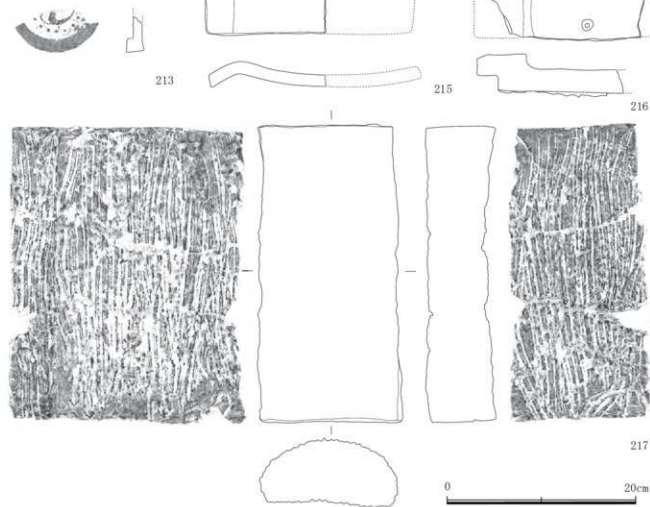


Fig. 36 1号窯・2号窯の出土遺物 (S=1/4)

孔を焼成前に施す。全体にヘラ磨きされる。

226～230は瓦である。226は軒棧瓦と考えら、227は垂木先瓦などであろうか。229・230は丸瓦で、同一個体と考えられる。

SK162 235の土師器皿が出土した (Fig. 37)。口径9.3cmと小型の皿で、赤褐色を呈す。中世に遡る可能性もある。

(3) 溝

SD77 231・232が出土した (Fig. 37)。231は須恵器杯B身で、232は須恵器壺である。231の底部外面には「X」字状のヘラ記号が観察される。両者は古代の遺物であるが、SD77からはこの他に陶器類が出土しており、近世の溝だと認識している。

SD129 233・234が出土した (Fig. 37)。233は須恵器壺の底部破片である。234は陶器碗である。SK71のFig. 37-218とよく似ている。内外面に暗黒褐色の軸を全

面に施し、白い軸で文様を描く。

SD24 236の磁器が出土している (Fig. 37)。重複する覆乱から出土したものである。

6 アカ道採集の遺物

ここでは、アカ道で集中して出土した遺物や、検出中あるいは表面採集などで得た、遊離資料を一括して報告する。アカ道採集の遺物は大型破片が多く、遺存状況も良好であることから、本来は近隣にあった遺構に伴うものと推定される。

(1) アカ道東側集中部

東側集中部は東西10 m程度の範囲に散布しており、コンテナケース2箱分が出土した。この内、237～290までを図示した (Fig. 38・39)。Fig. 38が古代の遺物で、Fig. 39が中・近世の遺物である。なお、アカ道自体は掘削していないが、集中部の下面のみ確認調査をしている。

SK71

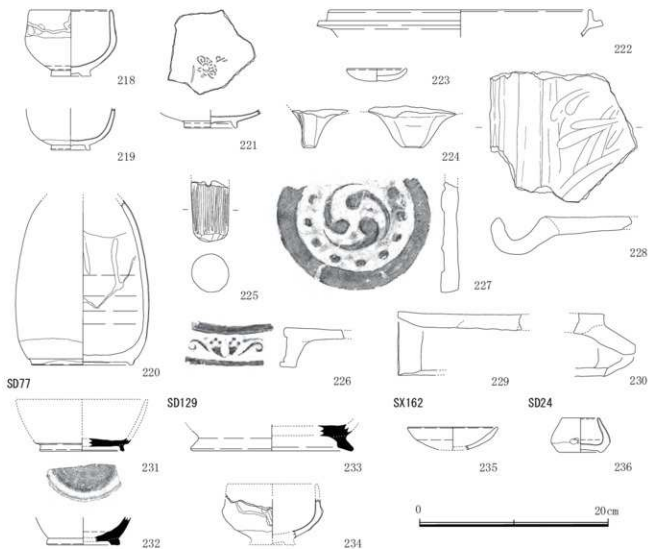


Fig. 37 近世の出土遺物 (S=1/4)

その結果、下面に土坑等の遺構は一切確認できず、アカ道に一括投棄されたものであることを確認している。

237～239 須恵器杯H蓋である。237は口径が13.5cmに還元されるが、焼け歪んでいるため誤差が大きい。内面には降灰の痕跡がある。238は小型で、天井部は不調整のようである。240は杯H身としたが、杯G蓋の可能性もある。241は杯G蓋で、口縁と天井部の境が明瞭に段をなす。242は杯B蓋で、243～247が杯B身である。

底部には糸切りの244と、ヘラ削りの245・246の両者が存在する。248～254は須恵器の高杯である。254を除き、いずれも短めの脚部を有する。脚部中央に1～2条の沈線を巡らす249・252・253と、沈線を施さない248・251などがある。254は極めて大型である。

255はハソウである。体部破片であり、穿孔や口縁部形状は不明である。最も外へ張り出す部位の上端に1条の沈線を施す。256～258は須恵器壺の底部破片である。

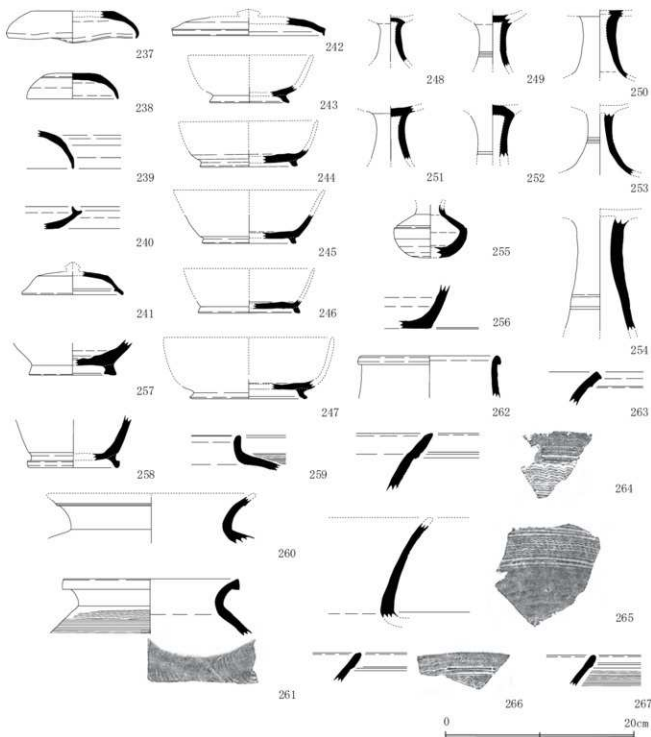


Fig. 38 アカ道東側集中部の出土遺物① (S-1/4)

256は大型の平底で、259は短頸壺になる。体部にはカキ目を施す。257・258の高台は比較的高く、外方向へ踏ん張る形状を呈する。260・261・263～267は須恵器甕と考えられる。口縁外面には沈線と波状文による文様を持つものと、カキ目を施すもの、無文のものなどがある。262は鉢であろう。外面を玉縁状に丸く膨らませる。

268～270は山茶碗である。270の高台は一部欠損する

ため不明であるが、268には初登痕が観察され、269には見られない。いずれも底部には糸切り痕が観察される。

271～279は陶磁器類である。小椀や椀、鉢、挿鉢など様々なものが出土している。280～286は瓦である。280は大型であることから垂木先瓦などのような種類と考えられる。他は、おそらく軒棧瓦であろう。282は花文となっており、この1点のみの出土である。287

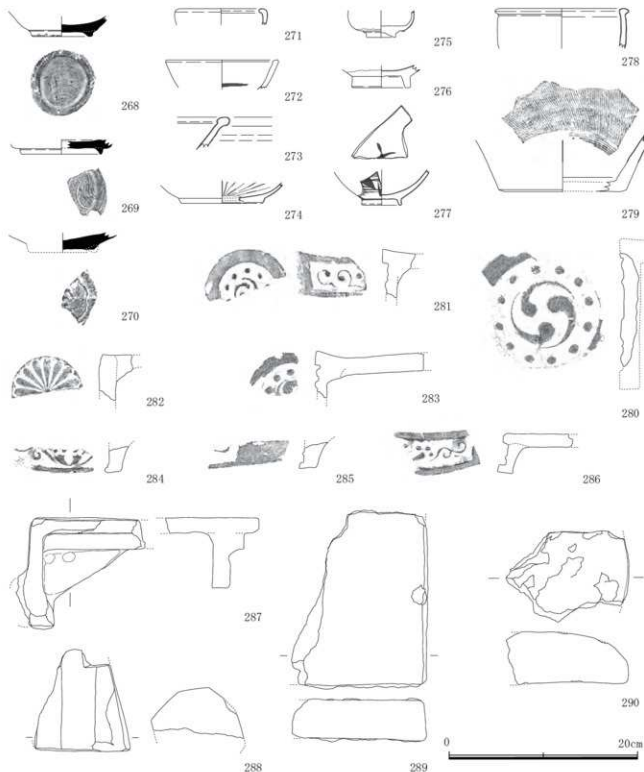


Fig. 39 アカ道東側集中部の出土遺物② (S=1/4)

～290は瓦質製品であろう。287は立体的であり、何らかの隅を覆う部位に用いられたのであろう。288は断面八角形になると想定される。下端は平坦で、上方に向かって狭まり、段を持つ。断面も黒色化しており、焼成時に破損したものであろう。289・290は大きさや形状など一切不明である。埴のようなものであり、Fig.36-217と同じような窯の構築部材になるのであろうか。

(2) アカ道西側集中部

西側の集中部は東西4m程度の範囲に散布しており、コンテナケース1箱分が出土した。この内、291～317

までを図示した (Fig.40)。

291は須恵器杯H身である。口径が8.3cmと極めて小さい。292は杯Aである。293は杯かハソウの口縁部破片と考えられる。ただし、ハソウとした場合には口径がやや大きすぎるとも思われる。294・295は杯B蓋である。294は大型で、口径は21.1cmもある。296～298は杯B身で、297の外底面には同心円状の筋が多数認められる。何らかの工具を用いたクロコナデの痕跡と想定される。

299～301は須恵器高杯である。299に沈線はなく、300・301には1～2条施される。302-303は高杯ないし、

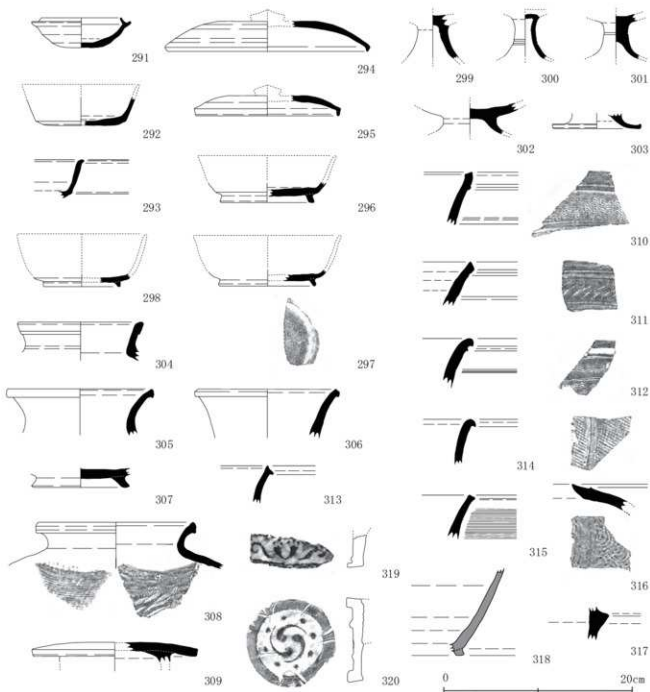


Fig.40 アカ道西側集中部の出土遺物 (S=1/4)

西川遺跡第1次調査で「台付碗」として報告されているようなものとなろうか(中森1983)。

304～307は須恵器の壺ないし甕である。308は甕で、内面には同心円文が残る。309は異形の須恵器である。市内では高井A遺跡(筒井1998;第38図177)や天王遺跡(林2006;Fig.164)などに例があり、西川遺跡第1次調査(中森1983;第29図77)でも土師器として報告されているが似た形状のものがある。上端の平坦面が煤けている例が多いが、当資料はそのような痕跡を確認できない。310～315は鉢ないし甕の口縁部破片である。波状文や列点文、カキ目のものなどがある。316・317は不明の須恵器である。316は口縁部の形状から球体のような形状となると考えられる。口縁外面には小さな突線が見られ、内外面に甕と同様のタタキ痕が残る。317は断面三角形の凸帯のようなものが付く。

318は灰軸陶器の壺である。319・320は瓦で、おそらく軒椼瓦になろう。

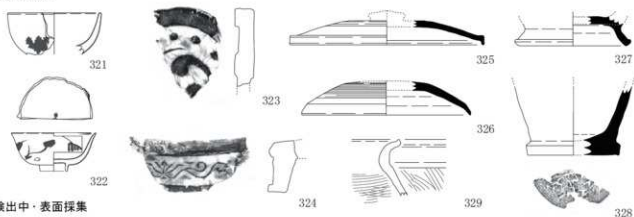
(3) その他

アカ道 アカ道で集中部としたもの以外から採集したものを一括し、321～328に示した(Fig.41)。321・322は磁器の碗で、323・324は瓦である。325は須恵器の杯B蓋で、比較的天井部が高い形態を呈す。326は器形不明の須恵器である。何らかの蓋になるのではないだろうか。外面にはカキ目が施されている。327は須恵器の壺類の底部で、328は鉢である。外底部には多数の刺突が施される。329は土師器の甕である。

検出中・表面採集 遺構検出中及び表面採集のものを一括し、330～343に示した(Fig.41)。330は須恵器杯G蓋である。331・332は須恵器杯G身と考えられる。333・334は杯Aである。333はやや丸みを持ちながらも開いた口縁部を持つ。底部はヘラ切りようである。335は須恵器杯B蓋で、336・337が同杯B身となる。

338は須恵器の高杯であり、口径23.4cmと大型である。339は須恵器壺ないし甕で、340は長頸壺の口縁部破片、341・343は甕、342は鉢と考えられる。342の断面では粘土紐の接合痕かと推定される痕跡も確認される。343

アカ道採集



検出中・表面採集

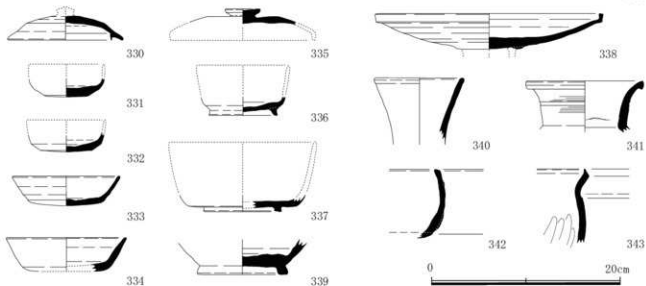


Fig.41 アカ道・遊離資料の出土遺物 (S=1/4)

の内面には斜方向のナデが観察され、口縁端部を上方へつまみ上げる点などから、土師器製の製作技術によって製作されたものが須恵質に焼成されたものと考えられる。

参考文献

- 伊藤裕偉 2000 「中世成立期における伊勢の土器相～雲出島貫道跡出土資料を中心に」『峭拔』II 三重県埋蔵文化財センター
- 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究—日本律的土器様式の成立と展開、7～19世紀—』 有限会社京都編集工房
- 筒井昭仁 1998 『一般国道23号線中勢道路(6工区)建設事業に伴う 高井A遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
- 中森成行 1983 『郡山遺跡群発掘調査報告I—西高山D遺跡・西高山古墳・西川遺跡—』 鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会
- 林 和範 2006 「IV.1 天王遺跡(13次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第7号 鈴鹿市考古博物館
- 林 和範 2007 「IV.3 西川遺跡(第2次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第9号 鈴鹿市考古博物館
- 山田 猛 1981 「7世紀初頭における集落構成の変質」『考古学研究』第28巻第3号 考古学研究会
- 斎宮歴史博物館 2001 『斎宮跡発掘調査報告I 内院地区の調査 本文編』 斎宮歴史博物館
- 藤澤良裕 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター

Tab. 1 遺物観察表④

報告番号 番号	種別	部部	出土場所	出土年月日	口径	底径	高さ	残存率	口縁(周径)	底面	体部	口縁(周径)	体部	内山断面	形状	色調	発掘年月日	備考
009	190	須恵器	94北平 1層目	2007/6/16	12.9	11.3	14.3	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/14	わずかに破れあり
009	190	土師器	94北平 1層目	2007/7/19	26.0	23.5	30.1	口縁1/2 北平ノコ 底平ハ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/21	
002	182	須恵器	94北平 1層目	2007/6/19	16.9	15.0	18.0	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/14	
002	182	土師器	94北平 1層目	2007/6/19	34.2	31.4	35.4	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/14	
004	183	土師器	94北平 1層目	2007/6/19	18.9	17.2	20.6	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/17	跡土組の接合部あり
006	183	土師器	94北平 1層目	2007/6/19	27.6	25.6	29.4	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/14	
007	183	土師器	94北平 1層目	2007/6/19	34.8	32.0	36.2	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/17	
008	187	須恵器	94北平 1層目	2007/6/21	15.4	14.0	16.8	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
101	194	須恵器	94北平 1層目	2007/6/21	15.4	14.0	16.8	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
109	193	須恵器	94北平 1層目	2007/6/21	15.4	14.0	16.8	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
102	193	須恵器	94北平 1層目	2007/6/21	15.4	14.0	16.8	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
103	192	須恵器	94北平 1層目	2007/6/21	15.4	14.0	16.8	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
104	191	須恵器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
105	198	土師器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
106	197	土師器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
107	196	土師器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
108	199	須恵器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
109	201	須恵器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
110	200	須恵器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
111	203	須恵器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
112	202	須恵器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
113	204	土師器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
114	207	土師器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
115	206	土師器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
116	205	土師器	94北平 1層目	2007/6/21	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/18	底平ハ
117	211	須恵器	94北平 1層目	2007/6/20	24.3	22.3	26.3	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/19	底平ハ
118	208	須恵器	94北平 1層目	2007/6/20	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/19	底平ハ
119	209	須恵器	94北平 1層目	2007/6/20	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/19	底平ハ
120	210	土師器	94北平 1層目	2007/6/20	11.6	10.9	13.1	口縁1/4	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	口コロナテ	良好	灰青色	2007/12/19	底平ハ

Tab.1 遺物観察表⑤

番号 種別	形名	出土場所	出土年月日	質量 (g)		残存率	体積 (cm ³)		形状		色調		備考
				口径	底径		高さ	幅	口径	底径	高さ	幅	
121	須恵器 白磁土	88115 土器部 上層	2007/9/20	68.7	12.8	1/2	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰白色	2007/12/19 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
122	土器部	88116-6 白磁土 土器部 上層	2007/9/20		0.1	底径1.4				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/19 外壁に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
123	土器部	88115 白磁土 土器部 上層	2007/9/20		118.0	体部のみ				ナナコ、オオユ		良好 灰褐色	2007/12/20 体部のみは1.0cm程度と測定 される。外壁に黒塗りか、 底径部は同一色になる。壁 分厚。
124	土器部	88115 白磁土 土器部 上層	2007/9/20		33.4	底径のみ				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/20 体部のみは1.0cm程度と測定 される。外壁に黒塗りか、 底径部は同一色になる。壁 分厚。
125	土器部	88117 白磁土 土器部 上層	2007/9/21		15.4	底径のみ				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/19 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
126	須恵器	88117-6 白磁土 土器部 上層	2007/9/21	14.8	33.3	口縁1.8	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰褐色	2007/12/19 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
127	須恵器	88117-6 白磁土 土器部 上層	2007/9/21		33.7	口縁部のみ	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰褐色	2007/12/19 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
128	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/19	15.2	31.4	口縁部のみ	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰褐色	2007/12/19 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
129	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/19		33.0	口縁部のみ	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
130	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/19		33.0	口縁部のみ	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
131	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/19	12.3	33.0	口縁部のみ	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
132	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/19		33.0	口縁部のみ	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
133	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/21	0.8	31.4	底径1.4				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
134	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/21		30.8	底径1.4				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
135	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/11	14.0	31.0	口縁1.8	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
136	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/11		32.7	底径1.4				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
137	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/4	11.2	33.9	口縁1.8				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
138	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/4	68.9	14.0	口縁1.8				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
139	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/27	31.7	14.0	口縁1.2	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰褐色	2007/12/14 全体に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
140	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/28	18.0	0.7	口縁1.4				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/14 全体に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
141	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/28	18.0	3.8	1/4	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
142	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/27	11.0	132.2	口縁部のみ	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
143	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/28	20.1	15.2	口縁1.8	口径10.7 底径1.4	1.2	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	口径10.7 底径1.4	良好 灰褐色	2007/12/15 外壁に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
144	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/28	15.8	33.2	口縁1.8				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/15 外壁に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
145	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/28	17.6	0.0	底径1.8				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/15 外壁に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
146	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/27	12.4	3.7	口縁1.8				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/15 外壁に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
147	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/27	12.4	3.7	口縁1.8				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/15 外壁に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
148	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/27	0.0	31.3	底径1.4				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。
149	須恵器	88118 白磁土 土器部 上層	2007/9/28	0.8	11.4	底径1.4				ナナコ		良好 灰褐色	2007/12/20 内面に黒塗りか、底径部は 外壁と同一色になる。壁 分厚。

Tab. 1 遺物観察表①

発掘調査 番号	種別	形状	出土場所	出土年月日	口径	高さ	重量 (g)	保存状態	内面装飾	外面装飾	胎土	地味	色調	発掘年月日	備考
100	101	須臾器	杯	3.8	13.1	3.1	口縁14.1	口縁14.1	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/5	
191	109	須臾器	杯	3.34	13.0	3.34	口縁13.8	口縁13.8	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/6	
192	118	須臾器	杯	3.07	13.0	3.07	口縁13.0	口縁13.0	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/10	
193	108	須臾器	杯	3.31	13.0	3.31	口縁13.2	口縁13.2	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/6	
194	104	須臾器	杯	3.35	13.3	3.35	口縁13.8	口縁13.8	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/5	
195	106	須臾器	杯	3.12	13.0	3.12	口縁13.1	口縁13.1	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/6	
196	110	須臾器	杯	3.34	13.8	3.34	口縁13.8	口縁13.8	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/6	
197	111	須臾器	杯	3.31	13.1	3.31	口縁13.1	口縁13.1	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/6	
198	112	須臾器	杯	3.35	13.8	3.35	口縁13.8	口縁13.8	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/6	
199	114	須臾器	杯	3.20	13.0	3.20	口縁13.4	口縁13.4	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/6	
200	113	須臾器	杯	3.17	13.1	3.17	口縁13.1	口縁13.1	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/6	
191	095	須臾器	杯	3.16	13.0	3.16	口縁13.0	口縁13.0	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/5	
192	119	土師器	甕	3.22	13.2	3.22	口縁13.6	口縁13.6	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/5	
193	121	土師器	甕	3.22	13.2	3.22	口縁13.6	口縁13.6	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/10	
194	107	土師器	甕	3.32	13.0	3.32	口縁13.4	口縁13.4	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/6	
195	113	土師器	杯	3.25	13.8	3.25	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/6	
196	120	土師器	高杯	3.33	13.9	3.33	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/10	
197	063	山師器	甕	3.33	13.9	3.33	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/10	
198	067	山師器	甕	3.33	13.9	3.33	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/6	
199	069	山師器	甕	3.33	13.9	3.33	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/3	
200	030	山師器	甕	3.33	13.9	3.33	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/3	
201	074	須臾器	杯	3.33	13.9	3.33	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/3	
202	073	須臾器	杯	3.33	13.9	3.33	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/3	
203	076	須臾器	杯	3.33	13.9	3.33	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/3	
204	072	須臾器	杯	3.33	13.9	3.33	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/3	
205	071	須臾器	杯	3.33	13.9	3.33	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/3	
206	071	須臾器	杯	3.33	13.9	3.33	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/3	
207	249	山師器	甕	3.33	13.9	3.33	口縁14.3	口縁14.3	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	口縁へ向う直線	2007/12/4	

Tab. 1 遺物観察表①

観覧番号	種別	形態	出土層号	出土年月日	質量 (g)		残存率	外形特徴		加工特徴	形状	色調	発見年月日	備考
					全体	破損部		全体	破損部					
322	磁器	碗	ア方道 既製	2007/7/23	0.2	0.1	1/2	磁輪	磁輪	磁輪	良好	2008/2/12	発見例	
323	瓦	基本瓦 小	ア方道 既製	2007/7/23					ナナ	ナナ	良好	2008/2/12	内面に黒い点状の跡あり 外縁部は割れ跡あり 若干入る	
324	瓦	軒瓦 小	ア方道 既製	2007/7/23				残ナナ小	ナナ	ナナ	良好	2008/2/12		
325	磁器	杯口蓋	ア方道 既製	2007/7/23	206.4	(2.40)	1/3	片断へ字面有り(反時計 目約1/6)	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/2/14	片断以外の破損跡あり	
326	磁器	杯口小 既製	ア方道 既製	2007/7/23	11.8	(3.1)	1/10	片断へ字面有り(反時計 目約1/6)	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/2/14	片断以外の破損跡あり	
327	陶器	皿	5031~775 既製	2007/6/24	11.3	(3.1)	1/3	口ナナナナ	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/2/14	片断以外の破損跡あり	
328	陶器	鉢	ア方道 既製	2007/7/23	0.8	(2.2)	1/4	口ナナナナ、割裂	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/2/14		
329	陶器	壺	ア方道 既製	2007/7/23	16.0	(2.40)	1/8	口ナナナナ	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/2/14		
330	陶器	杯口蓋	表面既製	2007/10/12	0.8	(2.40)	1/8	口ナナナナ	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/2/14		
331	陶器	杯口蓋	表面既製	2007/10/12		(2.40)	1/8	口ナナナナ	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/2/14		
332	陶器	杯口蓋	5032~84 既製	2007/6/28		(2.1)	1/3	口ナナナナ	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/1/8	内面に黒い破損跡あり	
333	陶器	杯口蓋	5012既製 既製	2007/6/6	11.2	(3.1)	2/3	口ナナナナ	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2007/12/20		
334	陶器	杯口蓋	50190~ 既製	2007/9/27	12.6	(3.6)	1/10	口ナナナナ	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/1/8		
335	陶器	杯口蓋	既製	2007/7/8		(1.40)	1/4	片断へ字面有り	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/1/8	外表面に赤い破損跡あり	
336	陶器	杯口蓋	5019既製 既製	2007/6/6	7.0	(2.40)	1/10	片断へ字面有り(反時計 目約1/6)	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/1/7		
337	陶器	杯口蓋	5012既製 既製	2007/6/6	8.0	(1.80)	1/8	口ナナナナ	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/1/8		
338	陶器	高杯	5012既製 既製	2007/6/6	25.4	(3.7)	1/3	片断へ字面有り(反時計 目約1/6)	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/1/8		
339	陶器	皿	既製	2007/7/8		(3.80)	1/3	口ナナナナ	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/1/8	片断へ字面はみだり 片断へ字面はみだり	
340	陶器	法螺蓋	5019既製 既製	2007/9/27	15.0	(6.7)	1/4	口ナナナナ	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/1/8		
341	陶器	壺	既製	2007/7/8	32.2	(5.4)	1/3	口ナナナナ、破損	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/1/8		
342	陶器	鉢	5012既製 既製	2007/6/6		(1.80)	1/10	口ナナナナ	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/1/7	外面に黒い破損跡あり 上部破損跡の割れ目あり 上部破損跡あり	
343	陶器	壺	5012既製 既製	2007/6/6	18.0	(6.0)	1/3	口ナナナナ	口ナナナナ	口ナナナナ	良好	2008/1/7	片断へ字面はみだり 片断へ字面はみだり	

VI 自然科学分析

1 調査資料の分析にあたって

西川遺跡第3次調査における、掘立柱建物跡 (SB66-pit9) から建築部材と推定される木材が出土した。ピットの埋土が粘土質で、水分を含んでいたなどの好条件が揃っていたことから、唯一、植物遺存体が出土した。

出土状況としては、ピットの中央に垂直に立ったままの状態であり、その状況から掘立柱建物の柱材(角材)だと想定された。下端部は加工され尖り気味であるが、上端部は平坦になっている。おそらく、掘立柱建物の廃絶時に切り取られ、廃棄されたものだと考えられる。

SB66のピットからは出土遺物が限られており、その帰属時期を十分に把握することが困難であった。南側で検出されたSB16と主軸などが揃うことから、古代のものではないかと推測される一方で、柱の掘り方が箱形でなく円形に近いものであることや近隣で中世の土坑であるSK82~84が確認されていることなどから、中世まで下る可能性も否定しきれなかった。

そこで、このSB66の帰属時期を明らかにすることを目的として、出土木材の年代測定を行うこととした。年代測定は放射性炭素年代を加速器質量分析する手法とし、最外年輪部と内部の年輪部分の2箇所を分析した年代値を、ウイグルマッチングによって絞り込む方法とした。併せて、木材の樹種同定も行うこととし、株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。

2 木材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

(1) はじめに

西川遺跡第3次調査において、飛鳥時代以降と推定される掘立柱建物が出土された。ここでは、この掘立柱建物の柱材の樹種同定を行った。

(2) 試料と方法

木材試料は、掘立柱建物 (SB66-pit9) の柱材である。試料は、木材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)について、刺刀を用いて薄い切片を剥ぎ取り、ガムクロールで封入して、永久プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、光学顕微鏡で木材組織を観察・同定した。

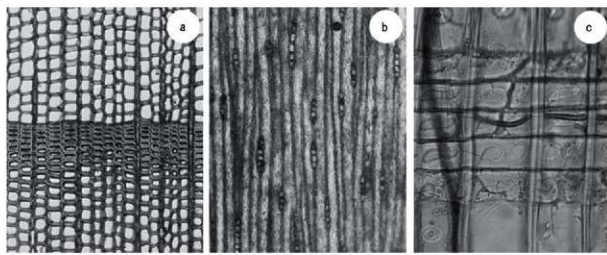
(3) 結果

同定した結果、常緑針葉樹のコウヤマキであった。以下に、同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を示した (Fig. 42-a~c)。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb.
et Zucc. コウヤマキ科

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかである。分野壁孔は窓状である。放射組織は5細胞以下の背の低いものが多い。

コウヤマキは、日本特産の1属1種の常緑高木である。本州の福島県以南・四国・九州の宮崎県の暖帯上部から温帯の山地に分布する。材は、耐久性・耐水性・耐蟻性に優れ、棺材のほか風呂桶あるいは建築材などに良く使われる。



(a: 横断面 200 μ m, b: 接線断面 200 μ m, c: 放射断面 50 μ m)

Fig. 42 木材組織の顕微鏡写真

3 放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ
AMS年代測定グループ

(1) はじめに

三重県鈴鹿市に位置する西川遺跡第3次調査より検出された試料について、加速器質量分析法（以下、AMS法とする）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調整データは以下の表のとおりである（Tab. 2）。

試料はSB66-pit9より出土した柱材（コウヤマキ）である。柱材の断面を観察したところ、樹皮や辺材は確認できなかった。また、芯を持たないことが確認された。柱材の残存年輪数は58年輪で、外側から1～5年目（PLD-11240）と51～55年目（PLD-11241）の2箇所をウィグルマッピング用に採取し、Fig. 43に試料採取位置を示した。

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5 SDH）を用いて測定した。得られた¹³C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹³C年代、暦年代、ウィグルマッピング法による最外試料の暦年代を算出した。

(3) 結果

Tab. 3に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年代に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹³C年代、¹³C年代を暦年代に較正した年代範囲、ウィグルマッピング結果を、Fig. 44にウィグルマッピング結果をそれぞれ示す。暦年代に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹³C年代はAD1950年を基点として何年前かを示した年代である。¹³C年代（yrBP）の算出には、¹³Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹³C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹³C年代がその¹³C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正、ウィグルマッピング法の詳細は以下の通りである。

暦年較正 暦年較正とは、大気中の¹³C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹³C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹³C濃度の変動、及び半減期の違い（¹³Cの半減期5,730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹³C年代の暦年較正にはOxCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された、¹³C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹³C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

ウィグルマッピング法 試料の年代を得る上で問題は、¹³C年代値から暦年較正を行う際に較正曲線に凹凸があるため、単一の測定値から高精度の年代を決定するのが難しいという点である。ウィグルマッピング法では複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて、試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で信頼性のある年代値を求めることができる。

測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の¹³C年代値から暦年較正を行い、得られた確率分布を年輪幅だけずらして、すべてを足し合わせることでより最外年輪の確率分布を算出する。この確率分布より年代範囲を求める。

(4) 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行い、PLD-11240と11241を用いてウィグルマッピング法により最外試料の暦年代を求めた。最外試料（1～5年目）の2 σ 暦年代範囲は344-432calAD（95.4%）であり、古墳時代に相当する。

柱材に樹皮や辺材が確認できなかったため、柱材最外試料の外側にある程度の年輪数があった可能性がある。したがって、柱材原木の伐採年は344-432calADよりは新しいと考えることが妥当だろう。

4 分析結果について

分析の結果、SB66-pit9出土の木材は、常緑針葉樹のコウヤマキであり、最外試料（1～5年目）の2 σ 暦年代範囲が344-432calAD（95.4%）という結果であった。

コウヤマキは材木として丈夫で朽ちにくく、水に強いなどの特性から、古くから棺桶として多く利用されてきた樹種である。加えて、平城京をはじめとした建物跡などでは、ヒノキ6割に対し、コウヤマキも4割程度用いられていたことが確認されており（伊藤 2004）、古代から建築部材としての利用も多くみられる。このことから、

当試料が掘立柱建物の部材と考えても矛盾がなく、建物の柱材の一部であったことが裏付けられた。

一方で、年代値については想定外の結果であった。分析前は周辺の遺構や出土遺物のあり方から、古代頃の年代値かあるいは中世に偏った値になるだろうと考えていた。しかしながら、分析結果は344-432ca1ADという、古墳時代前期～中期に該当する年代値が示された。この結果から、ひとまず中世まで下らせて考える必要性は否定されたと考えられるが、想定以上に古い値が示されることとなった。

分析試料には樹皮や辺材が確認できなかったことから、外側にある程度の年輪数を想定するべきと報告されているが、それでも考古学の成果から推定される飛鳥時代～奈良時代までは少なく見積もっても200年以上の時間幅があり、疑問を抱かざるを得ない。西川遺跡の出土遺物には古墳時代前期や中期まで遡るものはもちろん、飛鳥時代前半のものでさえほとんどないことから、考古学の成果からはこの年代値に疑問を感じる。筆者は木製品の知識が乏しいため結論することはできないが、ある程度の年輪を認めるとしても、200年以上を認めることは難しいのではないかと考えている。

このように、掘立柱建物SB66の帰属時期については自然科学的な分析結果と考古学の成果とは矛盾することとなった。しかしながら、周辺の発掘調査の成果から、SB66は古代の掘立柱建物として考えておきたい。今後、考古学と分析科学の両方の研究の進展が必要とされる。

参考文献

- 伊藤隆夫 2004 「19. 木材考古学」『環境考古学ハンドブック』朝倉書店
- Bronk Ramsey, C. 1995 「Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program」『Radiocarbon』37
- Bronk Ramsey, C. 2001 「Development of the Radiocarbon Program OxCal」『Radiocarbon』43
- Bronk Ramsey, C. van der Plicht, J. and Weninger, B. 2001 「Wiggle matching radiocarbon dates」『Radiocarbon』43(2A)
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の¹⁴C年代』
- Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Bertrand, C. J. H., Blackwell, P. G., Buck, C. E., Burr, G. S., Cutler, K. B., Damon, P. E., Edwards, R. L., Fairbanks, R. G., Friedrich, M., Guilderson, T. P., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R. W., Resmerle, S., Southon, J. R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F. W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C. E. 2004 「IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP.」『Radiocarbon』46

Tab. 2 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-11240	遺構：SB66(掘立柱建物) Pit9 遺物 No. : 400 その他：20070727	試料の種類：生材(コウヤマキ) 試料の性状：1～5年目/58年輪 状態：wet その他：ウィグルマッピング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2%, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2%) サルフィックス
PLD-11241	遺構：SB66(掘立柱建物) Pit9 遺物 No. : 400 その他：20070727	試料の種類：生材(コウヤマキ) 試料の性状：51～55年目/58年輪 状態：wet その他：ウィグルマッピング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2%, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2%) サルフィックス

Tab. 3 放射性炭素年代測定・暦年較正・ウィグルマッピングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を暦年較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-11240 遺物 No. : 400	-23.51 \pm 0.15	1641 \pm 22	1640 \pm 20	385AD (68.2%) 430AD	340AD (86.2%) 440AD 486AD (9.2%) 532AD
PLD-11241 遺物 No. : 400	-25.04 \pm 0.17	1733 \pm 22	1735 \pm 20	255AD (44.6%) 306AD 312AD (23.6%) 340AD	245AD (95.4%) 382AD
		最外試料年代		386AD (68.2%) 427AD	344AD (95.4%) 432AD

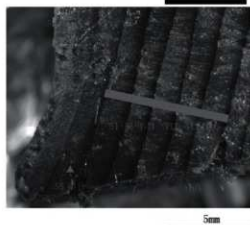
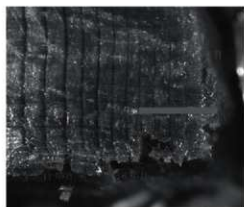
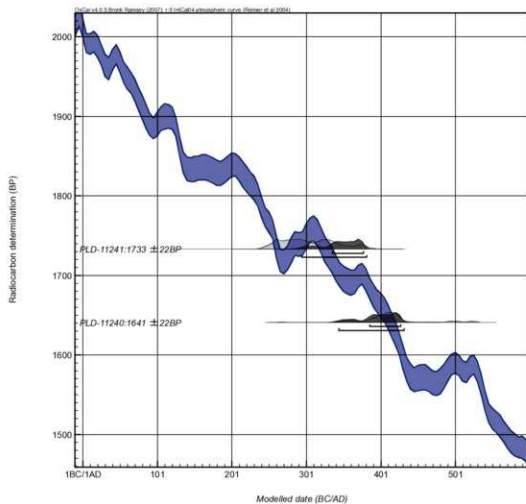


Fig. 43 試料採取位置

校正曲線とのマッチング



確率分布

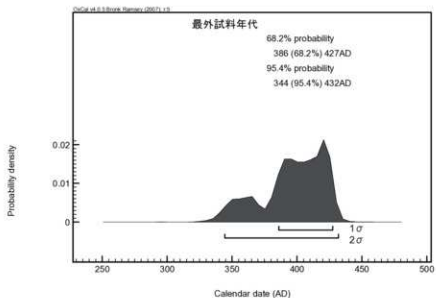


Fig. 44 ウィグルマッチングの結果

VII 調査の成果と検討課題

1 遺跡の変遷について

調査の結果、西川・郡山野・郡山野田遺跡は、主に飛鳥時代から奈良時代を中心とした古代の集落跡であることが分かった。出土遺物には旧石器時代まで遡るものが認められているが、遺構としては古墳時代以前のものはいずれも皆無であることから、飛鳥時代頃になって集落が形成されはじめる (Fig. 45)。

飛鳥・奈良時代の集落は、最初 SB14 や SB16 などの掘立柱建物であったものが、その後 SH9・10 や SH12・13 などの竪穴住居に置き換わられていき、9・10 世紀頃に入ると次第に衰退すると考えられる。その後は、一時断絶があったようで、12 世紀頃まではほとんど活動の痕跡が窺えない。おそらく、集落形成後からこの間までに道路状遺構が機能していたのであろう。

また、江戸時代後半頃になると、連層窯をはじめとした瓦窯跡が少なくとも 6 基確認 (西川遺跡第 2 次調査区で 4 基、第 3 次調査区で 2 基) された。未発掘の部分を含めると、より多くの瓦窯があったことは容易に推定でき、この地が比較的規模の大きな瓦の産地であったことが窺える。

以上のように、遺跡全体での大まかな変遷を追うことができる。西川・郡山野遺跡は古代から近世に至るまでの複合遺跡であり、その性格も集落や道路、生産地と多岐に及んできたことが窺える。

2 古代の集落について

古代の集落は、主に調査区南東隅の西川遺跡 (第 3 次) の範囲で確認された。東側に隣接する第 2 次調査の成果とあわせると、18 棟の掘立柱建物と 10 棟の竪穴住居で

構成される。遺構のあり方などから、より南側へ集落が続いており、削平されてしまっているものも考えられることから、比較的古くまとまった集落跡であったと推定できる。

今回の調査で検出された内、SB14、SH12・13 と、SB16、SH9・10 はそれぞれ重複しており、両者とも掘立柱建物の方が竪穴住居より先行することが確認されている。これらは出土遺物から前者が 7 世紀中頃～後半頃で、後者が 8 世紀初頭～中葉頃と考えられる。通常、建物跡は竪穴住居から掘立柱建物へ変化するとしており、郡山町の帰属する奄芸郡は、周辺の他地域より早く、概ね 7 世紀までに完了したとされている (竹内 1997)。しかしながら、今回の結果は掘立柱建物後に竪穴住居になるという逆転した現象が確認された。このような例は、西川遺跡第 1 次調査の掘立柱建物 SB31 と竪穴住居 SB36・37 や、末野 B 遺跡の掘立柱建物 ST242 と竪穴住居 SH243、同 ST215 と同 SH216 などでも確認されている (中森 1978, 1983)。これらのことから、今回の調査区に限ったことではないが、遺跡の成因を考える上で興味深い結果を得ることができた。

集落が形成されはじめた 7 世紀中頃～8 世紀という時期は、律令国家の形成期であり、各地で官営の建物が築かれる時期に相当する。当遺跡の所在する郡山町には古代奄芸郡の郡衙があったと推定されており、中央からの影響を受けていたことは容易に想像される。このような状況下で、集落開始期の建物跡が当時としては最先端であったと想定される掘立柱建物であることは、やはり奄芸郡衙の成立に伴って形成されたものだと思われよう。西川遺跡第 2 次調査で円面硯が出土していること、

Tab. 4 掘立柱建物一覧

遺構番号	規模			柱間寸法 (m)		棟方向	時期	備考	
	間数	桁行 (m)	梁行 (m)	床面積 (m ²)	桁行				梁行
SB14	3×2 (側柱)	5.4	2.4	12.96	1.8 等間	1.8×1.6	N-87° -E	飛鳥後半頃 (SH9・10 以前)	
SB15	2×2 (総柱か)	3.6	3.6	12.96	1.8 等間	1.9×1.7	N-47° -E	飛鳥頃 (SK4 以前)	
SB16	5×2 (側柱)	7.5	4.2	31.50	1.5 等間	2.1 等間	N-89° -E	飛鳥後半頃 (SH12・13 以前)	
SB25	2×2 (総柱)	3.0	3.0	9.00	1.5 等間	1.5 等間	N-11° -W	飛鳥～奈良 (SB63 以前)	
SB63	2×2 (総柱)	3.4	3.4	11.56	1.7 等間	1.7 等間	N-17° -E	飛鳥～奈良 (SB25 以後)	
SB66	4 以上×2 (側柱)	5.9 以上	4.2	24.78 以上	1.9+2.0 +2.0	2.0+2.2	N-89° -E	飛鳥～奈良か	建築部材出土。第 VI 章に科学分析あり
SB139	3×2 (側柱)	4.2	2.2	9.24	1.4 等間	1.1 等間	N-8° -W	近世以降	

格式の高いとされる底付きの掘立柱建物も確認されていることなどから(林 2007)、ある程度公的な性格が窺える要素もある。しかしながら、建て替えられた住居跡が堅穴住居であること、そもそも掘立柱建物自体にも方位などによる規則性が窺えないことなどから、郡衙周辺に営まれた一般的な集落であったものと想定できる。

3 中世の土坑群について

今回の調査区において中世の土坑は少なかったが、西川遺跡第2次調査の成果と併せてみると100基以上の土坑が確認されている(林 2007)。これらの土坑はいずれも直径1~3m程度の不整形で、互いに重複して存在する。すべてではないもののかなりの割合で、完形に近い山茶碗1~3個体が基底面に据え置かれたような状態で出土し、その特徴から概ね藤澤編年の第4~6型式の12世紀前後のものだと考えられる。これらの土坑群は規模や形状、出土遺物の内容等から土壌墓とは考えにくい。このような類例は管見による限り知らないため、性格を認識することは困難であるが、いくつかの可能性を指摘しておくたい。

1つ目は粘土の探掘坑の可能性である。各土坑の規模や形状、重複具合等から、第2次調査当時より石器原料の探掘坑と呼ばれているものに近い印象を持っていた。実際に、今回調査した西川遺跡第3次調査の土坑では、土坑の掘られている面はシルトが基盤となっており、その約20~30cm下層では砂が多く混じったシルト層となる。土坑自体は、砂混シルト層の上面あたりまで掘り込んだ状態で留まっていた。このことから、粘土の探掘坑の可能性が考えられるのではないだろうか。ただし、この場合完形の子茶碗の出土について明確に説明できない。

いま1つの可能性は、水に関わる祭祀的行為の痕跡である。西川遺跡第2次調査で出土した山茶碗の中には、底部外面に「井」の文字が墨書されたものが確認される。「井」は井戸の頭文字で、水を意味すると理解することができる。調査地は河芸丘陵の上であることから、慢性的に水に悩まされる地形でもある。よって、これらの土坑群が雨乞いなどの祭祀的行為の結果であったとも考えられる。ちょうど、丘陵の下の中ノ川流域に形成された高井A遺跡においても奈良時代の須恵器の杯や皿に、「井於」や「井口」、「井口」和書された墨書土器が溝から出土しており(筒井 1998)、時代は異なるものの、水にまつわる何らかの祭祀が継続されていた可能性も考えられる。ただし、このような場合では100基をこえる土坑群を掘削する意味や、山茶碗を入れるものと入れないものの差異が不明である。

いずれにしても類例がないため、その性格を明らかにするのは困難である。今後の調査の進展を期待したい。

4 近世の瓦窯について

近世に帰属する瓦窯跡として、西川遺跡においてに6基の窯跡が検出された。

近世の窯跡の発掘調査例は、伊賀市(旧阿加郡大山田村)風呂谷館跡の連磨窯1基(森前・伊藤 1984、伊藤 1996のfig.47)、度会郡玉城町岩出遺跡群の平窯1基(伊藤 1996のSF501)、多気郡明和町の瓦窯1基(伊藤 2003のSF8482)程度であり、極めて少ないといえる。また、桑名市には現存する小林栄子氏の連磨窯を実測調査した唯一の例も報告されている(藤原・石神 2005)。なお、これらはいずれも単体で確認されており、当遺跡のように6基もの瓦窯がまとまって発見された例はない。

今回確認された6基の内、4基はいわゆる連磨窯と呼ばれる形態で、残りの2基は平窯である。いずれも出土瓦の特徴から江戸時代後半のものとして推定される。今回報告した1号窯と2号窯は同范関係が確認されており、ほぼ同時期に操業されていたことが確認できる。窯跡の近くには大規模な灰原などは存在しないが、廃棄土坑と考えられるSK71なども確認されている。また、検出された窯の位置関係から、2基の窯が1つの単位となつて操業されていたと想定される。

窯跡からは椀瓦が多数出土しており、窯の構築材の一部として利用されていることはもちろん、主要な生産品であったものと考えられる。ただし、軒瓦・椀瓦の他にも窯の構築材と考えられるものも焼成されている。また、隣接するSK71やアカ道などからは瓦質製品も出土していることから、瓦以外のものも焼成していたようである。なお、瓦類の中には、製作した工人や供給先を示すような押印や刻書の例はなく、どこへ供給されたのかについては不明である。おそらく近隣の寺社を中心としたものであったのであろう。

このように瓦窯の存在から、近世の産業史を考える上で重要な知見を得ることができた。調査の周辺は「カワラヤマ」と称されており、現在でも周辺には多くの瓦が散布していた。これらの瓦窯の存在が「カワラヤマ」と呼ばれる由来となったのであろう。

5 出土物について

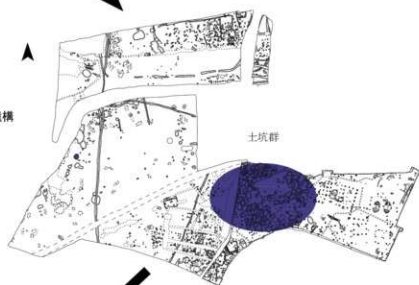
今回確認されたSK90から出土した資料は、須恵器杯Hと同杯Bが伴する事例として非常に興味深いので、ここで再度まとめておきたい。

SK90からは少量であったが、須恵器杯Bの身と蓋が2

①古代の遺構



②中世の遺構



③近世の遺構



Fig. 45 遺構の変遷 (S=1/1500)

組 (Fig. 30-100～103), 同杯H蓋1点 (同104), 土師器甕3点 (同105～107) が出土し、一括資料と捉え得る非常に良好なものである。104の杯Hは口径11.6cmと小型で、天井部のヘラ切り後不調整の簡素化された作りであるが、これが飛鳥時代後半～奈良時代初頭頃と考えられる100～104の杯Bと共存することから、少なくとも杯Hが7世紀後半～8世紀初頭までは残ることが想定される。

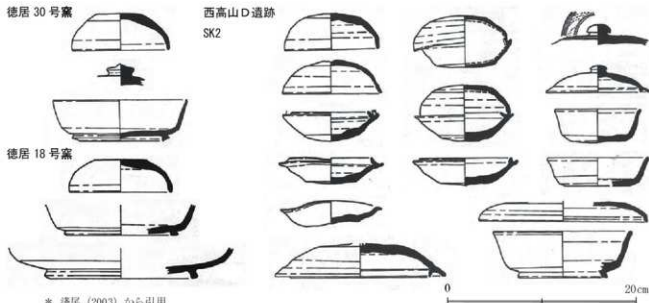
通常、杯Hは飛鳥前半頃に杯Gに置き換わりながら次第に消滅するとされ、杯Gも飛鳥後半頃には少なくなり、奈良時代前後の須恵器杯は杯Aと同Bとに集約されていくとみるのが一般的である。しかしながら、近年は陶邑古窯跡群のTG 228号窯の出土資料をはじめとして、畿内においても杯Hと杯Bの共存事例が目立っており、従来の時間的な位置づけについては慎重な態度が必要だと指摘されている (小森2005)。

これまでの徳居古窯跡群の周辺地域での編年では、一括性についてはやや疑問が残るものの西高山D遺跡SK2 (中森1983) や、徳居30号窯跡 (浅尾2003) などでは杯Hと杯Bが一緒に出土していることから、Ⅲ後期 (7世紀後半頃) まで両者が共存し、杯Hの消滅が大阪府南部窯跡群より遅れる可能性が指摘されてきた (浅尾2003)。今回のSK90の出土例は、一括性が高いことから、この現象を裏付ける格好の資料となろう。

このように、徳居窯跡群では古い要素が比較的遅くまで残ることが確認された。今後は一括性の高い資料に基づいた詳細な分析を行う必要があるが、依然として良好な資料が不足している観が否めない。未報告の資料も存在することから、これらの公表を待って再度検討したい。

参考文献

- 浅尾卓司 2003 「徳居窯跡群の須恵器生産」『Mie history』vol. 14 三重歴史文化研究会
- 伊藤裕偉 1996 『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 2003 「8 第134-8次調査」『史跡寄宮跡 平成13年度現状変更緊急発掘調査報告』明和町
- 伊藤裕偉 2006 『鈴鹿市中ノ川中流域の考古資料 研究紀要』第15-2号 三重県埋蔵文化財センター
- 小森俊寛 2005 『京から出土する土師の編年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀—』有限会社京都編集工房
- 竹内英昭 1997 「飛鳥・奈良時代の集落道路の検討—伊勢地方を例にとつて—」『研究紀要』第6号 三重県埋蔵文化財センター
- 筒井昭仁 1998 『一般国道23号線中勢道路 (6工区) 建設事業に伴う 高井A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
- 中森成行 1983 『郡山遺跡群発掘調査報告1—西高山D遺跡・西高山古墳・西川遺跡—』鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会
- 林 和範 2007 「IV-3 西川遺跡 (第2次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第9号 鈴鹿市考古博物館
- 藤原 学・石神敏親 2005 『小林栄子瓦窯実測調査報告』桑名市教育委員会
- 森前稔・伊藤久嗣 1984 「VII 阿山郡大山田村 風呂谷館跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域内埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会



* 浅尾 (2003) から引用

Fig. 46 須恵器杯H・Bの共存事例 (S=1/4)

写真図版



写真1
中ノ川から河芸丘陵を望む
(北から)



写真2
伐採前の調査区(北西から)



写真3
伐採後の調査区(北西から)



写真4 調査区全景①(垂直)

写真5
調査区全景②(東上空から)



写真6
調査区全景③(南西上空から)

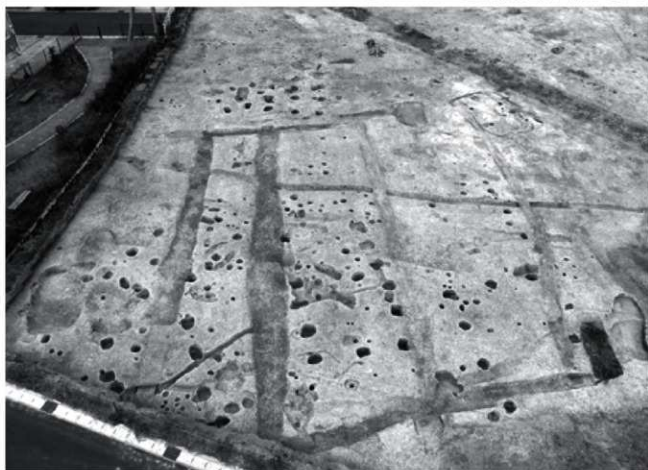


写真7 西川遺跡第3次調査区全景(東上空から)



写真8 SH12・13 検出状況（南から）



写真9 SH12・13 カマド検出状況（南から）



写真10 SH12・13 遺物出土状況（南から）



写真11 SH12・13 完掘状況（南から）



写真12 SH9・10 完掘状況（南から）

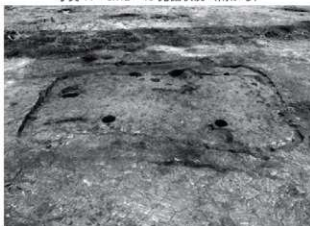


写真13 SH64・65 完掘状況（南から）



写真14 SH145 完掘状況（西から）



写真15 SH145 カマド検出状況（西から）



写真 16 SB14 完掘状況 (東から)



写真 17 SB15 完掘状況 (南東から)



写真 18 SH12・13、SB16 完掘状況 (東から)



写真 19 SB16 完掘状況 (西から)



写真 20 SB25・63 完掘状況 (南から)



写真 21 SB66 完掘状況 (東から)



写真 22 SB139 完掘状況 (南から)



写真 23 SD33 完掘状況 (北から)



写真 24 SK2 半截状況 (西から)



写真 25 SK2 遺物出土状況 (西から)

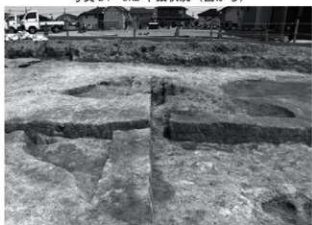


写真 26 SK3 掘削状況 (西から)



写真 27 SK4 掘削状況 (北から)



写真 28 SK5 半截状況 (東から)



写真 29 SK26 完掘状況 (西から)



写真 30 SK31 遺物出土状況 (上部) (北から)

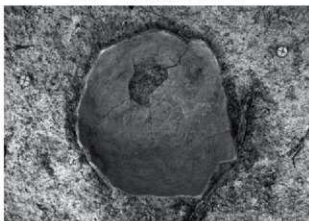


写真 31 SK31 遺物出土状況 (下部) (北から)



写真 32 SK34・SD33 完掘状況 (南から)



写真 33 SK34 遺物出土状況 (南から)



写真 34 SK90 掘削状況 (西から)



写真 35 SK90 遺物出土状況① (西から)



写真 36 SK90 遺物出土状況② (東から)



写真 37 SK96・SD33 土層断面 (南から)



写真 38 SK115 完掘状況 (南東から)



写真 39 SK115 遺物出土状況 (北から)



写真 40 2区西の北東部の完掘状況（北西から）



写真 41 SK150 完掘状況（南から）



写真 42 SK157 完掘状況（南から）

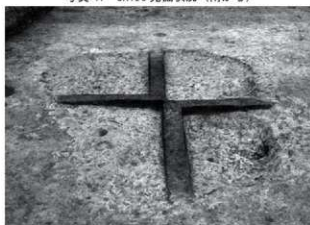


写真 43 SK165 掘削状況（西から）



写真 44 SK167 完掘状況（北西から）



写真 45 SK167 遺物出土状況（西から）



写真 46 SK170 掘削状況（北から）



写真 47 SK200 完掘状況（南から）



写真 48 SC1 完掘状況 (北東から)



写真 49 SC1(SD24) 土層断面 (南から)



写真 50 SC2 完掘状況 (東から)



写真 51 SC3 掘削状況 (西から)

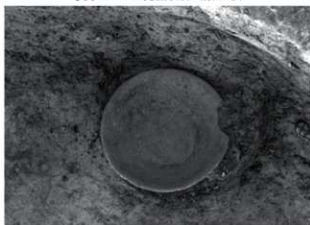


写真 52 SK82 遺物出土状況 (北東から)



写真 53 SK83 遺物出土状況① (南西から)



写真 54 SK83 遺物出土状況② (西から)



写真 55 SK84 遺物出土状況 (南西から)



写真 56 1号窯検出状況（西から）



写真 57 1号窯掘削状況①（西から）

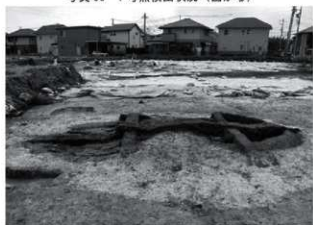


写真 58 1号窯掘削状況②（北から）



写真 59 1号窯土層断面（東から）



写真 60 1号窯完掘状況①（西から）



写真 61 1号窯完掘状況②（北から）



写真 62 1号窯完掘状況③（南東から）



写真 63 2号窯掘削風景（南から）



写真 64 2号窯検出状況（南から）



写真 65 2号窯完掘状況（南から）



写真 66 2号窯通埡口断面（南から）



写真 67 1・2号窯の位置関係（西から）



写真 68 遺構検出作業（南東から）



写真 69 遺構掘削作業（西から）



写真 70 現地説明会の様子（北東から）



写真 71 現地説明会遺物説明の様子（北から）

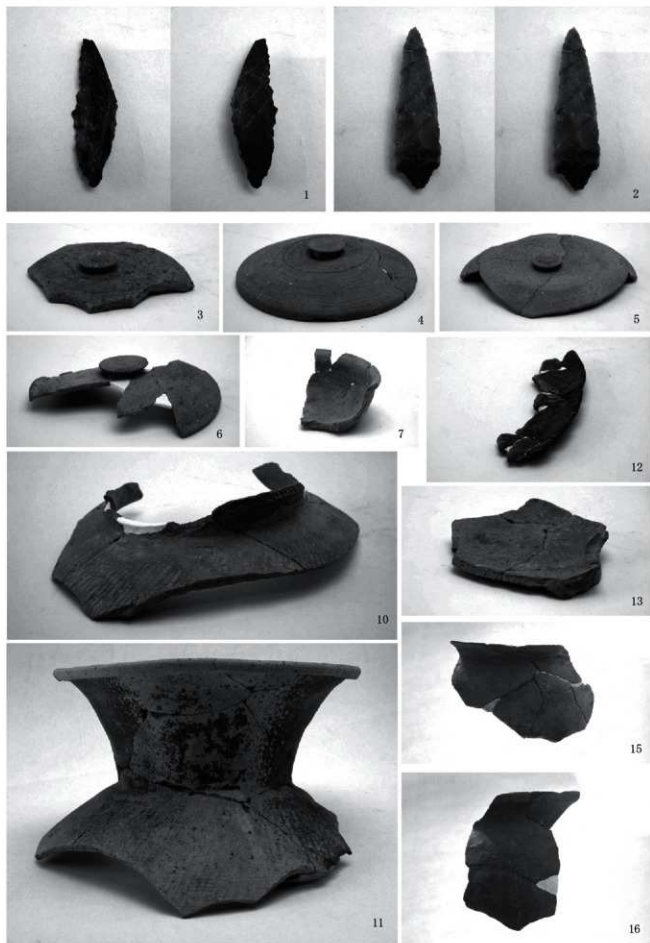


写真 72 出土遺物①

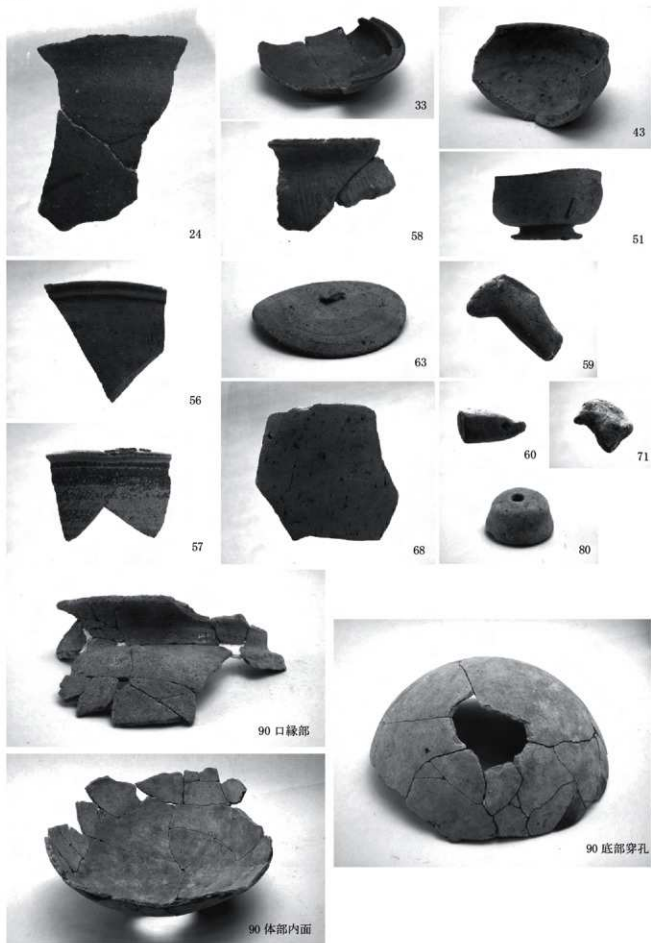


写真 73 出土遺物②

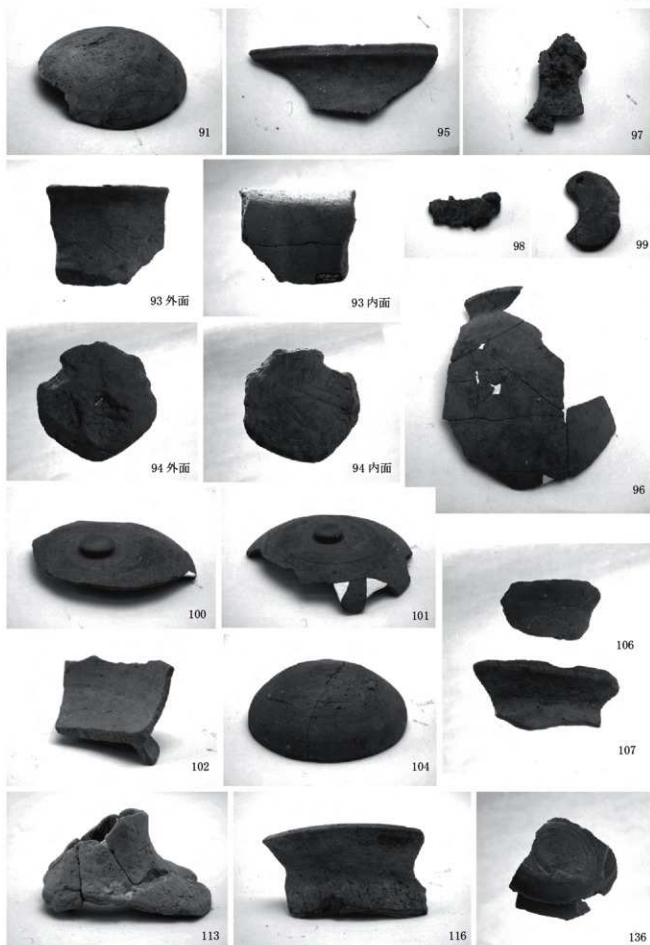


写真 74 出土遺物③



写真 75 出土遺物④

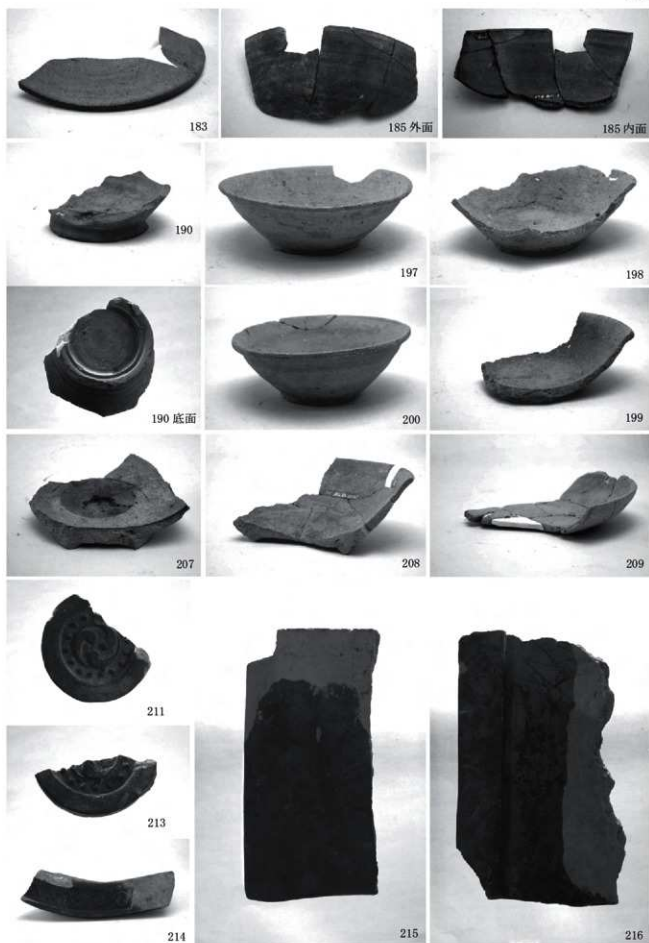


写真 76 出土遺物⑤

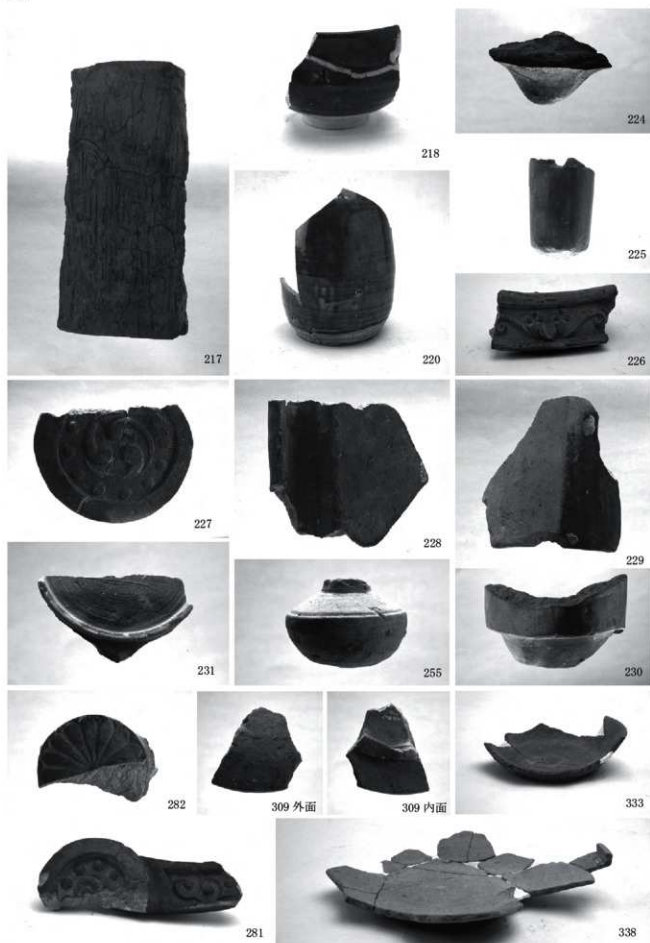


写真 77 出土遺物⑥

報告書抄録

ふりがな	にしかわ(だいさんじ)・こおりやまの・こおりやまのだいせき はつくつちょうさほうこくしょ								
書名	西川(第3次)・郡山野・郡山野田遺跡 発掘調査報告書								
編著者名	田部 剛士								
編集機関	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館								
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地 TEL 059(374)1994								
発行年月日	2009年3月31日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
にしかわ	すずかしこおりやまちょう	鈴鹿市郡山野町	24207	34°	136°	2007年 5月23日 ～ 2007年 10月12日	6,400 m ²	宅地造成 工事	
西川				675	48'				31'
こおりやまの					57"				60"
郡山野				271	34°				136°
こおりやまのだ					48'				32'
郡山野田			673	58"	1"				
				34°	136°				
				48'	31'				
				56"	56"				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
西川	集落	飛鳥・奈良 ・鎌倉	堅穴住居、掘立柱建 物、土坑、溝、道路 状遺構、ピット	土師器、須恵器、山茶椀、土馬、 土鍾、紡錘車		古代の集落跡を確認			
郡山野	集落・ 生産地	飛鳥・奈良 ・鎌倉・江 戸	堅穴住居、掘立柱建 物、土坑、溝、道路 状遺構、瓦窯	土師器、須恵器、黒色土器、灰 軸陶器、山茶椀、青磁、近世陶 磁器、瓦、円筒状土製品、鉄斧、 石製模造品、有茎尖頭器		古代の集落跡、江戸時代後 半の瓦窯跡を確認			
郡山野田		飛鳥・奈良	土坑、溝	土師器、須恵器		遺構は少ない			

西川（第3次）・郡山野・郡山野田遺跡 発掘調査報告書

発行日 2009年3月31日
編集・発行 鈴鹿市
鈴鹿市考古博物館
〒513-0013
三重県鈴鹿市国分町224番地
TEL 059(374)1994
FAX 059(374)0986
E-mail: kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp
URL: <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>
印刷 早川印刷株式会社

Excavation Report
Suzuka City, Mie Pref., Japan

Nishikawa Site (3rd)
Koriyamano Site
Koriyamanoda Site

March, 2009
Suzuka Municipal Museum of Archaeology